
聖剣伝

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖剣伝

【Nコード】

N53780

【作者名】

上屋

【あらすじ】

人と魔族が争う時代

勇者に封印された魔王はとうとう五百年ぶりに復活した
そして魔王は再び魔族を束ね人類を倒すべく動きはじめた

だが復活した魔王の尻にはなぜか伝説の勇者の聖剣が刺さっていた！
しかしそのことに一向に気づかない魔王、なんだか気まずくて指摘
できない部下たち、

尻に剣が刺さったまま真面目に魔王業を邁進する魔王を部下たちは

必死に止める

どうにもツッコむにツッコめない状況に今日もストレスがたまる側
近の魔族、主人公ギード君の明日はどっちだ！

魔王遭遇編巻 尻に剣を刺してはいけません

『それは真なる魔、真なる闇

剛にして轟、粉碎と崩壊の主 虐殺と暴虐の奏者

即ち

我ら真なる魔に仕えん

覇軍として、魔群として、走狗として

我ら真なる魔王に仕えん

我らが命、只魔王の道具として仕えん』

子供の頃からの手習いで覚えた魔王様に捧げる忠誠句を自然とつぶやいてしまう。

我ながら緊張し過ぎだと思うが、現在の状況を考えればやはり仕方がない。

人と俺達魔族の戦いが始まって現在までで七百年程の時が経っている。

かつて我ら魔族をまとめ上げ、憎き勇者を筆頭とした人族と互角以上の戦いをした魔王様が勇者に封印されて早五百年。

その間に俺達魔族はせまる人族に抵抗し続けていた。

だが、この世界に永久はない。

とうとう封印が弱まり魔王様はつい先日、五百年ぶりにこの地上に顕現なされたのだ。

そして、俺はまだ弱輩でありながら光栄にも剣や魔法の技術を評価され魔王近衛隊『朱龍部隊』に抜擢された。

そしていまから偉大な魔王様へ顔見せに行く途中というわけだ。

広々とした魔王城の中央に位置する謁見のための荘厳な大広間

に通され、俺は跪きながら魔王様の到着を待った。

しばらくの胃の痛くなる緊張の時間が過ぎる。やがて小さな振動と、何かがぶつかるとような音が徐々に近づいてきた。

それが足音だと気づき顔を上げる。遠く離れた位置にある入口から入ってきた魔王様と目が合った。二メートルを超える逞しき巨軀、全身を覆う禍々しき鎧、黒曜石を思わせる漆黒の肌にまるで血管のごとく線を描く煉獄の朱。頭髮は生えておらずその目には鬼火の青が暗く輝いていた。

俺は引きちぎれそうな威圧感を感動と憧れから生ずる昂揚で相殺する。

「……汝が朱龍に新たに属するものか。二十歳と聞いていたがそれよりも若く見えるな」

重く力を持つ言葉が空間に響く。

「っはい！ 自分はず！ ギードと申しますッ！」

玉座に腰かける魔王様と俺が跪く場所は離れており、聞こえないことがないようにと喉も裂けよとばかりに声を張り上げた。

「……うむ、よい声を出すな、これからも任務に励むがよい」

魔王様はそういい残すと玉座を離れ元来た入口へとゆっくり歩き出した。

よっしゃー！これで俺も出世株、実家のじいさんやお袋にもあとで報告しなきゃな！あと早く嫁さん探して……ん？

そこまで考えて俺の思考は急に停止した。

あれ？

それは退出していく魔王様の後ろ下半身、いわゆる右臀部の位置にあった。

……イヤイヤ。

それはおそらく七十センチほどの長さ、持ち手と思われる部分は何か装飾が施されている。

……イヤイヤイヤ。

金属で出来ている部分は光沢と色合いから察すると超金属ミスリル以上の質の金属が使われているようだ。

……イヤイヤイヤイヤ。

ちょっと待て。

というかあの形は小さな頃にさんざん覚え込まされたアレに遠目からだが特徴が酷似していて……

……イヤイヤイヤイヤ。有り得ない、有り得ない。

出口から出て行く魔王様の背中を見送り、閉まるドアの音を聞きながら俺は必死に今見た物が何なのか考えていた。

何でだ……？

……何で魔王様の尻に伝説の勇者の剣みたいなのが刺さっているんだ？

魔王遭遇編式 見た物を偽ってはいけません(前書き)

一発ネタで思いつきました

もしよろしければ読んだ方なんでもいいですので感想をお願いします
す

魔王遭遇編式 見た物を偽ってはいけません

壁や床一面をくまなく覆う強固なレンガ、等間隔に配置された魔術照明が俺のイマイチ釈然としない顔を照らす。

謁見が終わり俺は魔王城の広い廊下をトボトボと歩いていた。

頭の中では今見たものがグルグルと回っている。

……特徴からして、あれは恐らく……いやまさかそんなことは……しかし最強の防御力を持つ魔王様に突き刺さっているということ……は……あれはつまり……

『聖剣』

かつて魔王様を封じ込めた憎き勇者が使ったと言われる伝説の聖剣。聖龍を模した柄とミスリルをはるかに凌駕するハイオリハルコンと呼ばれる独自の輝きを放つ超金属によって造られた刀身をもつ、神々の武器。

しかしそれは大火山アグニでの魔王様を封じ込める戦いで行方不明となっていた。

その後、俺達魔族は魔王様を封じ込めるキーアイテムとなるその剣を見つけた場合、即判別出来るようにと子供のころから聖剣の特徴を覚え込まされていた。

それとピッタリなんだよなあ、特徴が。

「おい、お前か？朱龍部隊の新入りの魔人族のギード・ウォーカー
というのは」

「ッ！」

バリトンの低い渋めな声いきなり名前を呼ばれ、俺は後ろを振り向いた。

……山がある。

咄嗟にそう思う。先ほどの魔王様の体躯よりさらにでかく、重厚な鎧で大量の筋肉を覆っていた。その左目には深い刀による古傷が鎮座し、武骨な牙が口の両側から突き出ている。まるでそれは肉食の凶暴な猪と評すべき面構え。

朱龍部隊の長、獣人族でも屈指の巨漢を誇るグランオーク種出身のゴルン・ドーガ隊長だ。

「はっはい！」

俺はまたも緊張で上擦った声で返事をした。

……つうかこの人、入隊の面接の時も会ったけど顔こええ！ 超こえええ！

どうやら俺の緊張を読み取ったらしく口元から笑い声らしき音が聞こえてくる。威圧感のある顔面が更に歪に歪んだ。

……ひよつとして笑っているのか？ それは笑顔なのか！？ グランオーク種伝統の呪いのかけ方じゃないよな！？

「まあ、そう堅くなるなギードくんよ。

何か困ったことや聞きたいことがあるば遠慮なく来なさい。

ああ、それからこれは私のおさがりだがささやかな入隊祝だ。良ければ使ってくれ」

「えっ、あっありがとうございます。た、大切に使用させていただきます……」

渡されたのは一振りの剣、あまり派手な装飾はないが質実剛健とした頑丈な拵えだ。刀身を鞘から引き抜いて俺は驚いた。

ミスリル製の高級品である。新入りにおいてそれとくれてやるほど

の安物ではない。

「……こんな高いもの頂けませんよ！」

返そうとする俺を太い腕で押し止め、ゴルン隊長は更に豪快に笑った。

……だからこええって。

「新入りよ、武器は出来るだけいいものを使っておけ。戦場では極僅かな差が命を分けるぞ。

飾り気がないのは私の趣味だ。欲しければ自分で着けておけよ」

「……はい」

俺は見た目で単純に怖がっていた自分を恥じた。この隊長は真剣に部下を心配してくれている優しい上官ではないか。

そうだ、この人になら相談できるかもしれない。俺は意を決して声を出した。

「あのっ、俺、さっき魔王様に謁見したんですけど！」

「ッ！？」

その瞬間、隊長はびくりとその巨塊の体を震わせ、急に落ち着きを無くす。

「おっ、おおっ！そ、そうか、どうだ魔王様は、い、偉大な方であつただろう！？」というか偉大だな！」

……明らかに動揺している。これはやはり言ったらマズいのか？
どうする？ どうする？ ええいつ、ならば！

「ま、魔王様つて、ええと、か、変わったしっぽしてましたよね！」

「……えっ？」

一瞬の沈黙、時が止まる。……やはり言うべきじゃなかったか？

「……あ、ああ！なんというか、やはり我らのような下々の者とは違うな！これぞ魔王という特徴的な尾だな！」

ああ、そうかこの人もか……

お互いに流れるこのなんとも言えない白々しい空気。

それを突然切り裂くように高く可愛らしい声が投げかけられた。

「あれーゴルンさん、その人新入りさん？」

隊長の体という肉の巨壁の横からヒョイツと可愛らしい顔が飛び出す。

そのあまり高くない背丈は巨岩のごとき隊長と並ぶと一層小さく見えた。

肩まで伸ばした紫の髪と気の強そうな凜とした眼差し、整った顔立ちに纏う少女にしては妖艶な雰囲気は、恐らくはこの娘が妖人族、サキユバス種かその亜種の出だからだろうか。

そして何よりも特徴的なのは、

「あ、ああ、この新入りはギードくんだ

ギードくん、この娘はメイド見習いのアイアだ」

「よろしく！ ギードさん」

その小さな全身を包むフワフワとしたメイド服。

「あ、はいよろしく」

差し出された手と俺は力無く握手を交わした。

……なんかこういう押しの強そうな娘って苦手なんだよな、いや

それよりもなんでただのメイド、いやメイド見習いなのにこんな軍人になれなれしいんだよ。俺より年下っばいのに。

「ああ、そういえばギードさんはもう魔王様にあったの？」

「あ、ああもう謁見はしたよ」

「やっぱり凄いよね魔王様！」

「うん、確かにあの威圧感は凄まじいものが……」

「お、おいアイア、ギードは仕事があるからもうこのへんで……」
隊長の制止を聞かず、アイアは笑顔のまま話を続ける。そりゃもうまぶしい無邪気な笑顔で。

「でもー、一番凄いのはアレですよ！」

お尻に剣がさしてある人なんて私初めて見ましたよ！」

……うん、やっぱり俺はこの娘が苦手だ。

魔王遭遇編参 だから見たものを偽ってはいけません

「あ、じゃあ仕事あるからそろそろいくねー！じゃあねギードくん」

ものの見事に空気を読まないダメイド、アイアが用事があるところの場を颯爽とさり、気まずい空気のまま残されたのは俺と隊長。

「あの……魔王のアレってやっぱり勇者の聖剣……ですよね」
なんとも言えないアレな状態の中、隊長は口を開いた。

「お前も……やはりそう見えるか」

「だってどうみても……剣ですもんね、尻にぶっ刺さってる」

顔をわずかに上げどこか遠くを見つめながらゴロン隊長は語り始めた。

「……我等幹部連中が魔王様の復活に立ち会ったすでにその時から剣は尻に刺さっていた。そして魔王様はそのことに向に気づいておられなかった。

私達はそれがまさか剣だとは思わなかった……まさか、魔王様が尻に剣を刺したまま復活するはずがない、と」

マジかよ。

「……いやさすがにそれは最初に言ったほうが」

「そう、誰かが最初に言うべきだったのだ。だが、魔王様は極めて有能な方だった……復活してから半月ほどで今では城の様々な部署を周り指揮を取っておられる」

それは、つまり。

「……それ故に魔王様の尻に『何か』が刺さっていることは城の全ての者が知っておる」

「……最悪だ」

「もしお前が魔王様であり今の状態で真実をしらされたら……どうする？」

「死にたくありません」

「だろうな、そしてあれが勇者の聖剣だと否が応でも思い知らされる事態が発生する。」

ある日、魔王様をある部下が後ろから呼び止めたのだ。魔王様は颯爽と振り返った。そしてその動きで振り回された聖剣で……
傍らにあった城の柱が一本切断されたのだ」

「……え”ええッ！」

えっ？ マジで？ あの太い柱が？

「魔王様にはなんとか工事ミスと知らせたが、私はあれが正しく勇者の聖剣だと思いついた。結局私達は魔王様に真実を告げられず今日まで来てしまった……」

鬼かあんたは

「つまり気まずくてもう言えない状況になってしまったと……」

隊長は顔を下げ拳を強く、骨よ砕けよとばかりに握りしめた。その残された右目には暗く深い後悔がうつる。

「そうだ、そして城の中では『魔王様のアレは尻尾だよ』派や『魔王様のアレは魔王様のドツキリだよ』派、

『魔王様のアレは心の汚いやつのみに見えるんだよ』派、『引つ張ると勝手に走り出すんだよ』派、

果ては『押し込むと中身が勢いよく危機一髪な感じで飛びだすんだよ』派などとふざけた派閥まで現れ分裂してしまっただ」

いやみんなふざけてるよ、ふざけ倒してるよ。この城には鬼しかいないのかよ。

「……ギードよ、城の臣下がまとまらずこっとなったのは私にも責任があるのだ。だが私には魔王様を傷付けず真実をお知らせする術がない。全く情けないものだ……」

いや臣下が全員『魔王様に刺さってるアレは伝説の聖剣だよ』派になってもどうしようもないだろ……

「あの……魔王様に気づいてもらうというのはどうでしょうか？
それで魔王様が剣を抜いてあとはみんなで知らぬふりをすれば……
ダメージは最小限になるのでは」

ゴロン隊長は哀しげに俺を見つめた。

「それは何度か試したのだ。夕食のステーキにナイフを刺したまま出してみたり、戦場で尻に刺し傷を追った男の話をしてみたりしたが気づいてはくれなんだ……」

……この人解っててやってないか？

「ギードくんよ」

「は、はい……」

「どうやら君は冷静に物事を見つめる才能があるようだ、どうかその才能を私に貸してくれないだろうか？」

ちょっと待てなんか嫌な予感がするぞ。

……それはつまり」

「君を魔王様の近くに置くからなにか自分から気づくきっかけやヒントをつかんでくれないか」

「……マジっすか」

かくして俺と魔王様のツッコむにツッコめない日々が始まった。

日常七転八倒編巻 同僚とは仲良くしなくてははいけません(前書き)

更新遅くてすいません

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます

もしよろしければお名前を教えてくださいませんか？

日常七転八倒編巻 同僚とは仲良くしなくてはいけません

世の中には不思議なものなどない、と名前は忘れたが昔の名のある賢者がいつていたのを思い出す。

世界に起こる物事は全て理由と仕組み、つまり因果と結果があり、理解出来ない、解明出来ないものなどないという。

そしてもしどうしても理解も解明も出来ないことがあればそれは、それに立ち会っている者の能力に限界があり目の前の自称の解明に足りていないというだけなのだ

正直なにやら傲慢なのか、それとも個々の能力を高めるよう啓蒙しているのか、あるいは回りくどい単なる謙遜なのかわかりにくい言葉だが、今の俺の状況でもしそんな言葉を投げかけられても、その、なんだ、正直キレル。

俺の目の前には全魔族の尊敬と崇拜をその剛毅な背中に一身に背負う伝説のカリスマ、魔王様がいらっしやる。

そしてその逞しき右臀部、つまり尻には恐らくは勇者が使っていた聖剣が雄々しく突き刺さっているのだ。

どうしてこうなった。

どうしてこうなった。

魔王様の護衛として、ゴルン隊長に強制的に付かされて早3日、俺は全くこの環境に馴れることは出来ない。

そもそも魔王様は聖剣に気づいている素振りはなく普段通りに振る舞っている。

護衛として側で観察をして解ったことだが魔王様はまず排泄をしない。食べた物は全てエネルギーとして完全に消化されるようだ。そして風呂に入る習慣もない。

体の表面には常に殺菌と洗浄の恒常作動魔法が展開しているため必要がないのだ。

……たぶんそれが魔王様が聖剣に気づかない原因の一助になったのだろう。

最も驚いたことは魔王様が椅子に座ろうとすると、聖剣の刀身がグニヤリと曲がり座るのに邪魔にならずなおかつ魔王様の死角にくるよう変形するのだ。

……なんなんだこの剣は？

一瞬チラリと『魔王様のアレは実は尻尾』派の説がうかんだが俺はそれを頭から振り払った。あんな尻尾があつてたまるかよ。

「なんだ、お主は？」

それほど御館様の尻が珍しいのか？」

「何々？ギードってそっちの趣味あんの？ ちょっと悔い改めるよお前」

色褪せた白髪を背中であとめた白骨。人類の極東の地の戦闘民族、通称サムライの戦闘衣装である鎧と袴に身を包み、腰には同じくサムライの旗印である太刀を下げたスケルトンのムラマサ、

青ざめた顔色と顔面のつきはぎな傷跡、質素でありながら細やかな刺繍の入ったローブと帽子をまとい、首には人類で広い信仰を集める十字架を下げ杖を携えたゾンビの僧侶、グラス。アンデッド二人組がそれぞれが掠れた声と無駄に明るい口調で同時に語りかけてきた。

「……やかましいわお前ら」

ああ、もうこいつらめんどくさい。

この二人組、いや正確には死体だから二遺体か？

魔王様の護衛として3日前に配属された際に一緒に組まされたのだ。コイツらは元は人類なんだがアンデッドなので魔族側で傭兵として雇われている。

本来ゾンビやスケルトンなどは呪文で使役される存在であり、コイツらのように自由意志をもってペラペラ喋るのは皆無なはずなのだ。

ゴルン隊長からはとかく腕が良いのと義理堅いのが気に入られて俺と一緒に護衛に配属になったそうだ。……いや正直アンデッドとはいえ元人類を魔王様の護衛につけるってどうよ？

「ひよつとしてギードは御館様のアレが気になっているのか？

……実は拙者は『押し込むと中身が危機一髪な感じで飛び出すんだよ』派なのだが」

「だからよームラマサ、それは絶対ないって。あ、おれは『魔王様のおれは魔王様のドツキりなんだよ』派ね」

なんかこいつらまでふざけた派閥に入り始めたな……

「あのおな、お前ら

俺達は護衛なんだよ、ふざけた派閥がどうのこうのより真面目に護衛しろよ！」

「心配せずとも報酬分の骨を折る覚悟と用意はある、動揺めさるな」

「なに仕事はきちんとやるさ、このグラス脳みそは腐っても魂までは腐っちゃいないぜ！」

「ぐずぐずの死体共が何言ってるんだよ、大体グラス！お前はホントに僧侶か？ ゾンビに神聖呪文とかつかえんのかよ！」

グラスは堂々と胸をはり答える。

「もちのロンよ！こちとら神聖呪文から回復に補助呪文まであらた出来るぜ。要は気合いと根性の問題よ！」

……気合いと根性で神聖呪文に耐えるアンデッドってなんだよ。それ以前にゾンビに回復とか受けたくねーよ。

なんだかどつと力が抜けた。なんでコイツら死んでるのに無駄に元気なんだよ？

「……ギードよ」

「はっはいッ！」

突然魔王様に呼びかけられ、思わず声が裏返り緊張で背中が硬直する。側ではグラスが俺をみてニヤニヤ笑っていた。チクシヨウいつかコイツを天に帰してやる。

「なにやら戯れているようだが、一つ魔法医を呼んできてくれ、城の二階に医務室がある」

「ッ！ま、魔王様、どこか御具合が悪いのですか！？」

まさか復活が完全ではなかったのか？ 不安が俺の胸中をおおっていく。

「何、心配など不要だ。」

ただ復活してからいまいち力が出にくくてな、ふっ勇者めにやられた古傷が今頃になって疼きよるわ」

……尻ですか？やっぱり尻が疼くんですか？

日常七転八倒編式 怪我人の部屋の前では静かにしましょう(前書き)

毎度読んで下さるかたありがとうございます
少し書くペースを早めてみました

日常七転八倒編式 怪我人の部屋の前では静かにしましょう

ミシミシミシときしむ音が廊下から響く。

その音を聞き俺は魔王様の部屋の扉から待ちかねたとばかりに顔をだした。

まず目に入ったのは廊下の天井を埋め尽くす程の恐らくは今が冬だからだろう葉のない枝、そしてその下に連なる深いシワの刻まれた樹木の表面といまいち区別のつきにくい顔、そしてその顔がついた太い幹と羽織った白衣のローブ。

足に当たる根の部分はウネウネと動きながら廊下を走り、老巨木の枝や幹はミシミシと不安げな音を立てている。

魔法医を呼び、こちらに戻ってきたムラマサがその前を走っていた。

「こちらです、先生」

ムラマサが魔法医長、妖樹族の古老であるカルシムを広い部屋に引き入れた。

「ま、魔王様が一体どうされたと!？」

狼狽する古老に俺は魔王様は古傷が疼くらしいと告げた。

「つまり尻が疼くらしい」

後ろから小さく呟いたグラスに肘鉄を喰らわしている間にカルシムは部屋の奥で休んでいる魔王様の元へ行き診察を開始した。

俺達はその間部屋の外の廊下で待つことにする。

しばらくの沈黙の後、普段寡黙なムラマサが珍しく最初に喋り出した。

「…御館様の負ったキズは重いものなのだろうか」

「それを今診てるんだらう……」

「まーよ、なんにしるさ、今魔王様が診てもらってるキズの箇所ってよ」

やめろ、グラス、それ以上喋るな言うなついでにこの世に存在

するな。

「尻、だな」

「おそらくは、尻だ」

ムラマサ、お前も相づちをつつんじゃない。しばしの沈黙が場を支配する。

「……尻、だろうな」

あああああ、俺も言っちゃったよ。

「拙者の故郷ではな、合戦中に負ったキズが若い頃は大したことではなくても齢を経て古傷になると急激に悪化して命に関わることもあると聞いたことがあるのだが」

それは俺も聞いたことがある、若い時なら回復もするが負った大傷は確実にその後の寿命を削り取っているのだと。

だがな、ムラマサ。

「大怪我ならともかく尻をちょっと切ったぐらいなら問題無いんじゃないか？」

「だとすればいいのだがな……」

「ギード、ムラマサ、今俺達がここで門外漢の心配しても仕方ないだろうが。まずはあの魔法医の爺さんが出てくんの待とつや」

珍しくグラスがもつともな正論を喋った、どうやら明日世界は滅びるようらしい。

「つーかさ、今魔王様で診察中なんだよな」

「……それがどうした？」

「尻とか診てんのかな？ちょっと覗いて……」

よし、まだ世界は終わらない。

俺の右フックがグラスのボディに突き刺さるのと、カルシム魔法医長が部屋から出てくるのはほぼ同時だった。

「ちょ、お医者さん！助けて、助けて！ヘルプミー！」「……んーす

まんがワシは生きているものが本業でな、アンデッドはちょっと専門外なんじゃよ。他いってくれ」

すぎるグラスをにべもなくことわるカルシム老、さすが年長者だ。俺もかくありたい。

「あの…魔王様の古傷は悪化しているのですか？」

カルシムは穏やかな表情のまま俺の質問に答えた。

「心配はない、順調に治っているぞ。左腕の疼きも直に治まるだろう。安心しなさい」

「…そうですか、それは安心しました。

俺達も左腕の心配を……」

……左腕？

「あの古傷って尻じゃ」

「さて、ワシは次の診察があるからの、これで……」

足早に去ろうとするカルシム老、その顔と動きには明らかに動揺が見える。

「ムラマサ！グラス！」

俺の呼びかけより早く反応した二人が老巨木を押さえた。

「…なんで左腕なんですか？尻じゃなくて？」

「知らん！ワシや知らんぞ！尻に剣が刺さってるなんて見えんぞ！」

杖を揺らしながら体を震わせる老巨木をムラマサとグラスが制止させる。

「…あの失礼ですが魔法医長は派閥はどこで？」

「え、ワシ？ワシは『魔王様のアレは心の汚いやつに見えるんだよ』派じゃ」

……だからか、ていうか見えてるじゃねえか剣が。

「……じゃあ剣はどうでもいいですから、尻の傷はどうなんですか？」

「ああ、あんなもん浅すぎて何の問題もないわい」

「……そうですか」

ムラマサとグラスにカルシム老を放させ医務室に帰ってもらった。

「結局、古傷は大したことはないがあの剣でわかったことは無しか」

「まーよ、特に心配ないんならそれでいんじゃないかね？ヤバかったらあの爺さんもなんかいうだろ」

「いやしかし、下手にあの剣に触れると中身が危機一髪な感じで飛び出すのでは……」

「「いや、それはない」「」

グラスと俺は同時にツッコんだ。

日常七転八倒編参 食事は楽しく食べましょう(前書き)

いつも読んで下さっている方ありがとうございます

とりあえずギャグばかりの話はここまでで

次の話からは少しシリアスを交えたいと思います
ちゃんと笑えるオチはつけますけど

日常七転八倒編参 食事は楽しく食べましょう

どのような異常な状況にあらうと、一週間無事に過ごせればまず大体は馴れる、つまり適応出来ると俺は訓練兵時代の教官に習った。その教官はさらに言った。それ故にどれほど混乱的な状況に陥っても冷静に生き残る道を模索せよ、と。

そして生き残り、その経験と情報を仲間伝えるのだと。それにより全体の状況に対する対応が早まりより多くが生き残る結果に繋がるのだ。

兵士の仕事は大別すれば死しても己の役割を果たすことと、生きて情報を伝えることであり、最良の兵士とは任務を果たし必ず生きて帰る者だと教えられた。

……教官殿、とりあえず状況には馴れました、馴れましたけどね。「なんつーかさ、なんだかんだで馴れたよな、魔王様のアレには」俺の傍らでグラスがチキンソテーをかじりながら呟く。

「最初の内は面食らったものだが、見慣れるとそれほど気に障らなくなるな」

ムラマサは酒を小さな杯でチビリチビリとやっている。

……お前それウイスキーかなんかか？

「まーよ、人間馴れだよ、馴れ あーゆるもんだと思えばいいのさ」気楽に喋るグラス。俺はシチューをすくったパンをほおびりながら言った。

「……俺も魔王様のアレには馴れたよ。だがな、アンデッドに囲まれて昼飯食うのはどうしても馴れねえんだよ！ 特にゾンビの真横つてのがな！」ここは魔王城内地下一階にある大食堂、最大で二千の人員に一齐に食事を振る舞える設備がある。

地下いっばいに広がる巨大なスペースに所狭しと並ぶテーブル、椅子、テーブル、椅子、テーブルの規則的な海と、丈夫な赤レンガ造

りの壁に床、それらを力強く暖かく照らす照明魔法。
小綺麗に掃除が行き届いているが、テーブルクロスの薄いシミはごく
愛嬌だ。

昼飯時の食堂は魔王様や幹部以外の魔王城で働く雑多な種類の魔族
でゴった煮状態であり、例えるなら人種のスープ、あるいはこの世
に顕現した限定体験版のカオスという状態である。

そして厨房はその混沌を超えた地獄の戦場のような状況であり、そ
の修羅場の中で鬼神のごとく殺気を振りまき料理をするコックたち
はこの魔王城の中で魔王様の次にケンカを売ってはいけない存在だ
と俺に直感させた。

……アレハマジニコロサレマス。

「んだよー、ギード？人がメシ食ってんのにガタガタ言うなよ」
グラスはチキンを咀嚼しながら言い返してきた。

「……お前、この前の昼飯に豚足手で持ってムシャムシャかじって
たる？あのシーンが無性になんかおぞましくて夢に見るんだよ！」

「まあまあグラスにギード、お主らは味がわかるだけ良かろう。拙
者など消化も出来なければ味もわからずで……」

俺はムラマサの杯をビシリと指差した。

「お前は昼間から休憩中に酒を飲むな！そもそも味わかんないんじ
やないのか？」

ムラマサはキュツと杯を飲み干す。

「別に酔う事は無いからな。それにゴルン隊長殿からは許可を頂い
ておる。それからな、ギードよ。

酒は鼻と舌で味わうのではない。

酒は風流を肴に魂で嗅いで心で味わうものだ」

いやなんか名言っぽいこと言ってもダメだろ。それ以前に地下の食堂
で風流も何も無いだろうが。

……それから、向かいのテーブルのいかにも酒好きそうな猿人種の
オッサンが羨ましそうにお前の酒を見てるぞ。

コトリツ、と何かを置いたような音に気づいて俺は前を向いた。

俺の前には花が咲くような笑顔。

低めの背丈に紫の肩まで伸びたストレートの髪、整った顔立ちと無邪気そうな眼差しにわずかに帯びるサキュバス種独特の妖艶な雰囲気。

可愛らしさを7に美人さを3で配合したような容姿をもつ少女。

メイド服をなびかせたダメイド、アイアが俺の前に立っていた。

「あ、あの、ギードくん…これ…」

普段人懐っこく臆せずに話すアイアが珍しく恥ずかしそうにはにかんでいる。

……あれ？こいつこつこついうほうがなんか可愛いくね？

アイアが置いた皿からは香ばしいニンニクとトマトの香りが漂い食欲をそそる。

「あの、ブイヤベースで料理長から習って作ったんだけど…良かったら…味見とかお願いしたくて…」

…え、マジで？俺でいいの？ホントに？

「あ、ああ、じゃあいたadakよ、ありがとうな」

ガッツポーズをしたい衝動を必死に抑え俺は料理を口に運んだ。

周りからはざわめきやささやきが聞こえてくる、ふっふっふっ、存分に妬み嫉みつらみ怨みを募らせるがいい、その分俺はより光り輝

…
へぶしっ

口に入れた瞬間に、一瞬殴られたかと錯覚するほどの衝撃、続いてその衝撃が生臭さだと気づいた時には猛烈な辛さが舌を襲う。

身動き出来ない俺にグラスが声をかける

「お、そんなうめーのか？俺にも食わせ…おぼあっ」

バカめ、お前も道連れだ

「ぬ、おおおおあああつ！んーっ！んーっ！」
呻き声を上げるグラス、いいぞそのまま昇天しろ。
あ、でも俺もなんかヤバいかも。

なんとか耐えきり俺は意識を保った。

「あの…ひよつとしてだめだった？」

「いや、これは、ちよつと…」

息も絶え絶えに答える俺。

「ゴルンさん！ やっぱりだめだったよー！」

遠くの席にいる巨大な塊、幹部クラスでありながらなぜか食堂でのんびり食事をしていたゴルン隊長に手を振るアイア。

……えっ、やっぱり？

周りからのざわめきの中から「今回もだめか……」「犠牲者はアイツか……」「という声が聞こえる。

…今回も？

…アイアさんひよつとして何人にも試してます？

「ゴルンさんが体が頑丈であまり怒らない人ならギードさんがいいって……」

このメイドがっ！

ていうか誰か教えるよ！やっぱこの城には鬼しかいねえ！

日常七転八倒編四 下衆の勤ぐりは止めときまじょう(前書き)

読んで下さっているかたありがとうございます

ここからギードとアイアの過去についてと世界観を少しやります
あとちょっと下ネタです

日常七転八倒編四 下衆の勤ぐりは止めときましよう

アイア作の「料理長直伝、ゾンビ殺しの悶絶ブイヤベース顔面殴打風味」を食べたその日の晩、俺は夜勤の護衛をしていた。

俺達護衛は普段は夜の警護は交代制にしている。いやアンデッドに寝る必要があるかなんて俺は知らないけど。

夜の廊下を昼間よりも広く寂しく感じるのは、昼の喧騒を体験している分の反動からだろうか。

だが一人廊下に立ち尽くすこの時間も退屈とはいえ、さほどキライでも無い

深夜の魔王城でもある程度は人がいる、たまに魔王様の寝室前の廊下を往来する人員を俺はやや眠くなりながらも観察していた。

不意に俺の前に立ち止まる人。

メイドが一人立っていた。

セリナという妖人種で、これまた美人な顔立ちと優しそうな雰囲気。俺に近い年代の二十歳程の娘。城の中でも何度か見かけたことがあり朱龍部隊の面々でも結構人気があるメイドだ。……ぶっちゃけ俺も好みです。

「ええと、何かご用で？」

今は夜更け、かなり遅い時間帯だ。こんな時間にメイドを呼ぶとは思えない。

「魔王様に夜勤が終わったらいつでもいいから寝室に来なさいと不安そうに告げるセリナ。

…ええっと、それって、

俺はドアを急いでノックし魔王様に確認を取った。

「……問題はない、通せ」

俺は慌ててドアを開けセリナを通す。ドアを通るセリナの横顔に隠しきれない不安と困惑が見える。

…これは、やっぱり？

その後、おそらくは二、三時間ほど後に再びドアが開かれた。中から顔を手で覆いながら出てくるセリナ、しかし指の間から涙の跡が見える。

不覚にもその色っぽい仕草に俺は一瞬見とれた。

「ありがとうございます…ございました…魔王様」 一礼をして廊下を去っていく彼女を見送り、俺はドアを閉めた。

……これはやっぱりアレですよ、魔王様？

「そりゃーお前、アレじゃね？、つかアレだな」

紅茶をすすりながらグラスは呷いた。

「ふむ……夜伽、というやつか」

ムラマサはのんびりとキセルをふかしている。

…いやお前、さっきから目や耳の穴からも煙が出てるぞ？

昼をやや過ぎた食堂からは喧騒は少なくなり、食事後の穏やかな時間が流れる憩いの場となる。

昼食を済ませた食後の休憩中、俺はなんとはなしに昨日の夜の出来事を話してみたのだ。

「拙者の生まれた所では別に城主がお付きの娘に手を出すなど珍しくはないがな？ むしろそのほうが出世も開けるし、後ぞえがいなければ正妻…この国では妃というのか？ あるいは側室…妾か愛人というのか？ として身分もより保証されるしな
一国の王ならば側室など四、五人いても不思議はない。…まあそれをしなかった風変わりなやつもいたがな」

いや、それはわかるんだが、なんとというか。

「いやな、ムラマサよ、魔王様も結構生臭い所があるんだな」とさ」

俺達は魔王様の警護をここ最近やり始めたが、最初こそはその威厳と威圧感、存在感に圧倒されたが、…ついでに尻の剣にも。

側についてみれば魔王様はいたつても静かな方だった。

日中は自分の封印された五百年の間の歴史や物事、発展した魔法学や文化についての本をひたすらに、山ほど読みあさっていた。

食事は幹部クラスとの会食をして、たまに城の中を歩き皆の働き振りを観察したり、体操代わりに庭で魔法を撃つたりする程度だ。もつとも、外を出て街を歩きたいとおっしゃっていたようだがさすがにそれは止められたようだ。そりゃ剣が尻に刺さっている様など一般市民には見せられないわな。

「あのおな、ギード？実は俺、昨日夜の警護だったろ？ そんな時に来たんだよ。 そのセリナちゃん以外のやっぱりかわいめのメイドの娘がさ。 お前の時と同じように三時間位で行ったけど」

……マジで？

「ギード、実はな、拙者はさらにその前の晩に御館様に用事を言いつけるから誰かメイドを読んでこい、と言われてな。 たまたま近くを通りかかったアイアを呼んできたのだ」

「…アイアを？」

フウっ…と煙を吐き出しムラマサはキセルを置いた

「寝室で何か言いつかったアイアは部屋を出たあとまた戻ってきたな。 手には何かポッドとカップを持っていた。 その後部屋に入っていったが、何か騒がしくなつてな。 寝室から魔王様とアイアが出て行った」

「どういうことだ？」

カタリツと骨がぶつかる音を出し小首を傾げるドクロ。

「ただししばらくしたらまたポッドとカップを持って二人とも戻ってきたぞ。そのあと二人で寝室に入って、夜明けまで出てこなかったがな」

アイアは確かに見た目はかなりいいほうだが。

…アイツまだ十六ぐらいだったよな？子供じゃねーか。

「まーアレだ、五百年だぜ？五百年。魔王様だつて溜まっていたりなんだりするだろうさ。それにこのメイド結構かわいい娘とか多いじゃん？そりゃー魔王様もたまんねえ！てなるんじゃない？」

黙れよゾンビ

魔王様が封じられた五百年の間。

人も魔族もそれなりに科学や文化や文明を発展させ、時に対峙し時に貿易や取引を成し、結果としてお互いの偏見をある程度は取り払うことはできた。

だがそれでも憎しみと怒りと戦うという選択肢を取り払えなかった。

遠い存在としての敵が実は近い存在だと知ると、今度は遠かった時とは別の、

近い故の憎しみが沸くかのように。

世界は五百年の間に人と魔族が対立と緊張、疑心暗鬼の果ての戦争、疲弊による戦争の終了と、復興と回復のためのしばらくの休戦。

そしてまた対立と緊張を経ての戦争のサイクルを数度繰り返していた。

六年前、三度目の戦争の最中に軍人だった俺のオヤジは死んだ。

その後に俺が兵士になってから二年経って休戦が結ばれてすぐに魔王様が復活したのだ。

戦争によって疲れ果てた魔族の国民は魔王様の復活に大いに沸き

立っている。

五百年という時間は長い、余りにも長い。しかしすべてを帳消しにできるほどの悠久ではないのだ。

「五百年だぜ？お前そんな我慢できるかよギード？」「…やかましい、だったらお前は我慢以前にモノが腐ってるだろうが！」

「ギード、そんなに気になるならアイアあたりから話を聞いてみればいいのではないか？」

「……できるか！」

「だがよう、ギード、ムラマサ、そうなるととんでもない謎が発生するな」

「？、なんだよ？」「……ナニの最中って尻の剣どうしてんだろな？」

……たしかに気になるな。

日常七転八倒編伍 解らなければ聞いてみましょう

うすらぼんやりとした実感、俺の周りが茜色の夕焼けの光で包まれてる。

まだ小さかった頃の一番記憶に残っていた景色。俺の世界がまだ半径三メートル以内で眼に映る全てが大きく、とても大きく見えていた時。

夕暮れの夏の街並みとお袋と俺と、そしてまだ生きていたオヤジとで買い物をして歩いていた光景。

出店で買った氷菓子を懸命に舐める俺、俺の手を握りしめながら服に垂れた氷菓子の汁をハンカチで拭いてくれたお袋。

そしてその様子をじっと睨むように静かに見つめるオヤジ。子供の頃、なぜオヤジはそんなふうに睨むのか不思議だった。

今ならなんとなくその訳がわかる、オヤジは刻みつけていたんだ。いつ死ぬか解らぬ軍人だったから、いつまで共にいられるか解らぬから、自分の網膜に、記憶に、心に、家族の笑顔を刻みつけたかったのだ。

その時のオヤジの顔は夕暮れの逆光でよく見えない。大きな体格と俺と同じ青みがかった銀髪、無精髭の生えたあご下。

だが顔がよく思い出せない、どんな表情だったのか思いだせない。

深く、深く記憶を探れば思い出せるかもしれない。
オヤジの顔は……

「おい、ギード、起きろ」

眼が覚めて移ったのは眼前一杯に迫ったドクロの顔。

「うおおおおえおあっ！」

絶叫を上げ、俺は飛び起きる。

「…落ち着けギード」

「ムラマサ、お前は顔怖いんだから近づけんなよ！」

「お前とて皮を剥ぎ肉をそげば似たようなものだろうが」

「普通は皮も肉もつついているのが当たり前なんだよ！」

昼食のあとの休憩中、俺は微睡んでいたようだ。 食堂からは

ほとんど人影は消えている。奥の厨房が相変わらず騒がしいのは明日の仕込みをしているからだだろうか。

「そんなことよりもほれ、アイア嬢をお連れしたぞ」

長身のムラマサの骨格の隙間から見えるメイド服、 紫の髪

に人懐っこい笑顔を浮かべる少女、アイアが立っていた。

…ああ、そうだ、俺はムラマサとグラスとのジャンケンに負けてアイアから話を聞き出す役になったんだ。

周りを見渡しふと気付く。

「…おい、グラスはどこいった？」

「グラスは一足早く警護に戻るそうだ、後で話を聞かせてくれと言っていたぞ」

そうか、ならば好都合

「あの、ギードくん、こないだはすいませんでした… それでお話を聞けませんか？」

さすがに少し元気がないアイア。

「ああ、こないだのはもういいんだ… 話つてのはさ、あーグラスのやつが聞きたがってたんだけどさ、…魔王様の寝室に行っちゃって聞いたけど何かあったのかい？」

質問を聞くと俺をじつと見つめるアイア。

…ヤバイ、質問をもう少し考えるべきだった！ ああ、見るな！ そんな眼で俺を見るな！

「あの、実は私もそのことで話したいことがあって…」

えっ、何？何を話すの？詳しいっーか生々しい話は勘弁何だけど。

「この前の夜に私はムラマサさんに呼ばれて魔王様の所のへ行っ
たんです。それで魔王様が『眠れないからホットワインでも作って
着てくれ』て言われたので作って持ってきたんです」

…まさかそのホットワインは。

「そのホットワインは…美味しく出来たのかな？」

アイアは恥ずかしそうに目を伏せた、なにやらもじもじとしてい
る。

「…塩と砂糖、シナモンスティックと葉巻を間違えて作ってしまったっ

て…魔王様はそれを飲んだ吐き出しました…」

…君よく殺されなかつたね。

「それで魔王様は許してくれたの？」

「はい、『お前はホットワインの作り方もわからんのか！』とお説
教を受けました」

…説教で済ましてくれたんだ。

「それで『我が手本を見せてやる』って行って一緒に厨房にいつて
ホットワインを作ってもらったんです」
ちよつと待てい。

「…魔王様を作ったの？」

「はい、私も飲ませてもらいましたけど、すごくおいしかったです
よ」

厨房に立ち、その巨軀にエプロンをしめてホットワインを作る魔
王様を思い浮かべた…だめだ、想像つかねえよ

「それで私の分までホットワインを作ってくれて、魔王様の寝室で
一緒に飲んだんです。魔王様の部屋って本がたっつくさんあるんで
すよ」

小さな体で手をいっぱいに広げて精一杯本の量を表現するアイア。

「ああ、昼間はひたすら読書をされているからな」

実際魔王様の読書量はものすごい、荷物として山のような本が今ま

で三回ほど届いているのだ。全て部屋に入れているからあの寝室がいくら広くてもちよっとした図書室だろう。

「それで私が『凄い量の本ですね！』ていいたら『五百年封印されていたから現在の世界を色々学ばなければならぬ』っておっしゃって。それから『眠れないから何か面白い話でも聞かせろ』って『

…結構魔王様ムチャぶりするんだな

「それで何を話したんだ？」

「…私はあんまり楽しい話とか知らなくて、それで自分の話をしたんです。

あの、私孤児なんです。戦争で両親と弟が死んでから親戚中をたらい回しになってて、

「…そうだったのか」

確かに悲惨な話だが正直珍しい話ではない。両親どころか自分の命があるだけまだわずかに幸運があると言えるだろう。

「私ってあんまり器用じゃないんです。だからどこでもなんだか邪魔者になっちゃって、それでメイド長がお母さんの昔の知り合いだったそうで、そのついで一年前からここで働き始めました。ここには私と同じような境遇の人たちが沢山いてなんだかすぐに馴染めました。そこまで話したら魔王様は……」

何かを思い出すように遠い場所を見つめるアイア。

「…魔王様は？」

「…泣いておられたんです」

魔王様が？泣く？なぜ？確かに、アイアの話は悲惨だし不条理だ。

だがこの時代には戦場に近い街なら普通に起こり得るある種ありふれた事とも言える。

アイアは言葉を続ける

「…私はなぜ泣いているのか一瞬わからなくて、戸惑いました。魔王様はその後に『すまない』と呟いたんです

『我が五百年間封印されていなければそのような思いをする者を二

度と出させなかった

家族を失う苦しみを誰にも味あわせなかった』と仰ったんです」

ああ、そうか

臆気に、俺は理解した。この時代に生きる俺たちにとって戦争で身内を失うのは悲劇だがありふれたこと、よくあることだ。

だが五百年前の時代から復活した魔王様にとってそれはありふれたことではない、許すことのできない悲惨な理不尽なのだ。

それ故に魔王様は涙を流す。

失うことに馴れすぎて悲しみの感情が磨耗した俺たちの代わりに。

「魔王様はその後『やはり本を読むだけでは今の世界を完璧には理解できない

実際に暮らしているものから話を聞かなければならぬ、だが外に出ることを止められているのだ』と言われたので私は『同僚にも私と同じような境遇の娘が何人かいるからその子たちとも話してみても』と言ったんです」

……ああ、そうだったのか、そういうことだったのか、クソッ。

俺はバカだ、大バカのゲス野郎だ。他人のために泣ける人物を引きずり下ろして楽しんでる最低のゲスだ。

メイドを呼び出しているのは夜伽なんかのためなんかじゃない。

「私は何人かの同僚に声をかけて魔王様に話を聞かせてほしいとお願いしたんです」

おそらくはあのセリナが泣いていたのは自分の辛い過去を話していたから、思い出していたからだろう。自らへの憤りと恥で言葉の出ない俺にアイアは語りかける。

「あの、魔王様は見た目が怖いし迫力があるけど、すごく、すごく優しい方なんです。だからギードさんも魔王様と話して上げてください、色んな話を聞かせて上げて下さい」

彼女の澄んだ瞳を真つすぐにもつめて俺は答えた。

「ああ、わかった

俺も魔王様と話してみるよ」

アイアが去っていくのを見送ると今までじっと耳を傾けていたムラマサが口を開いた。

「魔族の王、魔王と聞くからにはどのような怪物かこの世ならざるものかと最初は思っていたが、なんと聡明かつ慈悲のある賢王であったか」

「そうでもなけりゃ五百年以上も覚えられたりはしないさ」

「所でお主が御館様と話す最初の話はすでに決まっておるのか？」

「いや、まだ決まってるない」

「ではまずこの際だから尻に剣が刺さっているところから話してみては？」

「…それは勘弁してくれ」

日常七転八倒編 禄 上司とはよく話しましょう(前書き)

毎度読んで下さるからどうもありがとうございます
そうでない方初めまして

一応次の話からは戦闘シーンをやってみようと思っています

日常七転八倒編 上司とはよく話しましょう

対話とは大事なものだ。

基本的には対話の否定である戦闘が仕事の軍人の俺がほざくのもアレな話だが。 多少いけ好かない相手でも酒でものみながらのんびり話せば打ち解けることもあるし、（無論、酒癖が悪くないことが前提だが）

長い付き合いでよく見知ったと思っていた相手でも、深く対話を重ねていくと知らない意外な一面が見えてきたりすることもある。 結局の所は言葉が通じるのならば、まずは話してみた方が得でありおもしろい。

…… まあ実際は俺の昔いた戦場では、第一印象で危険察知が来ないと即死ぬのであまり悠長なことは出来ないのだが。

だがここは戦場ではないし、対話しようとする相手にはこちらもまた対話するべく共に歩み寄りねばならない。

…それが俺たちのために涙を流す人ならばなおさらに。

どうかプレッシャーで俺の胃に穴が空きませんように。

神なんぞ正直信じちゃいないが、とりあえずそう祈りながら俺は魔王様の寝室のドアを叩いた。

「入るがいい……」

静かに、しかし力強い言葉に促され寝室に入る。

まず目に入るのは詰まれた本の山、山、山、 本のカテゴリは食料生産史、戦史、魔術学、経済、統計、その他。

正直無学な俺にはその他にどんな種類があるのか見当もつかない。

部屋の中央にある豪華な天蓋のついたベッドはアイアぐらいの小

柄な背丈なら十人は寝転がれそんな巨大なものであり、魔王様はそこに腰掛けていた。

「…座つて楽にしていなさい」

ベッドの前、魔王様の正面にある椅子に俺は覚悟を決めて腰掛けた。

「アイアから話は聞いている、我はこの時代で生きるものから一人でも多く話を聞きたいのだ」

魔王様は鎧はつけておらず、蒼穹の色をしたゆったりしたロ―ブを纏っている。

「…俺は何を話せばいいんですか？聞いて面白い話なんか大してしりませんし……」

青く輝く鬼火の眼差しが俺を見据える。

「話したいことを話すがいい、我は本による情報では解らぬこの時代の人が何を思い、何を背負い生きているのかをこの耳で聞きたいのだ」

本に書かれていることはつまりは誰かのフィルターの入った情報であり、自らの眼や耳で確かめた情報を得たいということだろうか。

静かに俺は息を吐く。

「…俺の生まれた場所はここから南のラザという街で、ひい祖父さんの代から突撃槍士として軍人やってた家系なんです。オヤジは、あ、いえ父は、軍人であつちこつちの戦場を回っていて、家に居ないことが多かったからあまり顔を覚えていません。父が居ない間は祖父から槍術や魔術を習っていました。それで俺が十四の時に父が戦場で死んで、四年後の十八才で志願兵として入隊したんです」

「…兵役はたしか二十歳からだったな」

「ええ、ですけど学校をでてから軍以外の仕事なんてまずなかったですから、だつたら最初から軍にいこうと」

「そうか……所で話は変わるがギード、お前は文字は読めるか？」
「はっ？…文字を読めるかって、俺だってそのぐらいは。」

「…別に問題なく読めますが」
「ふむ、と魔王様はアゴに手を当てた。」

「そうか、では文字が読めない者を知っているか？」
「文字が読めないやつ？そんなやつ今時いるのか。」

「いえ、そんな人は俺の周りにはいません。居たとしたら目の見え
ない人ですかね」

魔王様は俺の表情を読み取ったように話し出した。

「なかなか不服な顔をしているなギード、今のは別にお前を侮辱す
るために聞いたのではない。統計で今の時代の識字率が九割を越え
ていると書いてあってな、本当かと思ひ実際に聞いてみたのだよ。」

「…五百年前の識字率は公用言語を設置してしばらくほどで五、六
割程度だったからな。なるほど、兵役のためにそこには力を入れた
ということか、そこは好都合だ」

魔王様はなにやら一人ふんふんと納得している

「ギードよ、お前は今この世界の平和と戦争のサイクルについてど
う思う？」 いきなりのスケールのデカイ質問にドキリとする。

「いや、その、俺はどう思うかよりどう対応するかで精一杯ですよ
…」

そんな質問をされた所で所詮は俺などただの一兵卒だ。気の利い
た返答を期待されても困る。

「なるほど、現実主義な軍人らしい回答だな。……我は本や資料を
集める内にこの世界のサイクルを知った。それ故に悩んだのだ、停
戦すぐのタイミングで復活した我がこの世界の安定の形としてのサ
イクルを崩すのではないかと」

青い鬼火の視線が寂しげ落ちる。

「いや、そんな、魔王様が復活してみんな喜んでるんですよ」

「すまんなギードよ。たがな、もし疲弊した限界状態での現在の停
戦から、魔王を脅威と感じた人類側が戦闘を続行したとしたら……」

その時は互いが消えるまでの凄惨なつぶし合いだ」

「……………」

余裕もなく引くこともない者同士がぶつかれば確かにそうなる。だがな、アイアや他の者たち、そしてお前の話を聞いて我の考えは変わった。そもそも統計では戦争をすることに食料生産や人口にストップがかかり、戦争を重ねるごとに戦争以前の最高値が徐々に少なくなっているのだ。そして停戦のタイミングを誤れば共倒れの危険もある。つまりこのままではジリ貧が一瞬で終わるかの二択だ。それに結局の所はな、理不尽に泣く人間を仕方ない犠牲呼ばわりするという腐れ言を吐くのを、我はどうしてもやりたくはないのだ！

「ッ」
強まる威圧感と圧縮される空気、語氣に力がこもっている。ここまで声を荒げた魔王様を俺は初めて目の当たりにした。

……………所で今なんか後ろの剣がピヨコンと上にハネなかつたか？
「ならば、我のすることは決まった。現在のサイクルから逸脱し別の発展への道を切り開く」

それは、つまり。
「五百年続いた戦争と平和のサイクルを……………打ち破るといいますか？」

出来るのだろうか、世界の定めた輪を抜けることを。
出来るのだろうか、理不尽になく誰かの涙を止めることを。

「世界が肯定する物をただ一人否といい、世界が否とする物をただ一人肯定する。その程度ができずして魔王を名乗る事はできない」
強固なる世界の環さえも不適に嘲笑うその顔はまさに正しく、

魔王。

コンコンッ

突然に鳴るノックに俺は我に帰った。

「もしもーし？お茶持ってきましたー！魔王様いますかー！」

元気よく響くよく知った声、ドアから現れるアイア。

「前持って頼んでおいたのだ、ふむちようどいい頃合いだな」

「あー！ギードさん来てくれたんだ！」

「あ、ああ約束だったからな」

カップを配りお茶をいれてくれるアイア

「それじゃ魔王様とごゆっくりー」

他に用事があるのか足早に寢室を去る。

「……………」

彼女のいれてくれた紅茶を前に、ブイヤベースのトラウマが俺の脳裏に克明に蘇った。息がつまり腕が止まる。

…………… ナニコノコウチャ、マオウサマヨリコワイ。

そんな俺の様子をみて魔王様が声をかけた。

「案ずるなギード、紅茶は我が直々に指導した。毒の恐れはもうない」

魔王様、正直今日はそのお言葉が一番頼もしいです。

「まずは人類側と休戦条約の拡大の提案、できれば終戦条約までに……ズズツ」

「なるほど、まずはそこから……ズズツ」

「あわびゅっ！」

「ぶべらっ！」

…………… マズ！ツ　クソマズい！　何でただの紅茶でこんなクソマズいんだ！

「おつかしーなー、なんでこうなるんだろ、おつかしーなー」

ああ、また魔王様頭抱えちゃったよ……………

…………… またなんか剣がピヨコンピヨコン動いてるんだけど、あれひよっとして尻に力入れると動くのかな？

それからしばらくのち人類側へ休戦条約改正への申し出が届けられそれが受け入れられたという。

暗殺阻止奮闘編巻 これはピクニックではありません(前書き)

いつも読んでくださっている方毎度ありがとうございます
そうでない方はじめまして

この回から戦闘シーンに入ります
書きたかったから書いてみました
あとちょっとグロいです

暗殺阻止奮闘編巻　これはピクニックではありません

春の暖かい日の光が山の草木を眩しく照らし、賑やかな小鳥の囀りが耳をくすぐる。

萌える緑の香りは清々しく鼻孔を通り抜け、山間に咲き乱れる山桜の木々は森に溢れる豊富な生命を感じさせた。

やはり森はいい、最近では魔王城ばかりだったからあまり訪れていなかったが、こういう所になると故郷の近くにあった森を思い出す。

「おーい、俺達はいつまでここをグルグル回ってりゃいいんだ？」

そう、俺の故郷の森もこんな風のどかな所で…

「ほう、ここは桜が咲いているのか、風流なものだな。こういうところで一杯やりたいものだ」

後ろを振り向いて連れの二人をまじまじと観察してみた。

サムライスケルトンとゾンビ僧侶。

……なんか一気にこの森が自殺の名所みたくなっちゃったな

魔王様が議会を説得し、俺達魔族国と休戦状態の人類側の最大国、帝国との条約拡大と改正の交渉と相談の申し出が帝国側に送られて、それが帝国に受け入れられてから三ヶ月。書簡や担当官による交渉の末に、意外なことに魔族国側の提案が大きく受け入れられていた。

そして、それを今から代表者同士の会談と調印式を行い最終決定をしようというのだ。

「しかし国際間の条約改正案がわずか3ヶ月程で決まるとは随分な速さだな」

「改正案は魔王様がほとんど作ってたからだろ」

それでも城の中で見かけた担当官は今にも死にそうな顔をしていたが。

「でもよー、なんでこんな辺鄙な所で調印式なんてやるんだよ？」

「それは帝国に聞け、俺が知るか」

帝国から指定された調印式の場所と条件、まず場所は魔族国と帝国との国境から帝国側に入ったこの森の中の教会。次に条件は調印式には必ず魔王様がくること、帝国側の代表者は第二位の皇族である副皇帝がくるということだ。

「なーこれってよー、帝国領内で必ず魔王様が来いって言うてることはよー」

グラスが眩く。

「帝国は暗殺ガチで狙ってるんじゃない？」

……たしかにそれはある、そうなるトイヤに大人しくこちらの提案を飲んだのも頷ける。

だがあえて魔王様はそれを飲んだ。そこには俺達、朱龍部隊への信頼があるからだ。

「まあ御館様なら多少の暗殺や襲撃など自力で退ける戦闘力はあるだろうがな」

……それを言うなよムラマサ。とりあえずは調印式にあたり魔王様の尻の剣はどうするかということになったが、あまり大柄の護衛をつけて隠すと副皇帝に対し威圧になってしまう。

そこで邪魔にならない背丈のアイアに出来るだけポリュームのあるメイド服を着せて、魔王様の後ろにつかせて剣を隠すという算段でいくそうだ。

……無茶するなあ。

教会の場所は山に囲まれた森の中央広場にあり、朱龍部隊の主力はそこで警護に当たっている。

副皇帝側の護衛は意外なことに最低限ほどしかない。

朱龍部隊の前衛役の主力上位はほぼ全員がゴルドン隊長のような重量級の獣人族や巨人族が占めており、正直百八十センチ、七十五キロほどの体格的には人類とほぼ同じ魔族の俺が入る隙間はない……いや、実力的には俺は中の上くらいだし、魔族の前衛役では結構すごいほうなんだぞ？ ホントだよ？

話はズレたが今の俺達の任務は『狙撃魔術式を扱う暗殺者の警戒と発見、排除』である。

そのために教会から一キロほど離れた、対人狙撃に最適なポイントの山の林を警戒のためにこうしてグルグル回っているのだ。

……魔術式構築、解術、解除、魔術式構築、解術、解除、俺の右手の中で小さな炎の球がついては消える。

「なーにやってんだギード？」

「久しぶりに実戦かもしれないからな、今の内に魔術動作の確認だよ」

「いまさらかよ、それからお前の担いでるそれ、馬上槍スピアだよな？」

「ああ、そうだが」

俺は林を歩きながら答えた。

今俺が担いでいるのは二メートルほどの長さ、一メートル三十センチの円錐形の穂先のついたスピアだ。

「…馬に乗ってないのになんでそんな得物なんだよ？」

「これがうちの家系の突撃槍兵の得物なんだよ！ 敵が出たらいやでも使い方見せてやる ……そういうばお前らは魔王城来る前はどこにいたんだよ？」

ムラマサとグラスの過去の話などほとんど聞いたことがない

「…別に今と大してかわんねーよ、ムラマサと組んで傭兵やって戦場めぐりだ」

「むしろ今の方がのんびりとしたものだな、アンデッドだから飯が食べえずとも死なぬ体質は戦場では便利だったぞ」

「いや、そうじゃなくてお前らがアンデッドになる前の…」

『……ザツ……ザザツ……応答せよ……』

突然入る魔術無線連絡、ゴロン隊長の声に俺達三人の間に緊張が走る。

『はい、こちら対狙撃者捜索分隊、』

『ギードか、ゴロンだ、率直にいうぞ。副皇帝が偽物と判明した。』

判明と同時に教会へ敵兵、およそ数は二十から三十が攻め込み現在主力部隊が外で迎撃している』

『なんだって……』

『……アイアが調印式の途中に衣装でけつまずいて副皇帝にぶつかつてな、その拍子にカツラとヒゲが取れた』

『…マジっすか？』

アイア…恐ろしい娘…

『魔術探索に引つかからぬ原始的な変装だ、正直私も影武者である可能性は考えていたがな。それでも調印式さえ無事に済めばと思つてはいたが……』

『しかし敵兵なんてどこから？ここは一週間前から斥候隊で監視を……』

『今まで使われたことのない協力的なステルス隠密迷彩術式のたぐいだ、恐らくは秘匿技術扱いの代物だろう』

『俺達はどうします？狙撃者探索を続けますか？』

『……いや、この乱戦で狙撃者の有用性は薄れてきている。それに魔王様の防御魔術を超える狙撃を単独で行える兵士はまずいない』

『ではそちらに戻りますか？』

『ギード、実は敵兵の動きはそれほど急ではない、まるで私達の足止めを狙っている節があるようだ』

『？……まさかっ』

俺もゴロン隊長の危惧に気づく。

『…あれほど協力的なステルスを使うのならどこかに、恐らくはそ

「こより遠くに砲撃用の兵装を隠している可能性がある、それを探せ」
それが狙いか… 『了解』
通信を切り走り出す。

「ムラマサ、グラス、今度は狙撃者じゃなくて砲台探しだ！」
一緒に通信を聴いていた二人も動き出した。

「了解！ツ… ってどこにあんだよ！？」

「砲撃に最適な位置ならここから一キロほど向こうの山頂あたりか？」

「やたら強いステルスなら戦人機を隠してる可能性もある！ぬかるなよ！」

走り続け林を抜ける、眼前には森の中に現れた木の生えていない草原。

次の瞬間、視界の右端に抜ける影、イヤな予感が脳裏をよぎった
「でいつ！」

いきなり俺の頭目掛け切りかかってきたフルメールの敵兵の斬撃を右手に持ったスピアで辛うじて受け止める、飛び散る火花と赤熱化した敵の剣、うっすらと見える陽炎に鼻先をかする熱。

ヒートフレイム
炎熱斬撃術式か！

「こ、のっ！」

罅迫り合いの体制から右へ剣を逸らす、空いた顔面に左拳を叩き込みとつさにくんだ魔術式を発動。

ニトロボム
「爆熱打撃掌術式解術」

拳から手の平ほどの大きさの魔術式による魔法陣、魔術円が発生、けたたましい爆発音とともに高圧の熱と衝撃がヘルムの面越しに敵兵の顔面を焼き尽くす。言葉すら発せずに顔から炎を上げ膝から崩れ落ちる敵兵、辺りに漂う肉と髪の毛の焼ける凄絶な臭い。

いつかいても酷い臭いだ。

戦場で何度も嗅いだこの臭いが俺の精神を戦闘態勢へと組み直す。

「ギード、前だ」

ムラマサの声に促され顔を上げた。草原の向こうに見える数人の人影。明らかに鎧や剣で武装している。

「…やるぞ、グラス、ムラマサ」

「ハイアーマメント重装甲展開術式解術」

俺のまとうライトメイルが積層状に展開、変形しつつ先から頭までを覆うフルメイルへと変わる。

「イスルギ重装甲展開術式解術」

ムラマサの鎧が膨張、変形し紅い光沢が印象的な重鎧に変わる。

「隊長、応答願います。こちら分隊、砲台警護と思われる敵兵と遭遇した。戦闘を開始する」

「わかった、だが砲台発見を最優先に… おい！アイア！落ち着け

！」

なんだ？まさかアイアに何かあったのか？

「隊長！アイアに何が!？」

「いや、心配はないから…」

彼女の泣き声が聞こえてきた。

「ごめんなさい！ごめんなさい！私のせいで戦争になってごめんなさい！…！」

「…いや、お前のせいじゃないから、たぶん。」

暗殺阻止奮闘編式 同僚とは協力しましょう(前書き)

今回もちよつとグロい所あります

一応戦闘シーンは次の回で終わる予定です

暗殺阻止奮闘編式 同僚とは協力しましょう

『ごめんなさい！ごめんなさい！私のせいで』

『いや、アイアのせいじゃないから』

俺は通信を切って敵兵に向かった。スピアを腰だめに両腕で構える。魔術式を組み立てるために思考を巡らしながら敵のつぶさに戦力を観察。

右に4、左に3の計7人。

武装は全身甲冑のフルメイル、片手持ちのショートソード五人、長柄の戦斧のハルバート二人、中度近接攻撃魔法、……狭い森に配慮した装備。

魔術式構築、出力レベル3、出力比割合を防護5、噴射5に調節。

眼前に先行した左翼の敵兵三体が迫るのをギリギリまで引きつけて、俺は魔術式を解放すると同時に前に踏み出す。

『ニトロジェットアタック爆熱噴射型突撃術式解術』

背中に肩幅ほどの魔術式の構成が浮かぶ魔術円が展開。一瞬の収束のあとに一メートルほどの大きさに拡大する。中心部から極大の炎の束が盛大に噴出し、巨大な爆音を立てて爆発的に発生した推力が体を押し出す。

それと同時に俺の構えたスピアの前にも魔術円が展開、円錐形に変形し盾となる魔術防御層シールドを形成する。

背部噴出用魔術円の作動により俺の体は急激に加速、急速に流れ始める周りの景色と重く降りかかる重力に奥歯を噛み締めた。

助走を始めてから三メートルほどの距離でほぼトップスピードに達する。足が地面から離れ体勢は滑空した突撃状態に移行。

そのまま前に迫る敵兵三体に突撃、最初の一人をシールドで空高く跳ね飛ばす。二人めはランスの先端部で肩を貫き通しそのまま装甲ごと肩から先を引きちぎった。

まだ突撃は止まらない。

三人め、胴体真ん中にランスを半ばまで突き立てる、手に鈍く残る命を奪う手応え。

装甲越しに聞こえる「母さん」という兵士の最後の呟き。

だったら初めからこんな所に、戦場にくるんじゃない！

スピアに新たに魔術式を組み発動させる。

『ハイシェイカーブレイク高周振動破壊術式解術』

ツジイイイイツという特徴的な音と手首に伝わる振動、スピア先端部に発生した高周波により兵士の胴体は分解し、破壊される。上半身と下半身が分離、突撃を続ける俺のスピアから血液、臓物、髄液、骨片を盛大に撒き散らし吹き飛ばされた。

まだ突撃は止まらない。

次、後衛にいる四人へ向かいそのまま突撃を続ける。右翼から来た四人の内の大柄な重装騎士が俺の突撃を阻止すべくハルバートを上段に構えた。

残りの騎士三人が俺への牽制のために重装騎士の後方から多弾掃ファランク射術式スショットを発動、魔術式によって発生した高速かつ大量の小さな鉄の弾丸が殺到する。それにより前方に張られた俺のシールドが急速に削られて損壊、無効化した。

まだ突撃は止まらない

すでに三人を仕留めたことによりスピードが落ち、シールドもない俺を一刀両断に切り捨てるためにハルバートが勢いよく振り下ろされる

バカめ、スピードが落ちることも計算内だ！

読み通り事前に組んでいた魔術式を発動。

『レフト・トロジケット左部爆熱噴射小型術式解術』

俺の左肩に二十センチ程の魔術円が展開、収束し炎の束が発生。急激な推力を生み出す。左肩に発生した推力により、ランス先端を中心に俺の体制が右へ九十度回転。急激な体制移動に追従しきれずハルバートが俺の左を通過し地面に突き刺さる。兜の面ごしに見えるは重装騎士の驚愕。

ツこつなくそおおおつ！！

歯を食いしばり足を踏みしめ、体勢を崩さないようにブレーキング、右への余分な推力を殺す。スピア先端に現れるは重装騎士の無防備なわき腹。

『ニートロジケットアタック爆熱噴射型突撃術式解術』

再び突撃術式を発動させ、まだ高周波の効力が残るスピアをわき腹に突き立てる。高周波振動によりグズリとした手応えと共に甲冑の装甲を分解、貫通し中の肉体をえぐり取る。破片と肉片を撒き散

らしながら加速、前進。

俺が通り過ぎた後ろで脇腹から背中にかけて、胴体の約二分の一を装甲ごとスパアによってごっさりえぐり取られ、虚空の穴を開けた重装騎士がそのまま地面に崩れ落ちた。

これで四人目！

更に残り三人を仕留めるため突撃術式を解除、ブーツのピッグを作動させる。右足のブーツから飛び出たターン用ピッグを地面に深く突き立て、勢いを殺さないように百八十度ターン。腰を低くし靴裏のスパイクで地面を踏みしめ余分な推力を抑えて無力化。三人に警戒しつつ振り向き様に構える。

敵兵の一人がこちらに剣を向け多弾掃射術式を発射しようとした刹那。

『高周振動破壊術式解術』

懐に一瞬で飛び込んだ赤の重装甲冑、ムラマサが兵士の首を瞬く間に切り落とした。

その首が地面に落ちるより速く、返す刀でもう一人を袈裟切り、高周振動の刃で装甲ごと切断。血霧を上げて斜めに上半身が崩れ落ちる。

更に切りかかってきた最後の一人の一撃を流れるような摺り足の動きで回避、喉元を閃光のごとき刺突で貫き致命傷を与えた。

それは無駄のない流麗な、まさしく達人の動き。

剣なら俺よりはるかに上だな。……ならば別れたほうが得策か。

「グラス！ムラマサと組んで砲台を探索してくれ！俺は別の場所を探る！」

「お主一人で行く気か？」

ムラマサが太刀を納め俺を一瞥する。

「そーかい、だったら」

グラスがこちらに杖を向けた。

「ハイアクセル最脚力強化術式解術」

俺の足が青い光のリングに包まれる。

これは、速力強化魔法！

「グラス！お前……」

「へっ、カワイコちゃん探すなら足が速いにこしたことはないだろ？」
にこやかに笑うスカーフエイス。

「お前、補助魔法ちゃんと使えたんだ……」

「……だーかーらー最初に使えるっていつてんだろが、ポケナス！
！」

ムラマサ達と別れ草原から移動して俺は山頂を目指す。グラスの速力強化魔法のおかげで進むのが速い。森林地帯を強化された脚力で飛ぶように進む。

「アイツちゃんと魔法使えたんだな……ん？」

違和感に気づき足を止め周りを見渡す。違和感は耳から感じる異音。

……ウウン……ウウン……

かすかに聞こえるまるで鳴くような、泣くような、特徴的な音に俺は聞き覚えがある。

これは……魔導機関の駆動音？

『魔導機関』

魔族と個々による体力、魔力量で劣る人類が作ったその差を埋める道具。外燃機関により燃料を魔力に変える装置。

そしてこれの駆動音が戦場で聞こえるということは戦人機がいると考えてほぼ間違いない。

俺の眼前、約三百メートル先、山の中腹の林の風景に僅かに感じる違和感に気づく、空間が歪んでいるのだ。歪みが徐々に大きく濃くなっていく。

そしてその歪みの中から異形が現れる。全長は十三メートルほど、金属でできた全身と四対の人工の眼、のっぺりとしたフォルムの頭部と長い両腕に対し短めの脚部。

腕部は円柱であり、腕の先には五本の突起がついているが手の形はしておらず五角形状に配置されている。

そしてもつとも特筆する特徴、背中にはその身長に倍する長さの巨大な砲身。

全体を評するなら長い棒を括り付けられた巨大なサルだ。しかもメタリカルな外皮の奇形体。……いやもはやサルじゃねえな。

ヴウウオオオオオオツ……

ステルスを解いたためだろう産声のごとく駆動音が鳴り響く。

そうか、哭いているのはお前か、デクよ

あれは『戦人機』

またの名をティタンギア、そして俺達魔族は蔑称としてデクと呼ぶ。個々人の戦力で魔族よりはるかに劣る人類が作り上げた魔導機関により動く巨大な兵器。

この重量級の前衛のパワーを凌ぐ巨大兵器との戦いにより俺達魔族は個人の戦闘力ではなく、連携による戦術の重視という最大の転換を迫られた。

『隊長、こちらギード、山の中腹にて敵の戦人機と遭遇』

『ギード！逃げる！一人では……』

『……そうもいきませんよ、あのデク、砲台を背負ってます』

『……なにつ！』

『新型、つてやつでしょうね』

たしかに一人では荷が重い、だが援軍を待つ時間は無くこのまま砲撃をさせるわけにはいかない。

「やるしか……ねーか」

俺だつて軍人だ死ぬ覚悟位はつけている。

あ、部屋のエロ本処分しといた方が良かったかな？

暗殺阻止奮闘編参 無理は程々にしましょう(前書き)

毎度読んで下さる方ありがとうございます

すいません、まとめきれなくて戦闘パートが次の話に続きます

次こそは終わらせますのでご容赦を

暗殺阻止奮闘編参 無理は程々にしましょう

空気を震わし鳴り響く駆動音、戦人機はのっぺりとした外観の頭部を伸ばし、金属の体をきしませて体勢を整え始めた。林の木々を派手に押し倒し方向を転換させ、巨大な砲身の先をここから下の広場の教会へと向けサルのような前傾の姿勢で狙いを定める。

長い両腕は地面に突き立てられ、衝撃に備えるためにアンカーとして固定された。

延ばされた頭部についた四対の人工眼が不規則に目まぐるしく動き回り、精密な照準をつけるべく観測術式を作動させていく。

ステルスを使用していたから砲撃するためのデータ収集がギリギリまで出来なかったのか？

二十メートルを超える巨大な砲身に剥き出しの魔導機関が直結され、背中に背負われていた。

砲身には光が徐々に、しかし確実に集まっていく。

チャージング？、あの戦人機、高電磁加速質量弾砲撃術式ハイリニアカーネによる砲撃ができるのか？

だとすればまともに撃てば小さな街なら二、三発で壊滅させる威力の攻撃が教会を狙っていることになる。

おい、冗談じゃねえぞ！

戦人機の胴体形状が余り大きくないことから恐らくは搭乗型ではなく遠隔操縦型と推測する。ならば付近には駆体操縦、動力調整、指揮、そして砲撃系の最低でも四人が潜んでいるだろう。だがその場所を探す余裕はない。

やっぱり正面からやるしかないか！

ゆっくりと息を吐き出し吸い込む。右手のスピアを逆手に持ち替え、戦人機に狙いを定めた。

位置的には丁度こちらに真横を向いている戦人機、その側頭部へ。

祈るように術式を組み、スピアに込める。前へ大きく踏み込む。

全身のバネを弾ませて渾身の力を込めスピアを投げ槍の要領で投擲。風切りの音を立て勢いよく戦人機に目掛けて飛ぶスピア、それに込められた魔術式が時間差解術される。

発生した突撃術式によって槍の後方から爆音をたてて噴射炎が発生、空中で更に急加速。約三百メートルの距離を疾走し戦人機の頭部へ着弾する。

だが着弾の瞬間に派手な火花が散りスピアがひしゃげ、壊れ、砕け散る。

やはりダメかつ！　なんとなくそんな気はしたけど！

戦人機の外装は特殊合金で構成され、起動時はさらに表面が魔術^{シイ}層^{ルト}によってコーティングされる。

魔族に古来から続く個人の戦闘力を重視した戦い方を、集団戦へと変えさせたその戦闘力と防御力は生半可な攻撃を寄せ付けない。

ギョロリツと片側の四個の人工眼が稼働、こちらを一瞥する。

俺を見ているな……、来るか！？

攻撃に備え身構える、　　だが

再び人工眼が稼働し観測を再開した。

明らかに俺の存在を認めながら無視している。

俺に妨害出来る戦闘力がないと思ってるのか？

一瞬頭に血が登るのをなんとか抑える。

オーケー、いいだろうよ…… 小兵「こひょう」だと思って舐めてかかるなら後悔させてやるよ、このデク野郎が！

いずれにせよ、あの砲をまともに撃たせるわけにはいかない。魔王様の防御魔術なら耐えきれぬ可能性はあるが周りの者は確実に巻き込まれるだろう。

隊長、朱竜部隊の同僚、そして、

クソッ何でだよ

紫色の髪と無邪気な笑顔。

なんでこんな時にあのダメイドの顔がちらつくんだよ！

今現在使える最大の切り札を放つためにイメージを高め、静かに集中し魔術式を組む。

それは今まで使っていた突撃術式よりさらに上の、魔法を教わったじいさんから最後に覚えた術式。

あくまで緊急脱出か包囲網の突貫のみに使えと言われたが…

…今はこれしかない！

ゴルン隊長から貰った剣を引き抜き、両腕で一直線に前へ構え鎧の腕関節部を術式で操作、強固に固定する。ミスリルの強度なら保つはずだ。

さあデク野郎、地獄を見るのは俺か、それともお前か？

呼吸を整え、術式を解き放つ。

『三重展開爆熱収束型突貫術式解術』
トリプルニトロオーバードライブ

俺の背中に魔術円が四枚同時展開する。

うち三枚は右肩、左肩、背中とそれぞれに展開し火柱を上げ噴射を開始した。

そして最後の一枚はさらにその後ろに展開、三枚の噴射炎を受けてそれをより強い力に収束させる。

構えた剣に魔術円に展開し円錐形のシールドを形成。更にシールド自体を高速で回転させ、貫通力を高める。通常は単発で使用する突撃術式を三重に展開、それを別の魔術円で収束させるという究極の加速突撃術式、それ故に魔力の消耗もかなり大きい。

轟音と共に発生した爆発的な加速により助走無しに体は空中へ戦人機目掛け飛び上がった。

周りの景色が歪み一瞬で流れ、重力が俺の内蔵を突き上げて、踏みつけて、ねじ込んでくる。

「オオオオオオオオッ!!!」

気がつけば叫んでいた。いや、そうせざるを得なかった。

しかし俺の耳には俺の声が聞こえない。

究極の突撃術式による超加速は自らの声さえも虚空に置き去りにする。

俺と戦人機との距離が一瞬で詰まる。しかし俺が狙うのは戦人機本体では無い。狙いは付属品だ。

激突の瞬間に俺が見た光景は、

巨大な砲身へ突き立つと同時に、折れず曲がらず壊れずと詠われ

たミスリルの刀身が大きく湾曲する様。

激突の衝撃に耐えきれず、折れる俺の右手首と碎ける右肩
そして、

激突の寸前に発射された電磁加速弾頭が俺の体当たりで標準がズレたためだろう、教会とは別の場所に着弾、爆発する光景だった

十四才の頃、家に兵隊が来てオヤジが戦場になった街から撤退する味方と避難する住民の時間を稼ぐために、戦人機二体相手に足止めをして戦死したと報告にきた。

お袋は黙って淡々と報告を聴いて、兵士が帰った後に寝室でオヤジの服を抱きしめて泣いていた。

気丈で明るいお袋が泣いたのを見たのは後にも先にもそれ一度きりで、

俺にはその光景が目には焼き付いて、二度と忘れられない。

痛エ。

泣き出したい程の激痛とそれによる呼吸の不全で目が覚める。顔に当たる砂利で自分が地面に倒れていると気づいた。

昔の夢を……みていたのか

どうやら気を失っていたのは一瞬だったようだ。

砲身への激突時に弾き返された着地の際、幸運にも左肩から落ちたのだろう、左肩も碎けていた。

これも胡散臭いゾンビ僧侶にも親切に接してきた日頃の行いがよ

かったのだろうか。

おかげで頭を打って死なずに済んだ。そしてミスリルの強度にも助けられた。ゴロン隊長が言っていた「出来るだけ良い武器を使え」というあの言葉を今更ながら噛み締める。

痛いっことは生きてるってことだな……

だがほぼ全身を打撲しておりまともに動けそうにない。痛みで息をするのもやっとだ。

ヴウオオオオオオオ……

突如、空気を震わせる吠え声のような駆動音。

横たわる地面から伝わる振動に気づきなんとか顔を上げる。

俺の目前約三十メートル前に立つ戦人機が俺を見つめていた。砲は砲身が歪んで使い物にならなくなったのだろう、切り離されている。

その感情の無いはずの人工眼越しにはっきりと感じる操縦者の憎悪と怒り。

へっ、一週間、下手すりゃそれ以上の忍耐が水の泡になっちゃまったな。……人を小兵だと思ってバカにしてかかるからだよ、サル

野郎

戦人機の右腕先端が唸りを上げて高速回転、青い光を上げる。恐らくは魔術式による削岩機の類。本来は塹壕を掘るための装備だ。

巨大な、途方も無い足音を立てて前進。

行き掛けの駄賃か、あるいは憂さ晴らしか、どちらにせよ標的は俺だ。

あーあ、俺も結局はオヤジと似たような死に方か……

なぜだか、ほんの少しだけそれが嬉しかった。
緩やかに、穏やかに全てを諦めて目を閉じる。

……あー、やっぱりエロ本処分しときゃ良かったな。

暗殺阻止奮闘編四 意外と身近な人が高レベルだったりします（前書き）

毎度読んでくださる方ありがとうございます

やっと戦闘シーン終わりです

次からはまたバカ話再開です

暗殺阻止奮闘編四 意外と身近な人が高レベルだったりします

痛みとそれによる呼吸不全を耐えながらぼんやりと思い出す。

あー、そついや友達に金貸したまんまだったな。

振動と共に戦人機が巨大な足を進める。

まあいつか、今更に気にしてもな。

振動がピタリと止まる、俺は力無く戦人機を見上げた。

ブツサイクなツラしてんなあ、コイツ、あっそつだ。

唸りを上げて削岩機が天高く振り上げられる。まるで空を突くように。

お袋、すまない……

破壊の轟音が頭上に勢いよく迫る、俺は目を固く閉ざす。が、次の瞬間猛烈な勢いで後ろに引つ張られ投げ飛ばされた。

すぐ近く、というか眼前で巨大な破碎音と共に舞い上がった細かい破片が俺に当たる。

なん……だ!?

地面にぶつかると思った刹那冷たい何か俺を受け止めた。

状況が掴めず、受け止めた相手確かめるため後ろを振り向くとそこには。

「よう、ギード。しばらく見ないうちにずいぶんカッコよくなっ
たな？ え？」

見慣れた笑うスカーフフェイス。

「グラス……」

ということは、

前を向くと目の前には鮮やかな紅の重甲冑を身につけた白骨の長
身。

「ムラマサあ！」

ムラマサは戦人機から視線を外さず、太刀を構えたまま返事を返
す。

「ギード、お主の死に場所はまだここではないぞ。戦場で助かるの
に諦めるのは阿呆のすることよ」

別の場所の探索から戦闘の騒ぎを知ってここに来たのだろう。

「ついわけで、ほれ」

『ハイリベアラ
外傷高治療術式解術』

グラスの杖から暖かい光が放たれ俺の治療能力が活性化する。

「止める！ 俺までゾンビにする気か！ まだ死んでないぞ！」

「……お前なあ、こんな時まで冗談言ってる場合かアホ！」

いや、俺は結構本気だぞ。

「ギード、グラス、じゃれるのはほどほどに……」

言い終わらない内に頭上から唸りながら降り注ぐ削岩機。

だがムラマサはそれを一瞥もせず、緩やかな最小限の動きで舞
うように回避。そのまま回避と同時に目にも止まらぬ速さで腕を斬
りつける。

が、火花を上げ鋭い金属音とともに弾かれた。

「無理だ！ ムラマサ、グラス、俺を置いていってもいいから下が
るんだ！ 砲撃を防いだ時点で俺達の勝ちだ！」

戦人機の防御力は非常に高い。ある一定レベルの前衛役と後衛役
の連携によって確実な撃破が成り立つ相手なのだ。

グラスは後衛の補助役、攻撃はムラマサの刀のみ。

いくら腕が立つと言っても軽量なスケルトンの斬撃で抜ける装甲ではない。

「ヒュー、まーたカッコいいこと言っちゃってーコイツは」 治療を続けながらグラスは軽口を返す。

「だから俺は……」 その時、標準をムラマサから俺達に変えた削岩機が眼前へ大きく迫る。

「はい、お猿ちゃんは大人数しくしてねー」

ヘキサウオール
『六角状魔法障壁術式解術』

前面に配置された、魔術式によって構成される無数の六角形の障壁が削岩機を受け止める。

派手な唸りをあげながら空中に制止する巨人の拳。

「あ、ほいっと、」 グラスが軽く手をふるると障壁が外側に湾曲、削岩機を跳ね返す。急に押し戻されてバランスを崩し、轟音をあげながらたたたらを踏む戦人機。

「サルモドキよ、お前の相手は拙者だ」

隙を突いて巨大な膝を駆け上がり、腕や肩を幽鬼の如き動きで飛び移るムラマサ、今度は側頭部へ飛び上がり飛燕のごとき横なぎの斬撃を仕掛けた。

先程よりずっと鋭い金属音と更に大きな火花が上がる。

俺の目の前に二つの半球形の部品が音を立てて落下、戦人機の人工眼だ。

「ふむ。末端程度ならなんとか切れるものだ」

地面に音も無く着地し、飄々と、だが鋭い殺気を込めて呟くムラマサ。

……ウウウオオオオオオツ！！

怒気を漲らせるがごとく鳴り響く駆動音。

鋼鉄の胸部から多弾掃射術式を多重発動、個人が放つものとは比べ物にならない程の量と範囲の鉄の弾丸をムラマサめがけバラまく。だがそれさえも太刀を高速回転させて弾丸を弾き、流れるような円舞の動きによる回避運動で無効化、金属丸の乱舞を悠然と突き進むムラマサ。やがて弾丸の豪雨を抜けて、巨人の死角である足元へムラマサが到達。それを迎撃するために削岩機を振り下ろす巨人。

だが紅甲冑のサムライは避けようとせず頭上へ迫る破壊の鉄槌へ太刀を構えた。

「無茶だムラマサッ！」

思わず声が出る。

地を這うような衝撃と轟音、巻き上がる土煙、だが削岩機がぶち当たったのはムラマサで地面ではなく戦人機自身の足首。その足下にはムラマサが変わらずに佇む。

まさか、激突の瞬間に斬撃を当てて削岩機の軌道を足首へズラしたのか！

もはや俺より上どころではない、正に魔神の如き剣の腕と度胸だ。……一体何なんだコイツらは？

先程みたグラスの術は俺の見たことがない、だが強力な防御呪文。ムラマサの剣術は魔族軍の水準を遥かに凌駕している。

コイツらは何者なんだ？

二人の能力は明らかに流れの傭兵の持つレベルではない。
「ほう、足首はまだ保つのか」

ムラマサは削岩機の衝突にも耐えた巨人の足首を見てのんびりとつぶやく。

「前に足首狙って壊しまくったからなー、改修したんじゃね？ 新型だし」

治療魔術を終え俺を肩に担ぐグラス。

…… っでのんきに言ってる場合か！

「だから俺は引けっ……」

「しゃーねーや、アレやるぞ、ムラマサ。アレな」

「仕方あるまいな、今は己の未熟さを噛み締めるか」

「…… 何する気だ、お前ら？」

グラスの指先に幾つもの光が灯る。

「まあ、まずは気難しい隣人にお近付きのプレゼントだ」

『ハイダウナー 最攻撃力低下術式解術、ハイブレイキング 最脚力低下術式解術』

戦人機の両腕が光の鎖で拘束され、削岩機の回転が弱まる。両足が地面から生えた同じく光の鎖に捕らわれ動きが鈍くなる。

ヴウウオオオッ！

叫びを上げてもがく巨人、だが鎖は外れない。

「そして我らが主役にアクセサリーを」

『ハイアップバー 最攻撃力強化術式解術、ハイアクセル 最速力強化術式解術』

青い光の輪に包まれるムラマサの四肢。

「別にアレだけで十分なのだが」

なにやら不満そうに呟くムラマサ。

俺はまたも驚かされた。通常は同時展開出来る魔術は扱う魔術のレベルによるがせいぜい二種か三種、グラスは障壁を含め五種の魔法を同時に扱っているのだ。

「じゃあいくぜムラマサ、受け取れよ！」

グラスが渾身の精神力を込めて濃密な魔術式を構成、杖から魔術

円が少しづつ展開、拡大する。俺は魔術円に浮かぶ紋様から魔術の構成を読み取った。

「おい、グラス……その魔術は蘇生魔術か？ 死にかけているやつなんてここには……」

戦闘不能者などここには居ない。

「いるじゃねーかギード、目の前にピッタリの死人がよ」

「塵は灰に、灰は塵に、生命の流転よ逆しまに回れ。」

父と聖霊の御名において、世界の掟よ逆しまに変われ。
リザレクションエクストラ
超高位蘇生術式解術」

グラスの杖から螺旋状にねじれた魔術円が大きく展開。そこから放たれた強烈な光がムラマサを突き刺す。

ムラマサを中心に巻き起こる目を開けられないほどの光と豪風、だがその強力な光はどこか温もりを、吹き抜ける風は生命の息吹きを感じさせた。

本能的に理解する。

今、俺の目の前には奇跡が起こっているのだと。

風と光が収まり、その中に立っていたのはムラマサではない者、いやムラマサだった者。

まず目に入ったのは全てを吸い込むほどの虚無の闇を持つ黒髪、十メートルほどの長さの黒髪が螺旋状に空間をたゆたっている。

その螺旋の中心にいるのは長身のソリッドな雰囲気を持つ女性。

年齢は二十代半ばほど、まるで出来すぎた彫刻のように美しく整った顔立ちと艶めかしい唇。

そして、その眼差しには力強い強靭な意志が宿る。

肌は降り積もる積雪を思わせる程のきめ細やかな白、ごく薄く見える僅かな紅が彼女が作り物の人形ではなく、生きて血の通った人間だと気づかせる。

身につけているのはムラマサと同じ紅の重甲冑と太刀。吹き抜けた豪風のせいか、山間から運ばれた大量の山桜の花びらが、たゆたう黒髪と共に周囲に狂ったように舞い散る。それが気高く美しい戦女神といった佇まいの彼女と、その前に立つ醜い鉄の巨人との対比を鮮やかに彩る。

美醜と季節が一体と成るその様はあまりに幻想的で、神話的で、まばゆく、美しく、それは正に神が描く一枚の絵画。

もはや事態が上手く掴めず呆けた表情をする俺をグラスがニヤニヤと見つめている。

「おい、グラス……あの美人はどちらさん？」

「どちらさんって見りゃわかんだろが。」

正義の美少女魔法戦士だ」

……へえー、そうなんだ。

「って、嘘つけデメエっ！」

「ま、あれは見ての通りにムラマサの生前の姿だよ」

こともなげに言うグラス。

「アイツ……女だったのか？」

「お前それぐらい骨格で見抜けよ、レディに失礼なヤツだな。俺の特別製の蘇生術式でアイツを生前の姿に巻き戻しているのさ、三分間だけだがね。そしてその間、ムラマサがスケルトンになることで制限されていた能力が最大限に発揮できるんだよ」

もはや凄腕どころではなく訳の解らんレベルの話になってしまった。

……アンデッドを生き返させる蘇生術式なんてアリなのか？

「ふむ」

手を動かしながら体の各部をチェックする美女「ムラマサ」。

既に抜いていた太刀の刃で親指を僅かに切る。血の玉が溢れる指を静かに口元を持って行き己の血で唇に紅を刺す。

整い引き締まった彼女の表情が僅かに妖しく綻ぶのが見えた。その艶めかしさに俺は一瞬引き込まれ辛うじて踏みとどまる。

ああ、そうかあれは楽しんでるのだ。骨となった身ではもつめたには味わえない痛み感覚と自らの血の味を。

「どうにも時間が無いのでな、早めに終わらせて貰うぞサルモドキよ」

もはや骨がこすれるかすれ声ではなく、高く柔らかな美声で告げるムラマサ。

太刀を鞘に収め、左手で掴む。

右手を柄に触れるか触れないかの位置で固定。

そのまま足を広げ腰だめに構える。

なんだあの構えは？

剣は鞘に収めるよりも、最初から抜いたほうが早く斬りつけられるだろうに、あの構えは何か意味があるのか？

「ムラマサは……一体何をやってるんだ？」

「ありやムラマサの国のアイイという剣術で…… まあ見てりゃわかる、いや見ててもたぶん何が起きてるかわからんなこりゃ」

……何をわけ解らん事を言ってるんだこのゾンビは？

一方ムラマサと対峙する戦人機はグラスによって下げられた性能を補うために魔導炉の出力を更に上げた。

「ヴウウオ”オ”オウウオオッ！」

より歪な、既に吠え声に近い駆動音を上げ両腕の削岩機をフル稼働させた。巨体を震わせてムラマサに襲いかかる。

しかしムラマサは微動だにせず、構えたままそれを待ち受けた。一拍を置いてどす黒い程の巨大な殺気がムラマサから溢れ、次の瞬間には針のよう収束し、消える。

それが殺気なのではなく凶悪な程緻密な魔術式なのだ。俺は今更気づいた。

『虚真流因果抜刀術式一ノ太刀解術』
トツカノツルギ

キーンという高く、遠く、透き通って響く鏝なりの調べ。

だがムラマサが刀を抜いた様子は一切無い。いや、確かに抜こうとした動きは見た。しかし次の瞬間には、既に納刀に移っていた。

一方、戦人機は両の削岩機がムラマサまであと少しで届く位置でピタリと動きを止めている。

何だ？ 動力伝達のケーブルを切断したのか？ だがあれは構造上は装甲の下のハズ……

やがて戦人機は再び動きだす。

右半身が右へ。

左半身は左へ。

正中線で分かれたたそれぞれの半身が地響きを立ててゆっくりと崩れ落ち、骸となって転がる。

十メートルを超える鉄の巨人が頭から真っ二つに切断されていた。

「 なっ、なんっ 」

何が起こったのか解らず混乱が俺の頭を埋め尽くす。

「な、何なんだこれはっ！」

「なんなんなんなんとうるせーな、ギード。あれがムラマサの魔術式だ。因果突破型魔術でいつてな、原因、過程、結果のプロセスから過程をすっ飛ばして結果のみを起こす魔術式なんだよ」

「……なんだ、そのインチキは？」

因果突破など出来る者は世界でも本当に極限られた術式だ。

「ムラマサは『斬る』ことに特化した術式剣技を極めたサムライだからギリギリ出来るのさ。つまりアイツが切れると確信した物は、斬る過程を取っ払って斬った結果のみを押しつけられるってことだな。」

ムラマサ曰わく『過程を超え結果を叩きつける魔術式ゆえ、抜刀と同時に納刀が終わり、残るは鐸鳴りの音と骸のみなり』という技何だってよ」

気が遠くなる、何だその反則技は。

「一体お前ら……なん……なんだ……」

ヤバい。魔力切れと傷を治すために体力を消耗したためにホントに気が遠くなってきた。

「おい、ギードしっかりしろ！ムラマサ、何か気付けになるもんないか！」

こちらに向かって歩いてくるムラマサ、三分経ったのだろうその肉が光と化して霧散、見飽きたスケルトンに戻る。

「おお、ウイスキーなら有るぞ」

渡された皮袋から酒を飲む、口中に広がる苦味と芳香。

「くそ、すまん。しかし、よくこんなときに酒なんて持ってたな」
淡々と答えるムラマサ。

「ああ、普段酒飲む時に骨格の中に酒を入れる袋をつけていてな。それを持っていたからだ」

「……マジで？」

俺は酒を吐き出して倒れた。

もつやだこんな職場。

暗殺阻止奮闘編伍 人と人の縁とは不思議なものです

小鳥の爽やかなさえずりが聞こえる。

木々の木漏れ日は穏やかに優しく森を照らし出す。地面の落ち葉を踏みしめながら確実に一歩一歩を進んでいく。

やはり森は良い所だ

……その辺に兵士の死体が転がっていないくて、ついでに俺の体調が最悪でなければ。

「うーヤバかった、今回は本当にヤバかった、死ぬかと思った」

「死ぬ死ぬってよー、別に死んでねーんだからグジグジいうなよ、ギード

本当に死んだらもつときついんだぞ」

「お前の経験なんぞ聞いてねえよ

実質トドメはムラマサに刺されたようなもんだろうが」

「確かに拙者の飲んだ酒だがスケルトンの時に飲んだ物だから質に変化はないぞ。骨の間を通っただけだからな」

「だからってそんなもん飲ますな……」

戦人機との戦闘後、ムラマサの酒にトドメを刺された俺はグラスに肩を貸され、教会で合流するべく三人で森を歩いていた。

あとすぐで教会という地点では襲撃して来た重装騎士たちが所々に死屍累々と転がっている。

うちの主力部隊と殺りあつたんだ…… ご愁傷様をやつたな。

朱龍部隊の兵士の死体はない、主力部隊ははっきりって体力的にも魔術式的にも重量級の化け物揃いなのだ。

それが束になって連携戦術などをやるのだから、この程度の規模の兵士では保たない。

あちこちに出来た小さなクレーターや焼け跡がその力の差を物語っている

……それだけこの兵士達は足止め用の捨て駒なんだろうよ

場合によっては、いや最初から砲撃に巻き込んでも構わないもしくは巻き込むことが前提の人材。例の副皇帝の偽物もその類なのだろう。

死体、焦げ跡、破壊の痕跡、死臭と焦げた臭い、戦争が終わった後に又再び見ることになるとは正直思いたくは無かった。

ここまで向かう途中で交わした通信で隊長の方の戦闘は既に終了していると連絡された、残党の類とも遭遇は無かったなのであの戦人機の操縦士達以外は敵兵の恐れはまずないだろう。ていうか今きたらまず俺がヤバイ。

「おい、ギード、教会が見えてきたぞ。生きてるか？」

ぐったりと力の抜けた俺を引きずりながらグラスが笑う。

「……うるせえ、俺はまだお前の仲間にはならねえぞ」

「豪儀な台詞を言えるなら無用な心配だったな」

ムラマサがカタカタと肩の骨を揺らした。……それ笑ってんのか？

教会についた俺達を出迎えたのはまるで丸太とタルを組み合わせたような巨大な人型の山脈、即ち隊長と主力部隊の面々、総勢三十人程。

「ギード、無事か！」

「……死ぬかと思いましたがなんとか生きてますよ。隊長」

「話はムラマサたちから聞いている、砲撃を阻止したとは大したものだ。よくやったぞ、大手柄じゃないか！」

バシリツと音を立てグローブよりでかい手が俺の背を豪快に叩く

痛えっ

「ちよつと、隊長痛いつすよ」

「ん？ああすまん」

ふつと周りが暗くなる、気がつけば主力部隊の面々が俺を囲んでいた。

「な、なんすか？」

「やったなギード！」バシンッ

「よくやったぞ！」バシンッ

「お手柄じゃねえか！」バシンッ

痛い、痛い、痛い、

「さすがだな！」バシンッ

「なんでお前アイアちゃんと仲いいんだよ」バシンッ

「アイアちゃん経由でメイドさん達からのお前の評判上がっているらしいぞ、コノヤロウ！」ガスッ

「褒美がでたらなんか奢れよ」

バシンッ

バシンバシンバシンバシンバシン

痛い、痛い、痛い痛い、

バシンガスッバシンバシンボコバシンゲシッ

ブチリと俺の中で何かがキレた。

「痛いっつていつてんだろがぼけども！」

手近な獣人族、巨猿種の奴を殴りつけ魔術式を発動。

「爆熱^{ニトロボムト}打撃掌術式解術」 爆発音と共に火球が炸裂、しかしソイツは多少顔が焦げただけで平然と俺を見下ろす。

「おいギード、俺は叩いてないぞ！顔が焦げただろが！」

「うるせえ、お前は最後に蹴っただろ！第一、その出来の顔面なら黒こげにして検閲入れてやった方が世の中のためだ！」

一応加減はしたがここまで平然とされるとやはり全力で撃つべきだったと後悔する。

重量級の前衛主力部隊の奴らはまず種族、即ち体の出来が違う。平均身長は二メートルを越え平均体重は百三十キロ以上、全員が強力な近接術式を持ち、殴り合いと後衛の壁役を兼任する生きた巨岩だ。……そのせいでゴツくなった結果、モテないと嘆くやつが結構いるらしいが。

「き、気にしてるこというなよギード！。体の傷より心の傷の方が痛いし癒えないんだぞ」

「……俺はついさっきケガを治したらついでにトラウマ食らったぞ」
魔力と体力はまだ戻らないが俺の両腕は完治している。本来戦場で使う治療術式は応急処置や鎮痛が主で骨折などの重傷を治すのは戦場外で時間と手間をかけて治すはずなのだが、何故かガラスの治療術式は短時間で骨折を完治させてしまった。

ムラマサの非常識さに埋もれがちだがあのグラスも十分に異常だ。

「……つーか俺、アイツら居なかったら確実に死んでたな。………もう少し強くなるかなあ。」

「お前ら、ギードで遊ぶのはほどほどにしとけ！ギード、お前はまず馬車で休養を取って回復しろ。戦人機の部品回収隊を向こうに派遣させたからそれが戻り次第ここを出るぞ」

隊長、ほどほどに正直止めて貰いたいんですが。

「隊長、魔王様はご無事なんですか？」

隻眼に優しげな光をともし、隊長は俺の肩に手を置いた。

「うむ、最初は敵兵の数が二、三十人ほどだったのが段階的に増えていって百人を超えるほどになったが、所詮は足止めだ。問題はなかった。魔王様もご健在だ。」

お前が砲撃を阻止した後もここに残ると仰られたがさすがにマズいのでな、今は馬車で後方に引いてもらっている。部品回収は魔王様の直々の命令だ、引き受けた連中は張り切っておったぞ。何か帝国と繋がりのある物証を揃えられれば交渉に使えるかもしれん」

部品に入る刻印等から帝国の差し金を追求出来れば今回の一件も後の交渉のアドバンテージになるだろう。戦人機の操縦士を捕まえて証言を取ればなお良い。

「なるほど。そういえば隊長、例の副皇帝の偽者は？」

「ああ、従者二人と一緒に捕らえて魔王様と共に下からせている。どうやら戦闘員の類ではないようだし、捨て駒では情報も持ってはいないだろうがな」

「捨て駒、ですか。……あの敵兵達は砲撃に巻き込まれるのも覚悟で俺達と戦ったんですね」

隊長の視線が近くで倒れている死体に向く、鎧から覗く死体の顔は俺よりも若く見える。

「そうだ。そしてその兵士は若く経験のない者たちだ……。それゆえに捨て駒に使いやすかったのだろうな。……殺した私が言うべきセリフではないが、こんな死に方をするために兵士になったのでは無かるうに」

俺は、俺達は兵士だ。戦いの結果としての死の覚悟はついている。それでもこんな道具のごとく使い潰されて死ぬのは納得がいかない。

死ぬ為に戦うじゃない、守るものと生きたいから兵士は戦うんだ。

「……さあギード、お前はまず休め。それが今の最優先な仕事だ」

隊長に促されて俺を担ぐグラスは馬車の荷台まで俺を引きずって行く。

「さーてと、まーまずは休めや。俺とムラマサで周りは警護しとくからよ」

「……なあ、グラス、ムラマサは、お前らは一体何なんだ？。お前らの能力は流れの傭兵どころじゃないだろ。生きていた時、一体何をしていたんだ？」

土気色のスカーフフェイスは俺を見ずに答える。

「別に、俺もムラマサもほどほどに僧侶やサムライやってただけさ。……それでそれなりに生き汚かったからアンデットなんかやってんのさ」

普段は軽口しか吐かないグラスから強い圧力を感じて俺は一瞬口をつぐんだ。

「……過去は聞くべきじゃなかったか？」

「いや、話すほどの価値のある過去じゃないだけの話さ。それによギード」

「なんだ？」

「なんかミステリアスな過去のある男のほづが女の子にもてるじゃん！」

「……やかましい」

やっぱりグラスはグラスだ。

とりあえずは馬車に到着、息も絶え絶えに荷台の扉を開ける。

薄暗い馬車の室内にちょうどマットが敷いてあるのを見つけ鎧のまま倒れ込む。

あーもうだめだ、指一本動かん。……ん？

倒れた俺を見下ろす紫の髪のメイド服の少女が見える。

「……アイア、なんでここにいるんだ？。魔王様と一緒にさがったんじゃないのか？」

「あ、あの私少しなら治療術式使えるから無理を言っただけ残らしても良かったんです」

「…なんで残ったんだ！。ここは危険なんだぞ。第一、主力部隊のやつらは多少焦げたり溶けたり死んだりしても無駄にしぶといから心配はいらないよ！」

「さすがに死んじゃったらずいんじや……。あの、私ギードさんが戦人機と戦ってケガをしたってゴルンさんから聞いて居ても立ってもいられなくて…」

「……ひよつとして俺のために残ったってことか？。参ったな、怒鳴っちゃったよ。どうしょ。」

よし、気まずい空気をなんとかすべくまずは謝ることにしよう。

「あーさっきは怒鳴って悪かった、アイア。ゴメンほんとゴメン。でも、ここが危ないのは本当なんだ、それにな、……戦場なんて惨い物をアイアみたいなのが見るもんじゃないだよ」

これは俺の本音の三分の二、もう三分の一は、俺自身がこの子に人を殺す所を見られたくないのだ。

「ごめんなさい。あの、昔知ってた人がギードさんと同じように戦人機と戦って死んだって聞いてて、それを思い出して怖くなつて…、でもほんとにギードさんが無事で良かった…」

アイアの目尻にうつすらと浮かぶ涙に気づく。俺の心中になぜか浮かぶ罪悪感、まったく女の涙が凶器なら少女の涙は必殺の暗器だ。

「…その知ってる人ってのはどんな人だったんだい？」

目尻の涙をそっと拭いながらアイアは答える。

「私が孤児だったって前に話しましたよね。六年前、十才だったころ住んでいた街に帝国の兵隊が進行してきて、家族もみんな死んでしまつて、一人で泣いていた時にその人に助けられて避難出来たんです。」

「そりゃ、まさしく命の恩人だな」

「はい、その人は軍人で私を街の人達に預けて避難する時間を稼ぐ

からって言つてまた街に戻っていったんです。

おっきな槍を持つててすごく優しい人で、なんだかギードさんに似た感じの人なんですよ。

だから、ギードさんが戦人機と戦つたつて聞いてあの人みたいに死んじゃうんじゃないかって…不安で…恐くて…」

俺に似た？槍を持った男？……六年前？

「なあ、アイア。君が昔いた街の名前は……」

「今はもうないんですけど…アベルっていう帝国との国境近くの街です」

アベル、知っている。忘れられるものか。

オヤジの死んだ街の名前だ。

そうか、俺はオヤジの護りたかつたものを護れたんだ。言葉に出来ない何か熱いものが胸に居座り、自然と涙が溢れてくる。

「あ、あのギードさん？、泣いているんですか？どこか痛いんですか？治療は…」

慌てだすアイアを制止し俺は涙を拭く。

「何でもない、何でもないよ。うん、少し昔を思い出しただけさ」

やっぱりもう少しじゃない、もっと強くなるう。

尋問問答暗中模索編巻 初対面の人とは礼儀正しく接しましょう

「隊長、俺が尋問役ですか？」

「そうだ。ギードよお前が適任だ」

魔王様暗殺未遂事件の後、魔王城に戻った俺は体力回復のための休養とその後のちょっとした騒ぎを経て（これは後で話す）無事日常、つまり普段の護衛任務に戻った。

そして普段のように護衛をしていた所で隊長の部屋に呼び出されたのだ。

隊長らしい無駄な物がないすっきりとした実用重視の部屋と机に、小山の如き体格の隊長が背中を丸めて窮屈そうに椅子に座っている。

「実はなギード、先日捕らえられた副皇帝の影武者とその従者を取り調べたのだが、その従者から聞いた情報では自分達は役者という演じることを職業とするもの達であり、軍属のものではないと言っているそうだ」

俺は聞き慣れない言葉に眉根を寄せた。

「役者…？聞いたことが無い職業ですね、演じるというのが職になるんですか」「私もいまいち実態が掴めん。ただ物語や実際の人物を模倣して人に見せることが商売だそうだ」

「なるほど、そういう技能者ですか」

「ということは副皇帝を演じたのもその技能を生かしたものが。」

「さらに従者がいうには自分達は劇団という役者の集団でリーダーは副皇帝役の男であると。」

そして帝国側と契約したその男の指示で演じたというのだ」

「ではその男はなんと？」

「ゴロン隊長は深く息を吐き手のひらを額に当てた。」

「名前や職業は名乗ったが後はさっぱりでな、恫喝も脅しも通用せ

ん、役者という訳のわからん職業につくのが勿体無い程肝が座っている」

「仕方ないなら…自白用の魔術を使っしか無いんじゃない？」

「戦人機回収部隊が回収した部品からは刻印が抹消されていて、おまけに操縦士らしき四人は毒物による自殺体で発見されている。交渉でねじり込める証拠はなく、有力な証言は役者に頼る他はないのが現状だ。魔術による自白の強要では『自白を作った可能性』を帝国側に突かれる場合がある」

「そして軍属でない役者のということなど我が国には関係がない戯言だとはねつける可能性がありますね」

深く溜め息を尽きながらテーブルにある紅茶を一気に隊長は煽った。

「回収部隊の奴らはこんなことならいつそ戦人機ごと国境まで引張ってくれば良かったとボヤいていたな。まあどちらにせよ、その役者から有力な証拠に繋がる証言を引き出さねばならんだ。」

戦人機ごと引張るとは大きくでたが正直あの脳筋どころか毛の先まで筋繊維のような前衛主力部隊ならやりかねない。

「それでなんで俺なんですか？尋問なら専門が…」

「それが全く屈せんのでな。ダメ元で人族に見た目が近い魔人族で懐柔出来んかと案があつてな」

ダメ元かよ、ていうか誰だその案だしたのは、出てこい突撃くらわしちやる。

「ギード、魔王様も問題がこじれて再び開戦にならぬように今回のことは気を使っておられる。

交渉を有利に進め、問題をこじれさせないためにも、一つ頼む」

「……はあ、わかりました」

「後で尋問官から尋問の要点をわかりやすく書いたしおりを渡させるから受け取っておくように」

いらねえよそんなしおり。

「ええと、俺より隊長のほうが向いてないですか？ 二ごう二こーて

笑いながら両手上げて『証言しないと食べちゃうぞー』とかなんてどうすか？」

「何をバカなことを……、お前が失敗したら試しにやってみるか」
いけますって、身長二メートル五十センチ、体重三百キロ超の体格でオマケに隊長の笑顔すげえ怖いっすもん。

尋問室のある建物は魔王城の離れに拵えていて、そこまでを長い廊下で本館と繋いでいる。

周りには魔術によるトラップと屈強な監視役が常に幅を利かせていた。

薄暗い廊下を歩き看守に指定された尋問室へ足を踏み入れる。

殺風景な部屋、心理的圧迫を意識した間取り壁の色、わざと薄暗く照らす魔術照明、尋問による実用性を重視した合理的な部屋だ。

……合理的過ぎて尋問する俺の方が長時間いたくないんだが。

そして次に眼にはいったのは真ん中に置かれたテーブルと椅子に腰掛けた中背の男。

年は四十代程、特徴的な鷲鼻に顔の堀が深く、その奥の眼が憤怒に燃えて俺を見据える。そして頭には髪の毛が一切生えておらず、磨いたように光沢を放ち周りには血管が二、三本浮き立っていた。

肌はまるでゆで上げたばかりのように真っ赤だ。

とにかくまずはつきりとわかることはこの男は怒っている。

ああ、なるほど、そういうことか

俺は即座に状況を理解、判断した。そういうことが出来なければ戦場では生き残れないのだ。

事態解決の行動を取るべく俺はドアから頭を出し声をかけた。

「ちょっと、看守くーん！部屋間違ってるよー！

俺が言ったのは暗殺事件で捕まった人族の男だよ。海魔族の蛸人種の男じゃないよー！

あ、ごめんね、おっさん部屋間違えたみたい」

突然立ち上がり男は叫んだ。

「誰がタコだテメエ！俺がその人族の男のベイルだよ！」

……………あれ？

尋問問答暗中模索編式　　いいかげん人の言うことを信じましょう

廊下の向こう側から新人の看守がこちらへ向かって走ってきた。
「すみません、何かありましたか？」

灰色の毛並みに垂れた耳、狼の獣人族である狼人種の青年、ブルムは俺に声をかけてきた。新入りらしい少し落ち着かない態度からどうやら彼は俺より若いようだ。

「いや、ちよつとこの人、海魔族の蛸人種だよな？　俺が言ったのは暗殺事件で捕まった人族の男だっていったよね？　部屋間違つてない？」

「いや、あのー、一応あの人自分で人族だって言ってるんですよ」
自信なさそうにブルムは頭をかく。

「いや、看守くん、自称じゃダメだって、ちゃんと調べないと。あんなタコ面で人族はあり得ないよ」

「おい、聞こえてんぞ、ぼけども。いいか、俺はベイル・ギャレット。年は四十二才、職業は役者、副皇帝を演技した役者だ。その魔族の若造の持つてる資料と合うだろうが！　真正正銘の人族だ！」

俺は持つて来ていた資料を確認、確かにあの男の言うことと一致する。

「……俺、こいつを尋問しなきゃいけないのかなあ」

「と、とりあえずやりましょうかギードさん」

気を落ち着け直し、対面の席に着く。看守は記録のために傍らの別の机に着いた。

「あーちよつと看守くん？」

「はい、何ですかギードさん」

「あの他にいたベテランの方の看守の人いないの？」

「あー先輩は昨日から腰痛めて休みなんですよ」

「……えーとじゃあ、尋問官あと一人来るって聞いてる？」

「あれ、聞いてないですか？ 子供さん熱だしたから後はギードさんに任せるって帰りましたよ」

「……マジかよ」

どうも俺は一人でしおりを頼りに尋問しなければならぬらしい。

「あーいいか、最初に確認するぞ？ お前は海魔族の蛸人種だな？」

「だーから人種だつて言つてんだろがアホ！ つーかまず名乗れよ！」

このタコ礼儀に厳しいな。

「……俺はギード・ウォーカー、魔族の青銀種で兵士をやっている。今回のお前の尋問役は俺だ、いいな？」 タコ、つまりベイルは面倒くさそうに表情を曲げる。

「嫌だつつてもどうせやるんだろが。たくつ役者風情にこんなもんつけるたあ魔王国もずいぶん慎重だな、あ？」

ドンツとテーブルの上に投げ出されたのはベイルの両腕、その両手首が魔術封印具でくつつけられ拘束されていた。

「ふん、悪いがそんな油断を誘うことを言つても無駄だぞ。……」

蛸人種なら服の下から触手を伸ばせるからな！」

「だ！か！ら！、しつけえんだよ！タコタコてよ！」

人族にそんな機能はねえ！」

「当たり前だろ、そんなこと出来るのは蛸人種ぐらいだ」

「話をきけえええ！」

ベイルの赤い皮膚がさらに赤く染まる。

「もし仮にお前が人族だとしてもだな、その頭と赤い皮膚はタコ特有のものだろうが」

「頭そつてんのはカツラをかぶり安くするためだ！」

赤いのは今俺がキレてるからだよ！」

「あー、ギードさんいいですか？」

看守が声をかける。

「その人、ここに来た時は肌の色は普通でしたよ。尋問が始まってから赤くなっただんです」

と、いうことは

「なるほど、繁殖期で体色が変化する習性が……」

ガンツと机を叩いてベイルが怒鳴る。

「だまれ、俺にそんな習性は無い。つーかもう何なんだ、その蛸人種でいうのは？ 本当にいるのか？

いいか、最初の尋問の内は『君ひよつとして蛸人種じゃない？』くらいだったんだよ。だがな、思い返す内にだんだん腹が立ってきたら今度は『蛸人種っぽいね？』になつてそれが『蛸人種かな？』から『蛸人種だろ？』に変わつて最終的に『蛸人種だ（確定）』になりやがったんだよ！コンチクショウツ！！」 悔しげにまた机を叩くベイル。 ますます肌が赤く染まる。

こいつ怒つて肌が赤くなる度に他の尋問役にもタコ扱いされてたのか。

良かった、俺の感性は間違つてなかったんだ。

「だがな、ベイル。蛸人種をきちんと否定する材料がないとだな……」

「だからみりゃわかんだろが！」

「あーギードさん実は僕、田舎育ちであんまり人族は見たことないんですけど、爺ちゃんから一発で人族と魔人族や妖人族を見抜く方法を教わつただんですよ」

「……そりゃどんな方法なんだ、看守くん？」

人族と魔人族や妖人族は髪の毛の色が違うぐらいではつきりとした人種的差はない。どうやって見抜くのか？

「ええ、酔っ払つてた時の爺ちゃんが教えてくれたんですけど……人族は足の指が右八本に左八本で計十六本あるって」

なにそれ見たい。

「よし、ベイル、ちよつと靴脱げ！」

しかしまたもベイルが叫ぶ。

「んなわけねえだろアホンダラ！ あの看守の爺さんが酔っ払ってふいたホラに決まってるんだろが！」
なんだつまんねえ。

しかし突如看守くんが立ち上がる。

「じ、爺ちゃんをバカにするなあ！」

……君おじいちゃん子だったんだね。

勃発した看守くんとベイルの口戦を横目にとりあえず俺は尋問を進めるために渡された、尋問の要点を書いたしおりをこっそり取り出した。

やたらファンシーに装飾された表紙の題名は『楽しい尋問入門

懐柔編』

……やっぱり恫喝編とか洗脳編とかあんのか？これ。

最初のページをめくるとなんだか背中が痒くなるような丸文字で『ファースト コンタクトについて』という文章が始まった。

……にはどんな意味があるんだ？

『お互い初めての対面はドキドキすることがいっぱい！、懐柔のためには第一印象をよくするためにまず最初に工夫をこらしましよう。』

最初からいきなり険悪に圧力をかけては上手に懐柔できないぞ！』

だからには何の意味があるんだよ。

顔をふと上げるとタコと狼が激しく口論を繰り広げている。

……もうだめじゃねえか。

尋問問答暗中模索編参 懐柔は計画的にやりましょう

「タコのくせに爺ちゃんバカにするなあ！」

「どこ探しても足の指十八本ある人種なんかいるわけねえだろ！」

ジジイのホラをいつまでも信じてるんじゃないやねえよ！」

「ま、まあ待ってってベイル、蛸人種だって腕が八本あったりするじゃないか」

「だからしつけないだよお前は！ 知るかよ蛸人種なんて！」

ますますヒートアップするタコ対狼、俺も収めようとしますがもはや通用しない。この険悪さでは懐柔しようもなくお手上げである。

どうするかなあ、これ。

とりあえず打開策を講ずるためしおりを隠れてめくる。

おっ！『ファースト コン タクトに失敗したらこうしよう』という項目発見、早速読む。

『うっかりファースト コン タクトに失敗したら取るべきルートは二つ、

一つはいつそそのまま突き進んで相手に圧迫感を与えて自白を促しちゃえ！

懐 柔とはちょっと違うけど情報が取ればオールオッケー！

ワンポイントアドバイス：強い光をバックにきつめに尋問すると並みの尋問相手ならあなたの迫力にクラクラきちゃうかも、強気め

風尋問官でステキ自白をゲット！』

……なんか が増えてねえか？、それから書いた奴がビミョーにムカつくんだが。 だが一応はプロの言うことである、素直に従おう。

「ちよつと看守くん、照明魔術で俺を後ろから照らしてくれ。強めで頼む」

「？、はいわかりました」

後ろから看守くんが照明魔術を展開、俺を背後から照らす強い光にベイルは目をしばたたかせる。

「さて、ベイルよ」 静かにそして強く語気に力を加え威圧感を出す。

「お前がこの最イカだろうとタコだろうとそんなことはどうでもいい……」

「いや、人間のアイデンティティとしてそこは負けられないんだが」「だからどうでもいいんだよ！ とにかく他の従者役の役者からお前が帝国と契約したと……おいつ！」

「……なんだよ」 目をつぶり顔を背けたベイルが返事を返す。

「こつち向けよ、目つぶんな」

「眩しくて見えねえぞ」

これでは意味がない。

「だからこつち向けよ、話してる時に顔背けるのは失礼だろうが！」

「わかったよめんどくせえな」

しぶしぶこちらを向くベイル、だが次の瞬間。

「うおっ眩しっ！」

叫んだのは俺だった。後ろの光がベイルの光沢あるデコで反射し俺の目を直撃したのだ。

「ちよつと看守くん！切って！魔術切って！」

「あっはい」

光が焼き付いてよく見えない。

「看守くん気をつける！ このタコ光学魔術使うぞ！」

「だ、大丈夫ですかギードさん！ くそ、こいつなんてタコなんだ！」

「いい加減にしとけよ、一体何がやりたいんだよお前は……」
あきれ気味につぶやくベイル。

「何がやりたいって…… 尋問に決まってるだろうが！」

「こんな尋問初めて受けたぞ俺は」「いい加減にしとくのはお

前だ、自分が尋問されていると自覚がないようだな！」

看守くんがベイルを制する。

「それにな、ちよつと変わった尋問でもそれも個性の内ってもんじやないか！」

もういい君ちよつと黙れ。

尋問問答暗中模索編四 そろそろ話を進めましょう

薄暗い部屋と灰色の壁。申し訳程度についた鉄格子付きの小窓から覗く雲一つない青空にはこの場に最も足りない物、即ち自由が満ちていた。

対面の座席に座った鷲鼻の禿頭、痩せた体、役者を名乗るベイルは視線を俺から外さずに静かに俺を観察している。

「……………」

「……………」

「……おい、ベイル」

「……なんだよ」

「……なんか喋れよ」

「……いや、あのよ、こういうのは尋問役が最初にしゃべんじゃねえのかよ？」

「……そうやって会話の出だしを人に頼るのやめない？」

「お前尋問する気あんのか」

正直に考えると、無い。

なんでこんな天気の良い日にタコオヤジと狭い部屋に引きこもらねばならんのだ。

とはいえ隊長からの命令である以上やらなきゃいけないんだけれど。

テーブルに隠しながらしおりを開く、たしかまだルート2があったはず。それに賭けるしかない。

『ファースト コン タクト に失敗した時のルート 2』

……また星が増えてるぞ。

『一度悪くなつた雰囲気や元に戻すのはとーって大変！ こんなときは相手の状態を認識するのが大事。こちらに嫌悪を抱いている場合はその緩和を、怒りを抱いている場合はそれを忘却させましよう。』

例えば怒りの感情は長続きしません。そして血糖値が下がると怒りやすくなります。

感情的になっていいる時は小休止をいれて糖分を補給させたほうがいいでしょう。

尋問相手は保身と義理が常に頭の中をぐるぐると回っています。感情をクールダウンさせ、保身を考えさせてこちらに情報を提供するようにコントロールしましょう」

なるほど、まずは相手のコントロールか。

「あーちよつと疲れたな、お茶でもいれて休むか。看守くん食堂に連絡してお茶とお菓子もってくるようにしてくれ、三人分な」

「は、はあ」

早めの休憩にいまいち釈然としない看守くんにとつと耳打ちする。

「今回は懐柔が目的だ、無駄に態度を硬化させる訳にはいかないんだよ」

「なるほど、わかりました…… ならアイツの好きそうな生のエビとか貝辺りをついでに頼んだ方がいいですかね？」

若いのに気がつく青年だ、実に助かる。

「そうだな、なにか適当な魚介類を頼んどいてくれ」

「……おい、お前ら、なんかいま魚介類って聞こえたんだが魔王国じゃ紅茶と一緒に魚食うのか？」

「いや、そんな習慣はないぞ」

「じゃあなんで頼むんだよ？」

あれ？。

「好きじゃないの？ エビとか貝とか」

「だからいいかげんタコから離れるよ」

さて、魔術連絡無線で食堂に注文をかけ、品物が来るまでの時間をのんびりと過ごす…… と行きたいがこういいう気が抜ける時こそ

うっかり情報をもたらすもの、雑談を装ってベイルと話してみるか。
「なあ、ベイルあんたは役者って名乗ってるがそもそも役者ってどう
いう職業なんだ？ 魔王国じゃそんな職業聞いたことがない
だけだ」

いぶかしんだ顔でベイルが俺を見る。

「本当にしらののか？ やれやれ、魔王国内じゃ国境近くの街で
何回か興行をうったんだがな…… いか、役者ってのはな、演
じる事が仕事なんだ。お前らの所でも神話とか伝説とか民話とか
色々物語があるだろ？ それを劇に仕立ててそれに登場する人物
を演技するのが役者なんだよ」

物語を実演するってことか？

「あーつまり物語の登場人物を実際に自分で表現するってことか？

看守くん君はどう思う？」

横で聞いていた看守くんはパタパタと尻尾を振りながら自らの見
解を述べた。

「僕はなんとなくわかりますよ。あれですよ。実家で正月になると
親戚呼んで宴会するんですけど、酒によってくると隠し芸大会にな
ってきて、父方のおじさんのモノマネが物凄い上手いんですよ。多
分役者もそんな感じのことするんじゃない……」

「ああ、なるほど宴会芸の一種か！」

「ぜんぜん違うよバカヤロウ！」

「またもやテーブルを叩くベイル。備品なんだから大切にしろよタ
コ。」

「いいか、役者って職業は演じる事でそれを見る人間に様々な感動
を覚えさせる仕事なんだよ、田舎のおっさんの宴会芸と一緒にする
な」

熱く役者について語りだすベイル。なんか火が付いたぞこのタコ
めんどくせえ。

「宴会芸バカにすんな！ おじさんのやる二丁目の肉屋のおばちゃ
んのモノマネはスゴい似てるんだぞ！」

看守くん、ここにいる人間は君以外おじさんのモノマネも実物のおばちゃんも知らないから、わからないから。

再び険悪になるベイルと看守くん、第二次タコ対狼戦争の勃発を回避すべく話題を変えなければ。

「ベイル、あんたが役者だったのはよくわかってる。そして腕のある役者だからこそ副皇帝役をやれたのも推測はつく。

俺達を知りたいのはそれを命じたのが帝国側の『誰か』なんだよ。ついでにその証拠に成る物があればなおいい。

大人しく応じれば、あんたの待遇もそう悪くはならないはずだ」

「……………」

沈黙、か。もっとも俺の言ったことなど前の尋問の内に何度も言われているだろうが。

「……………従者をやった二人はどうしてる？」

「気になるのか？」

「うちの数少ない劇団員なものでね、で息災にやってんのか？」

「ギードさん、共犯者同士の現状を伝えるのは規則で禁じられます、答えてはダメです！」

あーそういえばしおりの端っこにそんなことが書いてあったよ
うな……………ま、いいか。聞いてないフリ聞いてないフリ。

「……………ベイル、それを伝えればお前の持つ情報を全てこちらに伝えるか？」

「ギードさん！ 人の話聞いてますか!？」

看守くん耳元で怒鳴らないで。

「……………ああ、いいぜ。ただ条件はまだつけさせてもらうがな、先ずは……………」

「「じめんくたせーい!」」

「……………」

「あー、とりあえずお茶にするか」

部屋の外から響く聞き慣れた声に思わず緊張感が緩む。品物を受け取る為に扉をあけるとそこには紫髪のメイド、アイアが立っていた。

「ギードさんお仕事お疲れ様！お菓子とお茶もって来ましたよ」
「ヤバイ、ベイルはアイアの顔を知っている。」

「あ、ああ、ありがとうなアイア。今ちよつと立て込んでいるから、じゃあな」

アイアを急いで戻らせお茶と茶菓子のアップルパイをテーブルに並べる。

「ギードさん今のかわいい娘、知り合いなんですか？ 紹介とかしてもらっても……」

「しない、絶対しない。」

「なあ、今のメイドって教会で魔王の近くにいた娘だよな」

「チツこのタコ覚えてやがったか。」

「なんだよ、もしかして計画邪魔されたから仕返しやろうなんて考えてんのか？」

首を横に振るベイル。

「とんでもねえよ、あの子がポカやんなきゃ今頃俺は砲撃で吹っ飛ばされて生きてねえからな。仕返しどころか幸運の女神様だ」

「もっともだ、アイアのミスがなければ展開はかなり違っていただろう。だがそこにコイツが義理を感じるなら、」

「なあ、ベイル。実はさ、俺がその砲撃を防いだヤツなんだけど、まじまじと俺をみるベイル。」

「……それで？」

「え、いやだから義理とか借りとかそういうので情報を提供しとこうとかそういうの？」

「深くため息を吐きかぶりを振る禿頭。」

「ムサイ男を命の恩人と拝むより可愛い女の子を恩人と拝みたいんだよね。俺としては」

「……………ああ、そうかい」

やっぱりむかつかくなこのタコ。

紅茶のポッドにはすでに茶葉とお湯が入れてあり、人数分のカップにそそぎ入れ、パイを皿に取り分ける。

むかつかからタコの分のパイは比較的小さかったやつをチョイス、ざまーみる。

「さて、休憩が終わったら続きをやってもらおうから……………はっ！」

席に着きカップを手に取った瞬間、前回植え付けられたトラウマが脳裏を最高速で駆け上がる。息がつまり、手が震え、鼓動が増加。

……………モウスコシヨウスヲミヨウ、ソウシヨウ。

「ギードさんどうしたんですか？…ズズッ」

「今更紅茶が嫌いとか言うつもりか？…ズズッ」

「ひでぶっ！」「たわばっ！」

椅子から崩れ落ちる二人の動きは本来速いはずなのに俺の眼にはなぜかひどくゆっくりと見えた。

「う、おおああえお！？ んー！ んー！」

床の上でうめき声を上げるベイルの声さえもひどく間延びしたゆっくりとしたものに聞こえた。……………マエヨリモイリヨクアガッテマスヨ、アイアサン。

「な、なんだこりゃ、新手の捕虜虐待か！」

しばらくして回復したベイルが叫びだす。赤い頬には涙のあとがうつすらとついていた。

「お前は軍属じゃないから捕虜じゃないぞ、どっちかというと逮捕した民間人への虐待かな」

「なおさら悪いわ！……………おい、ところであの看守さっきからう

「ごかないんだが生きてんのか？」

あつ忘れてた。急いで様子を見てみると泡を吹いて気絶していた。

ちよつと看守くん！看守くん！。

「うわ、やつべ」

俺は急いで床に倒れている看守くんに駆け寄る。

「おい！ 看守くん！ 看守くん！ 生きてるか！」

耳元で声をかけながら彼の犬顔の頬をピシャピシャと叩く。

「……ふん……ぐるむ……うぐいる……なく……あい……あい……はす……」

なにやら呪文めいたうわごとをいいながら口から泡を吹いていた。本来狼人種の鼻はとても鋭い、それがあだになったのだろう。しかしそれならば飲む前に気づきそうなんだが。……匂いだけはなんかいいんだよなあ、匂いだけは。

とりあえず俺はほつと胸をなで下ろす。

「良かった… 生きてる」

「いやそういう問題じゃないだろお前」

チツ、誤魔化されんかタコめ。

「とりあえず彼が落ち着くまで待つか、ベイル」

悟られぬよう表情を消し、振り向く。その先にはベイルが猜疑の視線で俺を射るように見ていた。

「お前…… なんで紅茶飲まなかったんだ？ というか、俺と看守が飲むのを確認してたよな？」

「何を言っているんだよ、ちよつと考え事して遅れただけで……」

「あ……う、ギー、ド、さん……」

苦しげにだが看守くんが声をだす。

「おお！ 大丈夫か、看守くん」

「ギードさん…… 明らかに、様子見てましたね……」

ガシリと彼の手が俺の手を掴む。ヤバいコイツにもバレてる。

いつの間にかすぐ後ろに回ったベイルが拘束された手で俺の肩

を掴む。「まあ、あれだ。……白状してもらおうか」

俺の目を直視しながら暗く静かに禿頭が呟く。

あれ？ これなんか俺が尋問される方に回ってね？

おかしいよね？ なんかおかしいよね？

二十分後、全てを白状した俺の口に煉獄風味の紅茶が流し込まれた。悶絶しのた打ちまわる俺の様を終了の儀とし尋問は終わった。

「ああ、気持ち悪い…… 看守くん、なんか俺もう帰りたくなってきた。帰っていい？」

「ダメです、まだ尋問終わってないですから」

ピシヤリと言いつつ看守くん。なんかちよつと君怒ってない？

「で、どこまで話したっけ？ たしか宴会芸がどうか……」

「忘れんなよボケっ！ 条件と引き換えに情報を話すっていったらろっが！」

ガンツと机を叩く。だからそれ備品だから大切にしろよタコ。

「よし、じゃあ早速情報を話すんだ！」

「条件まだ話してないだろが、それ以前に条件が果たされない内に誰が話すか！」

チツ、乗ってこないか。

「だがな、ちよつと待てよ、ベイル。お前今まで何度尋問されても言わなかったのに、条件付きとは言えなんで今更しゃべりだすんだ？ あれか、紅茶が効いたのか？」

「んなわけねえだろ、今まで言わなかったのはお前らの出方をうかがってたんだよ。別にお前だからとか紅茶とかいう理由じゃねえ！」

なるほど、ベイルへの尋問は圧力や恫喝はあっても肉体的な暴力はない。紅茶？ あれは事故だ、俺だって被害者だもん。ならば比較的的中心では無い従者役の役者はそれよりキツイ追求は受けては

いないと踏んだのか。

「俺の出す条件、まずは役者二人の身の安全の保証だ。そして、一応魔王国とも国交のある帝国以外の人族の国が有るはずだ。……ここに移住させてやってくれ」

「帝国以外の国が、出来ないことは無いだろうが…… 帝国に戻らなくていいのか？」

ベイルは自嘲気味に笑う。

「今更帝国に戻っても消されるだけだ。それになあつちに戻ってもどうせ役者は満足に出来ねえよ。『演劇は退廃的であり戦争勝利の妨げである』つってな、色々妨害うけたんだよ。これがな、おかげで二十人はいた団員も今じゃあの二人だけ、だからなおさらあいつらをなんとかしてやりたいんだよ」

「……何故だ、だったら何故お前は帝国の依頼を受けたんだ？」

そんな物請け負う義理はないはずだろうが、金か？」 テーブルの上に置かれた両手をベイルはきつく握りしめた。

「金か、それもある。 だがな若造よ俺は戦争も兵隊も大嫌いだな、正直気乗りはしなかったよ。それでも帝国の交渉役の『この調印式を無事に執り行うことが今後の確固とした平和に繋がる』という言葉葉を俺は信じた。俺の演技でそれを成せるなら本望だな、もつともフタを開けりゃこの様だ。……魔王も騙した役者つて名乗りで箔がつくと思っただがな」

ベイルの自嘲の笑みが寂しげにより強まる。

「……ベイル、あんたは団員二人の保証をしるといったが自分のこととは言わなかったな。それでいいのか？」

「いいさ、条件は軽い方が受け入れられ易い。だがこれ以上は引かないぜ、この様でも俺は一応まだ劇団の団長だからな」

言い切ったベイルの顔には晴れ晴れとした決意が見える。夢を失い、裏切られそれでも尚この男は自らに従う者のために自らを犠牲に戦おうとしている。

タコ呼ばわりして悪かったな、オッサン。

俺は胸中で謝った。

「わかった、その辺は俺も上と話す。だがお前の持っている情報が証拠を握れる程のものにもかかっているんだぞ」

正直俺もこの男を助けてやりたくなくなってきたが尋問役である以上は私情に流されるわけにもいかない。

「証拠か、悪いがその辺りに繋がりそうな情報は薄いかもしれない……まあいさ、条件を通すなら偽証の証言でも何でもやってやるぞ」

「そんなことうちはやらせねえよ！」

思わず叫んだ俺を見てくっくつと喉を鳴らし笑うベイル。

「魔王軍つーのも思ったより平和なもんだな。……そしてこれが最後の条件、これは俺の私的な疑問に答えて貰いたいことなんだが」

なにやら先ほどとは違うトーンの声色。

「魔王の尻に付いてんの、あれなに？」

……やっぱりこいつ、生かして国外に出すの無理かなあ。

尋問問答暗中模索編 よく考えて喋りましょう

「おーい、聞いてんのか若いの!」

ベイルの問いかけにハツと気づき俺は顔を上げた。

「い、いやな、ほらその件はえーとあれだ……」

さてどうするか。今まで魔王様の尻に刺さるアレになれて、すっかりそれが非常識なものだと失念していた。ほんと慣れって恐ろしいもんだなあ。

「あの魔王の尻に着いてんのは一体なんなんだよ」

だからそれを口にするなこのタコ。聞けるもんなら俺が聞きたいんだよコンチクショウ! 大体お前はアレか? 疑問に思うと何でも口に出す子供か? 禿げてるおっさんにも「なんで禿げてるの?」とか堂々と聞く空気読めないガキか?

わからないことは聞けって言ったって時と場合と人物があるんだよ。空気読めよ空気を、この魔王城全体に漂う『見て見ぬ振りをしとこう』という空気を読め! 読んでくれ!

「ギードさん、ちょっといいですか?」

今まで黙って聞いていた看守くんが口を開く。

おっ、あれか? 助けか? 空気の読める青年で助かった!

「実は僕も最近配属されたばかりでアレ何なのか解らなかつたんですよ。ギードさん普段魔王様の護衛しているそうじゃないですか、教えて下さいよ」

「えっ、お前魔王の護衛なの? じゃアレがなにか知ってるよなか、ん、し、ゆ、うううううおおえうっ!! お前も空気読めねえのかよ!

つつか護衛ってバラすな、教えんな!

「よお、もつたいぶらずに教えるよ、若いの。実はあの剣みたいのなのは何なのか知ってたんだろ?」

クソ、黙れタコボウズ。えーとどうする、知らないと答えてもコ

イツが他の奴に聞いた場合どうなる?……

パターン1、他のヤツに聞いた場合。派閥の変な説ならまだいい。下手すれば危険と見なされて殺される可能性がある。流石に殺されるのを放置するわけにもいかんし、肝心の情報を取る前に死なれちゃ困る。

パターン2、魔王様に直接聞きに行った場合。一番最悪だ。とりあえずこのベイルが誰にもアレについて聞かないように丸め込まねば。しかしどうする? どうすればいい?

「だから早く教えろよ」
うるせえ黙れタコ。考えろ、考えるんだ俺。イツベストシンキング俺。

神様降りてこい!俺の脳味噌に降りてこい!

「ああ、あれはな、……一つ確認するが、お前この件について他の誰かに聞いたりしたか?」

怪訝な表情をするベイル。

「いや、お前が初めてだが?」

よし、いける!

「あれはな、ある特殊な魔術に使われる道具だ。その魔術の類別は『呪術』」

「呪術……呪いか?」

正直今の時代、伝説や物語に出てくる呪いのような距離を無視して相手に害を与える魔術は技術的に無いとされていた。しかし魔王様は五百年前、伝説の時代の根源であり生き証人である。

多少の常識を無視した魔術を使えると予感させる存在感がある方には有る。ならば、それを利用する。

「そう、呪いだ。自動的に発動する常識を逸脱した魔術だ。魔王様に『なんでその剣、尻に刺さってるんですか?』という類の質問をした者は、それを発動のトリガーにした呪術式により心臓を止められる。」

「なん……だと……?」

「さらにこの呪いのもつとも恐ろしい所は、『魔王様の尻に着いてるの何?』という話を他の人間に話し、話をされた人間が魔王様にその会話をしたと報告した場合、話を聞いた人間を逆に辿って呪術式が発動。大元の質問をした人間が死ぬ。つまりうつかり他のヤツに聞いた場合もヤバイ。」

「んなデタラメな!」

いやデタラメだけどな。

「ギードさん、それほんとなんですか!?!」

看守くんウソだよ。

「確かに有り得ないと思うだろうよ。だがな、そんな理由がない限り尻にあんな物つけるわけ無いだろう?」

「たっ確かに!」

ベイルと看守くんが同時に声を上げる。完璧に信じたな。

「呪術式のトリガーでない限り、あんなふざけたバカみたいな、アホの象徴のような格好で魔王城を練り歩くわけがないだろうが!」
魔王様ごめんなさいほんとごめんなさい。

「そっそんな理由が……」

赤かったベイルの肌から血の気が引き、頭皮には冷や汗が浮いている。

「だから命が惜しければ、この件には触れず話さずを通せ。死にたくなければそうするんだ。」

「わかった…… この件に関わるのは止める」

いいぞタコ。そのまま忘れる。

「なんて恐ろしい…… 魔王様にそんな呪いが……」

なにやらうつむいてブルブル震えている看守くん。面白いから本当のこと教えんのもう少し後にしよう。

その日はそれで終了し、その後の尋問は他の尋問官に引き継がれ

た。一応俺の口添えもありベイルの条件は正式に受け入れられ、質問にも素直に答えているそうだ。

二、三日後、俺はまたゴロン隊長の部屋に呼び出された。

「この間にご苦労だったなギード、今日はベイルの件を一応お前にも報告しておこうと思っただな」

相変わらず窮屈そうに椅子に座りながら隊長が書類に目を通して
いる。……やっぱり椅子小さいんじゃない？

「情報提供は今の所証拠に結びつきそうな物は得られてはいない。
ま、帝国側の接触者の情報は得られたがな。ベイルの条件のほうは
貿易先の国と交渉中だが、まあこちらはなんとかなるだろう。それ
と関係ないんだが一つ気になることがあっただな」 隊長の顔が苦
悩に歪む。

「『魔王様のアレは実は呪いのアイテムで聞くと死ぬ』派というま
たふざけた派閥が出来てな。一体誰が言い出したか知っているかギ
ードっ」

「……いえ、知りません。全然知りません。そんなヤツいたら俺が
ぶん殴って止めてます」

やべえ看守くんにはんとの事いうの忘れてた。隊長ごめんなさい
ほんとごめんなさい。

外からわずかに聞こえる鳥のさえずり、魔王城の廊下から少しずつさす春の朝日が夜の薄やもを打ち払ってゆく。

時刻は早朝、かなり早い時刻だ。現在俺は魔王様の護衛の夜勤中であり、ムラマサとグラスは当番ではないので今はいない。

いくら仕事といっても普段の生活サイクルと違う深夜番は流石に眠くなる。俺の頭の中の薄もやはまだ晴れずむしろ深くなっていく。

ああ、早く交代の時間にならんかな……

誰も通らない静かな廊下。 退屈と眠気でそんなことを考えていた時だ。

カツリッ

レンガ造りの廊下に極めて小さな音が反響していることに気がついた。 足音らしい。 徐々にこちらに近づいてくる。 しかし、交代にはまだ二時間ほど早いはず、誰だ？

カツリッ

窓から朝日がさす廊下、 まとう夜の幕を陽の光でゆっくりと削ぎ落としながら音の主が向こう側から近づく。

カツリッ

まず印象的なのは魔王城ではめったに見かけない濃紺の背広姿、上着の背中の部分が裾が二股に長く分かれている。 いわゆる燕尾服というやつか。 首もとには真紅の蝶ネクタイ。 両手の白手袋が夜の闇に浮かび上がる。

身長は百七十センチ程、年齢は二十代半ば、俺よりやや上ぐらいか？ 俺と同じ魔族、青銀種を示す青みがかかった銀髪がショートヘアにカットされている。 顔立ちは端整であり、中性的。 美人の範囲に入るだろう。 そして珍しいことにケイ素、つまりガラスによる視力矯正具である眼鏡をつけている。 今どきの魔族は多少の身体の不自由は魔術で補正できるから、そんなものをつける者は少ない

のだ。

ゆっくりとした歩調でこちらに近づき、レンズの奥の瞳で不敵に、そして静かにこちらを見つめる。正直俺は判断に迷った。服装から判断すれば男だが、そのタイトな燕尾服に包まれた体系は出る所は出て収まる所は収まっている、砂時計を連想させる女性の体系だ。

ならば女だろうとなるだろうが、そいつの着る服から連想する職業者の性別は、大体は男である。

いや、それ以前にこの魔王城にそんな職業の人間が居たのか？

「おはよう、任務ご苦労だな」

そいつはややハスキー気味な高い声で告げた。やはり女性、らしい。

やっぱり見覚えがない顔だなあ。

「さっそくだが魔王様に会いたい。扉をあけてもらおう。」

ちよつと待て、いくら魔族でもこの早朝、しかも顔の解らん奴を通すわけにはいかない。

「いや、悪いが俺はあんたに見覚えが無くてな。悪いが所属と氏名は名乗ってもらおうか」 多分女、の顔が少し怪訝な表情を取る。

「やれやれ、真面目は結構だが次からはやらんぞ。わたくしの顔と名前をしっかりと記憶しておけ。」

わたくしはアテレア・リッツファー。五百年前よりわたくしの八代前の先祖が魔王様の執事を務めて以来、代々執事の家系だ。よつてわたくしも復活した魔王様の執事を務めるべく二週間前に魔王様に謁見をしたのだ」

その表情に僅かに優越感に浸る笑みが見える。

二週間前ということは、俺が暗殺未遂事件後に休養を取って休んでいた日だ。

「魔王様はわたくしの能力を認め執事として任命された。ゆえに覚

えておけ、わたくしはお前よりも立場が上だ。下僕一号」

はっ？ ふざけんなこのメガネ！

執事なんぞ話には聞くが実物など見たことがない。そもそも使用人ならいくらこの城の上下関係が緩くても、兵士より上ではないだろう。

「あのお、執事だか羊だか知らんが偉ぶるのは止めてもらおうか。所詮世襲で雇われたあんたが一体どの程度の能力を持つてるといふんだよ？」

ふふん、とアテレアは俺の反論を鼻で笑い飛ばす。

「なるほど、ならば私の能力と世襲によって継がれた経験を下僕一号に見せてやるう。……調べた所によると最近魔王様はあまり外に出たがらず、部屋にこもりがちで気分が沈んでいるそうだな」

たしかにアテレアの言うとおり、最近なぜか魔王様はふさがちだ。

「たしかにそうだが、それがどうした？ 理由がお前にわかるのか」

怪しくメガネを光らせる。彼女はなにやら大仰な仕草で懐から

一冊の手帳を取り出す。

表紙が古そうだが『まおうさまかんさつノート』となんか丸文字で書いてあるぞ。

「これはわたくしの八代前の先祖が書き記した執事業務記録だ。つまり五百年前の書物であり、歴史書としての価値もある」

いやそれ『まおうさまかんさつノート』と書いてあるじゃないか。

「ここに書いてある英知の一つ、なぜ魔王様がふさがきこんでおられるかの理由を貴様に教えてやるう。さあわたくしを朝に昼に夕に、跪き拝め奉り賜え下僕一号」

「いいからとつとさえよ、バカ執事」

もうダメだこらえきれん。

「ふん、ならば心して聞け。この書に記される、理由として推察で

きる記述、それは『魔王様は面と向かってお前キライと言われると表面上は平気になっているが影で結構へこむタイプ』だ！っ」

そりゃ暗殺なんて『お前キライ』ってレベルじゃないよなあ。
っーかお前のご先祖何観察してんだよ？

執事襲来編式 昔の人を尊びましょう

……意外とナイーヴだったんだな、魔王様。

メガネをスツと指で押し上げ続きを解説するアテレア。

「因みにこの記述の内容は約五百年前、親睦のために、魔王様に『城の人間の魔王様の印象が最悪《無論大嘘》』というドッキリを仕掛けた所、ドッキリばらしを受けるまで一週間部屋に引きこもった」というものだ」

「何考えてんだよ、五百年前のこの城の奴らは！！ つうかネタばらしが一週間後って長いよ！」

「ドッキリ直後は平気な御様子だったので気づかなかったそうだ。

あとドッキリ報告役を決めるのに三日間もめたと書いてある」

「グダグダじゃねえか！ それ以前に昔の城の人間は伝えるべきことを早く伝え……」

そこまで言いかけて俺はハツと今の状態に気づく。

「ま、まあどうしても言いにくい場合ってあるよな」

「ちなみに我が御先祖はこの時『報告役を決めるじゃんけん大会で一又ケ出来た。うれしい超うれしい』と書き残している」

「いやそこは率先していけよ！」

パタンと手帳を閉じ、仰々しい仕草で懐にしまうアテレア。

「どうかね？ 下僕一号。執事の偉大さを身に知ったのなら、朝に昼に夕にわたくしを拝み奉り……」

「黙れボケっ！ 拝む所かいたわる価値もねえぞ。わかったのは昔の奴らがアホやってただけじゃねえか！」

ふう、と溜め息をつき肩をすくめる。

「やれやれ、御先祖の偉業に畏敬を抱かんとは。過去を尊ばぬ者に未来は無いぞ？」

「さっきの話が偉業なら俺は滅びの道を選ぶぞ……」

俺は思わず頭を抱えた。何だこの執事は？　何で昔の連中は魔

王様イジって楽しんでんだよ？

「ふむ、ならばわたくしの能力を知れば考えもわかるかな」

「そういや、あんたここに来る前はどこに居たんだ？　執事っ―

ことはどこか他の家に仕えてたとか……」

「ふっ、五百年前の魔王様封印より御先祖は魔王様以外には執事として仕えずと誓いを立てた。」

「えっ？　じゃあ……」

バツと腕を跳ね上げ、姿勢をただし叫ぶ。

「ゆえに我が家系は、会計士、銀行職員、植木屋など代々職を変わってきたのだ！っ」

「全然、代々執事じゃねえええええっ！」

執事襲来編参 情熱って大事です(前書き)

あけましておめでとございませう。

毎度へんなキャラばかりですが今年もよろしく願います。

戦場に置いて、ワケのワカらん物に出くわすことは割とある。

しかしよく観察すれば敵方の新型戦人機だったり、酔っ払って暴れてた味方兵だったり、戦場漁りやつてるただの民間業者だったりと本当の意味で妖怪じみた物はまずない。状況に飲まれず、冷静かつ早急に観察と行動を起こせば、無闇に恐れる必要はない。

現状観察、相手特徴『中性的かつ美人な女性、胸結構ある、自称執事、アレな態度と性格、変な本持つてる』

よし、応援呼ぼう。

通信のために耳元に手を伸ばす。が、執事がその手を掴む。

「……何すんだよ、執事さん」

「それはわたくしのセリフだ。どこにかける気だ」
振りほどこうと力をいれるがなかなか離れない。結構力あんなこいつ。

「規則でな、不審人物みたら兵隊の詰め所に連絡せんといけないんだよ。執事さん」

「誰が不審人物だ！」

お前だよ、お前。

「だいたいあんた元執事でもなんでもないなら、執事としての能力なんか無いだろ。」

なんとか執事の手を振りほどく。

「その心配は無用だ。わたくしには父より教わった一子相伝の執事道があるっ！」

「俺執事についてよく知らんけど、執事ってそういうもんじゃないだろ！？」

なんだよ執事道って、暗殺拳法とかじゃないよな？

「いつか復活した魔王様に再び仕える為に御先祖が残した、四八項

目に及ぶ執事教育カリキュラム、それが執事道。

わたしはそれを全て修めてきた」

割合豊か目な胸を張るアテレア。

「いや実務としての執事業経験が無きゃダメだろ！」

「お前の言うことは確かに一理ある。下僕一号よ」

メガネの奥の瞳を光らせ漲る決意をもってアテレアは俺に答えた。

「しかし時には賭けも必要だ。古人曰わく『当たって砕ける』ということわざもあるではないか」

「それはことわざじゃねえっ！ 失敗するやつは捨て台詞だ！」

しかし執事はひるまない。

「確かにわたしには執事としての経験は無い。しかし魔王様に捧げる忠誠と愛は何者にも負けずこの胸にある！」

言っていることはムチャクチャだがここまで堂々とされると何故か俺が気圧される。

「だ、だったらそこまで言うからには何か実績でもあるのか？」

「私の『魔王様ファンクラブ』の会員ナンバーは00001で、ファンレターは週三回は出しているぞ！」

「お前はただのファンじゃねえか！」

執事襲来編四 地味な仕事が大事なんです（前書き）

お正月なのでワイドでお送りします。

執事襲来編四 地味な仕事が大事なんです

片手を耳に付け通信をかける。

「あー、こちらギード。聞こえるか？ 不審人物が……」

「だから止めるって言うてるだろうが！」

『通信妨害途絶術式解術』
シャミング

バチツという音を立て通信が途絶した。これは軍用の妨害用魔術式……

「お前、軍属か！」

静かに佇みながらゆっくりとした動作で姿勢を整える。スツと伸ばされた右腕は俺に向けられ、それまでユーモラスだった執事の雰囲気シャープなそれに変わる。

補助型魔術を使ったということは後衛の兵士だったのか？

「お前…… どの所属だったんだ？」

「わたくしの二つ名は魔術師、ウィザードのアレア。ある程度は通った二つ名のつもりなんだがな」

ウィザード？ 魔術を使うことが当たり前の魔族軍においてなお魔術師なんて二つ名がつくとは、コイツ実は相当の後衛魔術士か！？

「わたくしの元の所属は補給の要、兵站科だ！」

「デスクワークじゃねえか！ 戦闘役じゃないのかよ！」

兵站科、基本的には戦場へ効率よく物資を補給するのが任務の部隊だ。物資の確保、優先先への配達や使用スケジュールの計算など色々苦労はあるらしいが、前線にいる身にとっては書類にハンコ押せと一々うるさい配達屋にしか見えない。

「補給をバカにするな。補給がなくては戦争なんてあっという間に負けるぞ」

「いや、補給の大切さは知ってるけどな……」

「どのような最前線でも引き受ければ、どんな依頼品も魔法のようになつてと手練手管で確実に確保し手配する。それがわたくしのウイ

ザードの由来だ！」

「そつちの魔法使いって意味かよ！」

アテレアの目がキツと俺を見る。その目から見える感情は俺も戦場でよく知っている感情。つまり敵意と威嚇。

「下僕一号よ。ならばお前の名前と一番最近までいた戦場を言ってみろ」

「……ん？　俺はギード・ウォーカー。最近までいた戦場はベイロン平原だ」

「今の名前と戦場で魔術検索をかければ、お前が兵調科の通販で何を買ったか完璧に検索出来るぞ？」

「なっ！？」

ちよつと待て。兵站科の通販はよく利用した。特に雑誌、はつきりいうとエロ本の類を。おい、まさかコイツ！？

「お前も若い男性だからなあ、色々買ってるんじゃないか？　ええ、下僕一号ことギード君？　何だったらリストにして音読してやつても良いんだぞ？」

卑怯だ！　卑怯過ぎる！　蛇の如き視線でねめ上げるアテレア、くそ、この女に情けはないのか！？

「ま、待て、ここは落ち着いて……」

「さあ、お前は大人しくわたくしの言葉を聞いて……　あれ？、ちよつとまで」

片耳に手を当てるアテレア。誰かからの魔術通信が入ったようだ。なにやらせわしなく話始める執事。

「ちよつと、なに？　あたしこれから魔王様に会うんだけど！

え？　鎧と剣の配達先のメモ無くした？　だからそういう時は通信で確認して、だから仕事の引き継ぎで二週間もかかるのよ。あー、もうほら泣かないで！」

なにやら後ろを向いてゴチャゴチャと話し出す執事。どうやら前職の仕事の引き継ぎが揉めているらしい。

それから十数分後。

「じゃあね、落ち着いてやれば大丈夫だから。……さあ、奴隷一号よ！ その扉をわたくしのために開け放つがいい！」
「お前絶対そのキャラ作ってんだろ……」

執事襲来編伍 お仕事は一生懸命やりましょう

「だから部屋に入れろと言っているだろうが！」

「お前みたいな不審者入れられるか！」

とうとう強硬突破に乗り出す執事を抑えつけ、抵抗を封ずる。が、その時。

「ギードよ、朝から騒がしいが、一体何事なのだ？」

扉を開き、ロープ姿の魔王様はその姿を表した。

「魔王様！ 変質者が出たので危険ですから部屋に戻って下さい！」

「誰が変質者だ！」

「お前だお前！」

「ふむ、お前は二週間前に現れたアテレアだな。ギードよ、この者は不審者ではなく執事だぞ」

「えっ、ホントに執事なんですか？」

拘束を逃れたアテレアが立ち上がる。

「サイン下さい！ 魔王様！ おはようございます！」

「いやお前順番おかしいだろ」

「それにサインは確か二週間前にも書いたと思うが」

困惑気味に魔王様が呟く。執事、お前何枚サインもらっ気だ？

「こ、ここ今回は、ししつしつしつ執事に取り立てて」

「アテレアよ少し落ち着いて話すがいい」

「お前いくらなんでもかみすぎだろ……」

ガチガチじゃねえかコイツ。

「し、執事に取り立てて頂いて一生の幸せにこの身が恩義に震えております！ さあなんなりと御命令を下さいます、魔王様！」

お、今度はまともに言えた。

「そうか、ならばアテレアよ。汝に最初の命を下そう……」

「はっ！ なんなりと！」

跪く執事の顔に明るい笑みが見える。あー、相当嬉しいんだなあ

りゃ。

「一階にそろそろ新聞が届くから持ってきなさい。」

ピシッと執事の背中が固まる。お、なんだ、イヤなのか？

雑

用はイヤなのか？

スツと立ち上がると姿勢を整え一礼するアテレア。

「かしこまりました。魔王様」

そして俺のほうへ向き直る。

「というわけで、行ってこい下僕一号！」

「お前が行ってこいや！」

聖剣伝番外編 狂骨が歌うは兵の夢痕「キョウコツガウタウハツワモノノユメア

極一部で人気のあるムラマサメインの過去番外編です。

ギャグが殆どないので「コメディなんだから笑わせる話だせよ上屋ア!」と思った方は読まないで上げて下さい。やや重めな話ですから。

レンガ造りの壁と床、そこらのテーブルでは暇を持て余した何人かの兵隊が、菓子でもつまみながら茶をすすっている。時刻は午後二時、昼食も終わり混雑激しかった戦乱時代の食堂にもようやく安寧と平和が訪れる。

「ギードさん、このベリーパイすごくおいしい！」

俺の傍らではアイアが満面の笑みでパイを味わっている。

「ああ、魔王城で作っている菓子は上等だな」

実際、砂糖やバターをケチらず作っている魔王城産の菓子はまさしく素晴らしい出来だ。俺は元は辛党だったのだが、戦場にいた二年間ですっかり甘党になった。戦場をある程度経験していると誰でも甘党になるそう。向こうじゃ甘味は貴重だからな。

流石にレーションのフルーツケーキ（保存のためガチガチに乾燥してある）を巡り殴り合いをしている兵士を見た時はどうかと思っただが。

「ふむ、やはり味覚という感覚は貴重だ。アイアの表情を見れば見るほど痛感させられる」

対面でチビチビと酒を飲む戦装束の白骨、ムラマサがしみじみと呟く。

そういえばムラマサの性別は女性、しかも生前はかなりの美人。甘い物が好きだったりしたのだろうか。

「あの、ムラマサさんこれ良かったら……」

なんだか申し訳無さそうにケーキの皿をムラマサに差し出すアイア。

「アイア、ムラマサは味覚がもうないんだよ」「何、気にするな。味覚があるのが懐かしく思えただけだ。それに拙者は甘い物は苦手だな」

なんとも気まずい一瞬の沈黙。くそ、こんな時に限ってグラスは

どっか行ってやがる。

「あのムラマサさん……」

突然話かけるアイア。お？　なんか和ます話題でもあるのか？

「ムラマサさんって生きていた頃どんなだったんですか？」

俺は思わず飲みかけた紅茶を吐き出しかけた。いや確かに気になるけどっ！

「ギードさんやグラスさんがムラマサさんは生きている時はスゴい美人だっっていったからなんだか気になって……」

「さあ、己の顔など大して気にした事もないからな……　それにあれは過去の姿。今はこの骨身をさらした姿が拙者の全てだ」

小さな音を立て杯をテーブルに置く。

「拙者が生きていた頃、あれはもう五、六十年は昔になるか」

そう呟くとムラマサは過去を語り出した。

拙者が生まれたのはヒノモト、ムサシノクニの武将の家だった。

当時は群雄割拠、戦乱の時代。領地こそは狭いが拙者の家は武芸で土地を守り続けていた。

拙者は一番末の生まれでな、兄は六人いた。普通の家は末の娘は丁寧に育てられるらしいが、拙者はどうもそれが性に合わなくてな、兄達の武芸の練習に混じって腕を磨くのが嫁修行より好きだった。

やがて十三の頃、家の者と混じり拙者も合戦に出るようになった。幾つかの生死をくぐり抜けて魔術剣技を研ぎ澄ます内に、才能というやつなのか、気がつけば拙者は武勇に優れる兄達よりも強くなっていたよ。

まあ顔は良かったほうみたいだからな、求婚の類はそこそこきたのだ。ただ当時の拙者はいささか癖が悪くてな。

いかにも箱入りの姫らしくシナをつくり「妾より強きサムライの方でなければ嫌でございます」とちよっと弱々しい口調で言っ

る。するとホイホイ腕自慢をしにやってくる者達を、本性あらわして木刀で滅多打ちにしてやるのが趣味だった。いやあ、あれは結構ハマったな。……なんだか話がずれた。

しかし近くの土地まで当時勢力を拡大していた武将がいてな。少ない手勢を率いて兄達はその武将と戦い全員散っていった。武士らしく勇ましい最後だった。

拙者はならば自分が家督を継ぎ、家を守ろうとしたがそれは周りに止められた。女の身で家長を継ぐことまかりならんな。

変わりに言い渡されたのは別の勢力だった武将、タチバナの当主に嫁ぎ同盟を組めというものだ。正直腹立たしかったが、無理をすれば家は分裂し、消える。兄達が命掛けで守った家を守りたかった。だからそれに従った。

ただ、無能ならば斬り捨ててタチバナの実権を取ってやるうとは考えてはいた。

そしてそれがアイツとの出会いだった。

嫁入りの日は忘れもしない。桜が乱れ咲く四月の終わり、顔合わせもせずに婚礼が行われた。タチバナの当主は稀代の軍略家であり、武勇にも優れるサムライであると前評判で聞いていた。

ならばどのような大男か、豪の者かと身構えて会ってみれば、考えていたのとはとんと違っていたわ。

背は高いが、骨格は華奢、顎も細く、手足も筋肉が無い。明らかに戦場「いくさば」に立つ風体ではないのだ。おまけに前髪の頃も過ぎたというのにマゲも結わずもじゃもじゃとした髪をしていた。顔つきもどちらかという女子「おなご」のようだな。そのくせなんだか捉えどころの無い性格のヤツだったよ。

婚礼用の白無垢に角隠しの拙者の顔を覗きこみ、

「儂がタチバナ当主、タチバナソウカクじゃ。お主がシロツキの所のスズガネか？ 戦場で千を斬った鬼姫の鈴鐘と聞いていたが、まるで菩薩か女神のような顔だのう」

などと抜かすから思わず。

「ならばお主の知る菩薩や女神はこういうことをするのか」

そう言い放ったあと拙者は隠し持っていた鉄扇でそいつをぶん殴った。それが拙者とアイツの交わした初めての会話だったよ。

……え？ なぜ殴ったか？ いやあ、あの時何故か腹が立ってな。まだ若かったから照れていたのかもしれない。

ともかくアイツは顔にアオタンをこさえたまま婚禮の儀を行うことになったのだ。今思えばアイツもなかなか骨があったな

アイツ、ソウカクが二十で拙者が十七の頃だった。

その後拙者は嫁として家の事をする…と想っていたのだが違った。拙者が良しとするならば戦場に立って良しとアイツが言いおってな。正直家の事などやりたくなかった拙者はアイツが指図するままに戦場で戦働きをしたよ。

アイツの前評判は全部大はずれだ。ソウカクは武功はからつきしだった。そして軍略に優れる。これも大嘘、アイツは…… 優れる所か天才、鬼才の類だったよ。ソウカクの立てた軍略に従い、周りの武将と手を組み足を組み、適度な所で裏切りをかまし、ある時は水責め、ある時は兵糧責めで城を開城させ、といった具合で戦を駆け抜けた。アイツは女という身で拙者を侮らず、誰よりも正しく拙者の価値を評価し、活用してくれたのだよ。

別に道具として見られていても構わなかった。アイツが一番拙者を拙者らしく生きられる場所をくれる。それで十分だった。そして気がつけば拙者は…… アイツを愛し初めていたのだ。

だが戦場においていつまでも無事ではすまん。ある城を責め、宝物庫で一振りの刀、奥州震電左右衛門之条刃沙羅村正《オウシュウシンデンザエモンノジヨウバサラムラサ》という銘の太刀を手に入れた。意気揚々と城を出た所で狙撃術式で撃たれたのだ。

三日間眠り続けてな、気がついたときにはアイツがそばに居た。お前を戦場に立たすべきではなかったと泣きながら言われたよ。医

者から聞かされた話では命に別状はないが子供は望めぬ体になった
そうだ。

拙者はその話を聞いてもそれほどこたえなかった。むしろなんだ
か清々してな。これでやっと混じりけも曇りもない、ただ一振りの
アイツの刀になれたような気がしたのだ。

アイツには後添えなり側室なりもらつてとつと跡継ぎを造れと
いっておいた。結局アイツは一人の側室もつくらなかつたがな。

拙者は戦場に戻つて刀を奮い殺し続けた。ひよつとしたらあの
時の拙者は単純に死にたかつたのかもしれん。

ある日な、家臣の童子共の遊び相手をしてやっている最中に何故
か涙が止まらなくなつた。拙者は、私はその時に初めて自分が何を
失つたか気づいたのだ。バカらしいほど遅すぎる話だろうか？

そしてそんなどうしようもない日々もいずれば終わる。ソウカク
が肺病を患い、気づいた時にはもう末期だった。跡継ぎは無く、ソ
ウカクの弟シヨウゲンはタチバナの殆どの手勢を率いてソウカクと
拙者のいる城を攻め立てた。

拙者も抵抗はしたが多勢に押し込められ、手傷を負い火を放たれ
た城の中にソウカクと残つた。拙者はソウカクに「共に死のう」と
いつてもらいたかつた。

「お前は、生きる」

しかしアイツはそう言った。

「何故だ！ 何故共に死ねと言つてくれぬ！ お前が共に死ねと言
つてくれるなら、拙者は、私はすぐに全てを終わらせられるのに…

…」

ソウカクは痩せた体で私を抱きしめ囁いた。

「死ぬつてことはな、何にも無くなるつてことなんじゃよ。そんな
所にお前を連れていけるか。それにな、愛してる女に死ねなんて、
口が裂けてもいえねえや」

手の中でゆっくりと命の火が消えてゆく感覚、ソウカクが消え
る。消えてしまう。

「イヤだ！ お前が、ソウカクがいないまま生きるなんてイヤなんだよ！」

失われ消える者の前に私はそう叫ぶしかなかった。

「お前は…… 優しい女さ、鬼姫とかそんなじゃない。俺や、色んなヤツや、この国の時代がお前の生き方を歪めちまったんだ。だから、お前はお前を生きるんだ。」

強く、愛しく私を抱きしめソウカクはゆっくりと太刀を抜く。

「お前の持ってきたこの太刀は刃沙羅村正、呪いの戦国刀だ。無限の死血山河を求め、自らに相応しい使い手を不死化するという。儂は腕はからきしだが、お前なら選ばれるはずだ」

ソウカクは刀を私の背後に回す。そと私の唇を吸いながらあの日のように優しげに囁く。

「やっぱりお前はキレイだな。菩薩か女神様みたいだ」

「……ソウカク」

村正の刃が私とアイツの胸を貫いた。

次に気がついた時、拙者がいたのは抜けるような蒼穹の下、焼け落ちた木材が辺りに散らばり、村正の刃が胸を突き抜けていた。両の腕の中には焦げた夢の残骸が朽ち果て、そして拙者は凶骨と成っていた。

婚礼の儀から八年後、ソウカクが二十八、拙者が二十五の時の話だ。

話を終え、ムラマサはまた杯に酒を注ぎ飲み始めた。

「ひつく……えつく……」

傍らのアイアは泣きじゃくり言葉も出ない。

正直俺もかけるべき言葉が見つからない。予想以上に壮絶な生き様だ。

果たして残す者も託す物もなく、共に死のうと愛する者が囁くともそれでもなお、生きると俺は言えるだろうか？

そういう状況にならねばはつきりとした答えは出ないだろう。それでも俺には生きるという自信が無い。

「結局、拙者はアイツに自分を生きると言われたが、刀を取り戦う以外の生き方を知ることでも得ることもできなんだ。そうしてここに流れ着いたということだ」

「ムラマサ、本名はスズガネって言うんだな」

「ひつく… えぐ、き、きれいな名前なんですな……」

アイア、無理にしゃべんなよ…

「それは生きていた頃の名前だ。今は妖刀によって立つ魂にすぎん。故に拙者はムラマサだ」

さっぱりと言い放つムラマサ。男の俺が自らを女々しく感じるほどの潔さ、これがサムライか。

「おい、そろそろ時間だぞ。お前ら？」

遠くからグラスの音が響く。俺たちは急いでテーブルから立ち上がる。

「……なあ、ムラマサ」

「なんだ？ ギード」

「お前の魂がその刀に入っているなら、もしその刀が折れたら……」

「ああ、その時は本当に終われるな」

「いいのか、それで？」

「構わん。それが拙者の終わりなら受け入れるだけだ」

凶骨のサムライは今日も胸を張り堂々とそこに在る。いつか終わるその時まで。

執事襲来編 暄嘩はほどほどに

俺は心底あきれ果てる。いや、こうなる事は冷静に考えれば、至って簡単に予測はつくだろうけれど。

「あのな、なんで俺がお前の命じられた雑用をやらなきゃならんだ！」

姿勢良く直立する執事、アテレアが愚鈍な猿を見る視線で俺を刺す。

「ならばわかりやすく、なぜお前が取りに行くのか説明してやろう。

一つ、わたくしは魔王様の側を離れたくない。

二つ、ここは五階だから一階まで行くのが面倒くさい。

三つ、お前が下僕だから。

以上だ！」

以上だ、じゃねえだろアホ執事。

「俺は護衛なんだよ！ 四六時中くっついてるのが仕事なの、新聞取りに行けるかボケ！ あれか？ 執事修行ていうのは、脳味噌の比重をでんぶんより軽くする練習でも入ってたのか？」

「いや、我は別にどちらが行っても……」

「はっ、護衛？ そんな者は不要だ。魔王様の近くに仕えるのは、わたくしひとりでに十分！ むしろ城にはわたくしと魔王様の二人っきりのラブライフで良いくらいだ！」

「勝手に都合の良い妄想垂れ流してんじゃねえよ、ダメガネ！ 第一お前一人じゃ護衛出来ないだろ」

「心配は無用、執事の嗜みとして多少の戦闘訓練は積んでいる。もし魔王様に危険が迫った場合、自分の身は自分で守れる程度の戦闘力はある！」

「いや、その場合はまず魔王様を守れよ！ 自分の安全だけ図るな

よ！」

「おーい、お前達……」

「だから早く取ってこい下僕！」

「お前が行くんだよ、アホ執事！」

「……おーいアイア、いるか？」

「だからお前は、……ん？」

気まずい雰囲気にと気づき、視線を魔王様に向ける。魔王様は椅子に優雅に腰掛け、新聞をめくっていた。新聞の日付は今日のものだ。

「……あの、魔王様、その新聞は？」

新聞から視線を外さずに静かに魔王様は答えた。

「誰も持って来てくれないから、アイアに頼んだのだ」

……ひよっとしたら怒ってらっしゃる？

「……すまんが独りになりたいので、二人とも部屋を出てくれないか」

ああ、やっぱり怒ってるよ…… アテレアが必死な形相で魔王様の近くに跪く。

「ま、魔王様、どうかお機嫌を御鎮め下さい。そ、そうだ！ 魔王様を讃える歌を昨日考えてきたので、今から歌いましょうか？」

マ〜マ〜魔王のマ〜はマーマレードのマ〜」

何歌い出しているんだよお前は。それ絶対讃える内容じゃないだろ。

仕方なく俺はアテレアの後ろを引っ張り、ドアを目指す。

「こら、最後まで歌わせる！」

「お前はもう黙れ！」

目指すドアの先が少し開いていることに気づく。隙間からは見慣

れたメイド、アイアが心配そうな表情でこちらを手招きしている。

「……なんかやな予感するなあ。」

「失礼しました」 アテリアを引きずって部屋を出ると、アイアが腰に手を当てて、俺をじつと見つめる。……あれ？ アイアも怒ってる？

「ギードさん、さつき魔王様に頼まれて新聞取って来たんだけど……」

「あ、ああ、ご苦労様」

「新聞渡した時に魔王様が『我って結構、存在感薄いのかな？ 部下が我を無視して喧嘩するんだけど、どうしよう』ってこぼしてましたよ……」

慌てて横にいたアテリアがアイアに自己弁護を始めた。

「アイアさんといったか？ それは私のせいではなくて、横のギードのせいで……」

冷めた視線を返すアイア。

「あの、アテリアさん。私、こういう喧嘩は片一方じゃなくてどちらも悪いと思うんです」

「……はい」

沈黙する執事。やーいザマーミロ。って俺も同罪かよ！

「アイア、別に俺は悪くは……」

「魔王様は優しい方なんですから、余計な心配をさせたらダメですよ」

「……はい」

俺と執事の返事は同時だった。

去ってゆくアイアを見送りながら俺と執事はカカシのように部屋の前に立ち尽くした。……そうだとりあえずコイツには一つ確認しとかねば。最初に謁見している時にコイツはアレをどう思ったのか。「おい、執事。お前は……魔王様の尻についているモノが何に見える？」

その言葉を聞いて、アテレアの顔に俺に対する蔑みの表情が浮かぶ。嘲笑とともに俺の質問に答えた。

「何をいうかと思えば、魔王様の美しい尻に余分なものなどついてはいない！」

「そ、そうか」

返答はともかく、ひよつとしてコイツには剣が見えていないのか？

「ただ、風聞によると『バカにしか見えない剣が刺さっている』という噂があるらしいがな！ もちろん、わたくしはそんなもの見えないぞ！」

あっ、バカ発見。

黒騎士強襲死闘編巻 雑談はほどほどに（前書き）

またバトルしたい病の発作が出てきました。

「で、俺の処遇ってどうなってるのよ？」

「知るか、あれだろ、しばらく飼いきれんじやないか」

「タコの飼いきれんですか。ははっ、じゃあここはタコツボですね」

「だったら看守部屋は犬小屋だな？ ……おっなんだ、やる気か？
いいぜ、表行こうか」

おそらくは六度目であろう、タコ対狼大戦を制止しながら、俺は溜め息をついた。

現在時刻は夜八時過ぎ、俺はまた丁寧に心理的圧迫を計算された尋問室にいた。

先に言っておくと、別に今回は尋問で訪れた訳ではない。

ベイルの供述によって、役者に偽副皇帝を指示した人物の情報は入ったものの、問題はそこからの調査が全く進まないのである。

なんせベイルが帝国側の指示者と会ったのは帝国内、魔族国側ではその他の証言も証拠も取りようがない。おまけに書簡の類も無し。物の見事な行き詰まりである。

現在は帝国側からの音沙汰はなく、こちら側の目立った被害は一人兵士が死にかけたくらい（つまり俺だよ）で、むしろ被害は襲った側の方が大きいだろう。

だからといって、このままなあなあで済ます気は、魔王様はともかく、隊長や幹部連中は毛頭無いだろう。無論俺もだ。一発殴り返したくなるのが人情ってもんだろ。

とりあえず一応はベイルは供述をしたということで、団員二人は貿易先の共和国に送られるそうである。魔王様のアレもドタバタの際に見ていなかったのが幸いしたのだろう。

問題はベイルの今後だ。アレを見られている以上は国外に出すわけにはいかないし、さすがに殺すわけにもいかない。

仕方なく現在は魔王城で絶賛飼育中である。そついや魔王様がベイルと話したいことがあるとかないとか……

日勤の護衛が終わった後、たまにはタコ面でも拝みに行こうかと、一つ様子を見にベイルの部屋に来てみたのだ。

「なあ、なんで他の部屋じゃなくて、また尋問室なんだよ？」

拘束具を外された手をふりながらベイルが笑う。

「そんないやそつな顔すんなよ若造、慣れるとそれ程こも悪くないぞ？」

「ギードさん、このタコまだ証人扱いですから、離れを出ちゃいけないですよ。で、離れて三人で話せる部屋は尋問室しか無いっていうことで」

「…チッ」

しれっとタコ呼ばわりする看守くん、舌打ちかますベイル。相変わらず仲は悪いようだ。

ベイルも飼育殺しの身だと退屈なようで、こうして雑談の相手に捕まってしまった。看守くんも現在離れにいる見張る対象が、ベイルしかいないのと夜勤の退屈のため、雑談に参加しているという訳だ。

……のんびりし過ぎたるこの城。

「そついや、いつも外とかうるついでるデカイ兵隊共が今日に限って居ないな。狩りでもしてんのか？」

「ああ、兵隊ずつと常駐させてもしょうがないから、近くの建物の打ち壊しや補修、道路整備や土木工事やらせてるんだってよ」

兵隊を一カ所に置きっぱなしにするのは正直無駄である。食費や維持費をやたら食うのだ。体力のある労働力なのだから力仕事は向いている、というわけで休戦後は専門の役職以外はローテーションを組み、城に一定の戦力を残す。

当番の人員は外で戦争被害地の復興や道路整備、土木工事をして
いるわけである。

俺は魔王様付きの護衛なのでその辺は免除されているわけだ。

「あ、そうだベイル、近い内に魔王様がお前に直接面談するとか言
つてたぞ。腹決めとけよ」

ビクリとベイルの肩が震え、光沢ある額に冷や汗が走る。

「なにそれ？　ほんとかよ？　うわー、話したくねえ！　俺絶対尻
のアレずつと見ちゃうよ！」

心配する所はそこか？　話す内容を心配しろよこのオヤジ。

「ギードさん、実は僕は魔王様のアレは見ただけでもヤバいって噂
聞いたんですけど、ホント何ですかね？」

あ、看守さんに嘘だつて言うのまた忘れてた。しかもまたへんな
派閥出来てるし。……なんか面白いからこのままほつところかな。

「あー、看守くん。さすがに見ただけでヤバいっていうのは無いん
じゃないか、多分」

ふと時刻を確認すると既に午後八時半、二時間半も雑談していた。
いいかげん帰らねば。

「おい、俺そろそろ帰るからな」

俺の帰宅宣言を聞いてベイルが残念そうに声を上げる。

「別にもうちよつと居てもいいだろうが。お前彼女とかが待ってる
わけじゃないんだろ？」

「余計なお世話だ、死ぬタコハゲ！　じゃあな」

ドアを閉め尋問室を後にする。しかしドアの向こう側、尋問室か
ら二人の微かな会話が聞こえた。

「……ギードさん、彼女居ないのは否定しなかったな」
「看守、それ以上いうな。悲しくなるだろ」

……アイツら仲いいじゃねえか。

黒騎士強襲死闘編式 ころいう時こそ落ち着いて

ったく、あのタコ余計なことしか言わねえな。

離れを出て本邸に入った辺りで俺はある事に気づいた。

あつ財布忘れた……

私物置き場に置きっぱなしだったのに気づき、仕方なく私物置き場のある三階へ足を向ける。

ロッカーの鍵を回し、財布を懐にしまいながら、ベイルがこれからどうなるかを少し考えてみる。

ずっとこのままはさすがに無いだろうし、国外は無理としても国内で普通に暮らすぐらいなら隊長の胸三寸で出来るんじゃないだろうか？

魔族国内でも、貿易国から移り住んだ人族の商人も少数ながら居るし、監視はつくかもしれないが、ベイルだって暮らせるはずだ。そもそも帝国に未練は無いようだし。

役者じゃなくて他の仕事なら食ってくぐらいは……

ド オ ン ツ

ツな！ なんだ!？

突如、空間を震わせ、魔王城を伝わる振動。明らかかな爆発による物だ。

方向は、おそらく正門側。なんだ？ 誰か喧嘩でもして……

ド ド オ ン ツ

……連発している。まさか…… 城が攻撃を受けているのか!？ ならば一体誰から受けているというのか、状況を掴むため、隊長

に魔術無線をかける。

『こちらギード、隊長、先程の爆発音について確認を…』

『…ザツ……ザザツ…ギード、聞こえるか？』

『隊長、状況の確認を…』

『ギード、よく聞け、現在正門から重装騎士、数は二十から三十騎の襲撃をうけ…ザザツ…』

妙だ。ノイズが激しすぎる。

『隊長？』

『…ザツ…今…までとは…ザザツ…違うタイプ…気をつ…け』

バチリと音を立て通信が途絶、繋がらなくなる。

これは通信妨害途絶術式！？

こんな物を使って連携を阻んでくるとは、これは、この状況はまさしく、

戦争だつてののか、まだ何も終わっちゃいない、何も止まれないつていうのか？

思考を切り替え、戦闘用に組み立て直す。

現在の自分の装備を確認、

防具、鎧は前の戦闘から新調した物、

武器、剣もミスリル製のを新しく購入した。ナイフもある。槍

は今が無いが、室内戦闘が主ならむしろ邪魔になるな。

次は移動場所、通常なら敵のいる正門か、魔王様の近くに行くべきだが…

あれ？

おかしい、何か引っかかる。此処を攻めるなら標的は間違いない。魔王様のはずだ。しかし、

明らかに戦力、火力が足りない。

砲撃を試みる位なのだから、魔王様の防御力は高いと考えている

はず、それを何か仕掛けがあるとしても、二、三十騎の兵士で仕留められると？

もし砲撃の備えがあるなら最初に打ち込むはずだ。だったら、攻めてきたヤツは何を狙ってるんだ？

魔王様じゃなくて…… まさか、

窓へ駆け寄り、離れの方角を確認する。

『ナイトビジョン暗視光学術式解術』

眼前に二十センチほどの魔術円が展開、魔術円越しに見る暗闇が透過される。

現在離れの外には見張りの兵士がいない、正門の迎撃に向かったのだ。

そして、離れからやや離れた位置にある城壁、その上に立つ、月に照らされた三つの人影。シルエットから察するに重装騎士だ。

確認した次の瞬間、巨大な跳躍と共に城内へ消える。

目標は魔王様じゃなくて、ベイルか！

「やらせるかよ！」

窓枠へ手をかけ、足を乗せる。そのまま、夜の風を受けながら一階を目掛け落下する。

あ。あつ、つい見栄切ってやっちゃったけど、三階って結構高いなあ。

黒騎士強襲死闘編参 転がり込んだその先に

『ニトロジャンプ
爆裂推進補助術式解術』

空中で移動補助術式を足の裏から解術、魔術円から発生する移動補正用の衝撃波が着地の衝撃と相殺される。

ふわりと中庭の石畳の床に立つ。今のでかなり大きい音が出たが、向こうの騎士達はこちらに気づいただろうか？

少しでも注意を引いてベイルのもとへ行かせないようにしなければ。

正門と離れは逆方向、中庭から建物内部を抜け、離れまでの長い廊下を通らねばならない。

離れの周囲には脱走防止の柵と魔術トラップがある。騎士が離れまでいくなら、トラップを避け廊下を通るはず。

思考を整え、一気に駆け出す。

ならば、俺は廊下から奴らを追撃することになる公算が高い。トラップを避けずに行けばかなり時間を取られるはずだからな。

奴らの目的が救助か暗殺かはわからない。だがベイルを救助する理由は無く、救助なら騒ぎを大きくし過ぎだ。

…… やっぱり殺る算段か、クソツタレ！

中庭を抜け、向こう側の建物に入る。通路はこの建物から入る構造だ。

レンガ作りの廊下を走り抜け、通路の入り口が見えて……

やっぱりおいでなすったか！

建物内、通路入り口には一人の重装騎士が陣取っていた。

薄暗い建物内でエメラルドグリーン、翠玉に輝く頭まで覆う全身甲冑、二メートル程の身長、体格に対し短い胴体と反比例して長い手足。そして最も奇異な特長、大きく肥大した太もも部と背中に背負っている何か。

こちらを確認すると同時に、その長い右手を伸ばす。多重展開する魔術円、そこから俺は術式の構成を読み取る。

中距離射撃術式かッ！

術式の発動より早く、通路横のドアを蹴破り体を転がり込ませる。同時に装甲化術式を発動、ライトメールをフルメールに変形させた。

ヒートウェイブ

『焦熱衝撃波術式解術』

メタルブリットショット

『鉄核弾射撃術式解術』

ドアの前を熱衝撃波と、鉄の中型弾丸が派手な唸りを上げ同時に通り過ぎていく。

面と点の同時攻めか、えげつねえな。

まだ空気に残る熱気を感じながら、俺は戦慄に身を凍らせた。

魔術を同時展開するとは、アイツ『上位騎士』ってヤツか？

普通、人族は魔族と比べ体内に持つ魔術の素となる魔力量が著しく低い。それゆえに兵士の量で負けることはあっても質では魔族が上を保っている。

しかし、人族でも稀に、魔族以上に魔力を持つ者が生まれるという。そしてそういう者が兵士になった場合は『上位騎士』として取り立てられるそうだ。

とにかく効果の高い中距離射撃術式が二種同時に使えるということとはそれなりの実力者だろう。

「……来るか？」

部屋の中で身構えるが、追撃してくる様子がない。

徹頭徹尾、時間稼ぎに徹する気か！

たしかに中距離射撃術式を得意とするなら、入り口に陣取って魔術撃つ方が効率がいい。

多少リスクを取っても突撃するか？

出来ればあと一人、援護役のフォローが欲しい。しかし通信が混乱しては援軍は……

「おい、ギード何をしているんだ？」

「うわっ！」

いきなり後ろから声が響き、思わず叫んでしまった。

振り向いた先には、テーブルの下に体育座りで潜む人影。夜の空から刺す月明かりがその姿を照らす。

中性的な美人の範囲に入る顔立ち、均整が取れた砂時計を連想させるスタイル。そして魔王城ではただ一人しか着用しない燕尾服。

「……なんでお前がここにいるんだよ、アテレア？」

アテレアはゆっくりとテーブルの下から立ち上がり、こちらに見つめる。

「食堂に夜食を食べに来た帰りに緑の騎士に出くわしてな。慌ててこの部屋のテーブルの下に避難したのだ」

「ああ、そうかい……」

「のだ。じゃねーだろ、のだ。じゃ。」

「アテレア、じゃあもう少し隠れてる。俺はこの先の離れまで行かなきゃならんから。悪いがお前守ってる余裕ないんだよ」

アテレアは怪訝な表情を見せる。

「離れ？ 何の用事があるんだ？」

「奴らの目的がそこにいる証人の可能性があるからだよ。……さて、どうあの緑野郎を突破するか。せめて頭数がもう一人いればいいんだが、別の兵士と連絡も取れんし……」

「頭数、か」

普段の落ち着いた態度から想像出来ない、いたずら好きな子供のようアテレアが微笑む。なんだ？ コイツなに考えてやがる。

「奇遇だな、ギード。わたくしもちようどそう考えていた所だ」

「？ 考えてたって、お前何を……」

「私が援護役をしてやるから、お前が突入しろ」

こともなげに言い放つ執事。

「……お前、戦闘出来んのか？」

アテレアは優雅な動きでその豊満な胸元に手を伸ばす。シャツのボタンを外し、白手袋の細い指を谷間に差し入れる。

「案ずるな。用意はある」

勢いよく引き抜かれた手には薄暗闇に輝く金属光。即ち、

銀食器のフォークとナイフが二セット。

「用意ってそれか！ ていうか今どっから出した！ 少しは恥じらえよお前は！」

やっぱりコイツは非常時でも変わらん。

アテレアは「お前は何もわかっていない」とでも言いたげに首を振る。

「この食器はただの食器ではないのだよ。私が隙を見て集めた逸品、魔王様使用済みフォークとナイフだ！」

……この件が片付いたら、コイツ警察に突き出そう。

黒騎士強襲死闘編四 意外と息が合ったりします(前書き)

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編四 意外と息が合ったりします

「で、なんか算段があんのか？」

俺の質問に不適に笑みを返す執事。

「……確かこの辺りは、この十年来で新たに増築された建物な筈だ」
「あ、ああ、確かに俺もそう聞いたことがある」

魔王城建設は、魔族国の建国後、今から六百八十年前に行われた。その後、様々な規模拡張と増改築を経て、現在に至る。

「ということは最新の建築技術が使われてだろう。」

ならば問題は無い。やるぞ、ギード」……なんか信用できねえなあ。

蹴破られたドア横の壁に二人で張り付き、緑騎士の様子をうかがう。

「動きは無いな。……仕掛けるか。アテレア、まず俺が突っ込むからお前は後ろから援護だ」

「わかつている。ギード、他の部屋には避難したメイド達がいるかもしれない、不用意に飛び込むなよ？」

「わかつてるよ！……それからな、アテレア」

「？ なんだ？」

「俺がヤバくなったら、とつとと逃げろよ」

一瞬キョトンとした顔を浮かべ、俺をマジマジと見る。……なんだ？ なんか文句あんのか？

「……ふ、不要な心配だ！ お、お前は自分の心配を……」
アテレアの顔がビミョーに赤くなる。

「あの子、ただの社交辞令だから」

3、2、1、ゼロ！

タイミングを合わせ、廊下に飛び出す。反応した緑騎士がこちらに右手を伸ばし、魔術円を展開した。

奴との距離は約十二メートル、一瞬で詰められる距離ではない。
近接防御盾防ごうと身構える。だが、

『メタリカ・マニユーバ
金属磁界操作術式解術』

背後で魔術の発動する気配に、俺は身を強ばらせた。

次の瞬間、緑騎士の左右の壁と天井に大きくひびが走る。そして壁を突き破り、棒状の鉄塊が飛び出し、緑騎士の眼前をふさぐ。

いやあれは鉄塊ではなく、

建築用の鉄骨だと!?

工の字型の断面、端が見えぬほどの長さ、壁から飛び出てきたという事実。正しくあれは鉄骨だ。

磁力操作で建物内部の鉄骨を呼び寄せたのか。やたら新築にこだわってたのはそのためかよ!

「このおっ!」

ゴゴオン

緑騎士の発動した二種の中距離魔術、熱衝撃波と弾丸が鉄骨にぶち当たる。拡散される熱風と跳ね返される弾丸。

散ってゆく熱が兜の面越しに俺の頬を焦がす。剣を片手に駆け出し、緑騎士との距離をさらに詰めた。

「だつたらッ!」

緑騎士が少年のような声を上げる。鉄骨の隙間から左手を出し、魔術を撃とうと構えた。

間に合うかッ！

ならば飛び込もうと体勢を取る。しかし、

『メタル・リキッド
金属液状化術式解術』

後ろからアテレアが投げた二本の飛具、というかナイフとフォークが左手に突き立つ。次の瞬間、ドロリと液状化し瞬時に硬化する。緑騎士の左手が固められた。

アテレアの奴、磁力だけじゃなく金属操作も出来るのか！

後ろを振り向くと、アテレアがフォークとナイフを構えながら何やらポーズを決めている。

「貴重なコレクションを無駄にしたんだ、早くやつつける！」

……うるせえよ。

俺は緑騎士に向き直り、跳躍。鉄骨のバリケードを飛び越えた。

「おりゃあああッ！」

気合いと共に緑騎士の胸板に跳び蹴りを叩き込む。

「うわッ！！」

声を上げ後ろへたたたらを踏む緑騎士。結構体重があるのか、倒れずに踏みとどまった。

そのまま斬り込もうと剣を構えるが、緑騎士がこちらへ右手を伸ばし、魔術円を展開。俺は魔術円の紋様から魔術内容を瞬時に予測。

これは…… 火炎放射術式かッ！？

とつさの判断で剣を床に突き立て、両腕に術式をまとう。

「燃えるオツ！」

『フレイムガンバースト
火炎放射焦熱術式解術』

「こなくそオオツ！」

『ツインドロホムド
爆熱双打撃掌術式解術』

緑騎士の右手から約七百度に達する炎が放出。俺の突き出した両拳から発生した爆風とぶつかり合う。

ポ　ポ　オ　ン　！

発生する白煙、陽炎の向こう側に恐らくは爆風で炎を被ったのだろう。体の所々が煙を上げる緑騎士が見えた。

剣を引き抜き、近接魔術を発動。

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

抵抗しようと左手を上げる緑騎士、俺は構わずに左手首を一撃した。ギンツという金属音。機械部品をバラまき、高周振動による火花を上げ、左手首が宙を舞う。

機……械、だとツ？　それに、血が出ない？

一瞬の疑問を振り払い、攻撃を続ける。

胸板目掛け、袈裟切りと逆袈裟切りの連撃を見舞う。そのまま勢いに任せ、肩でタツクルをかました。

「うわぁッ！」

胸部装甲にX字の傷を作り、叫びながら下がる緑騎士、しかし倒れない。

チツ、浅かったか。……さつきからこいつなんかやたら子供っぽい声だすな。

まだ抵抗を止めない緑騎士、しかしその動きが唐突に鈍くなる。よく見るとキラキラとした輝きが細い線状の何かを形づくり、緑騎士に巻きついていった。

「……ワイヤー？」
線を目で追うと俺の後ろに続いている。

振り向くといつの間にか近寄ったのかアテレアがいた。何やら両腕を曲げながら交差させて、力を込めている。ワイヤーはその指先へ繋がっていた。

「金属液状化術式を、応用、してな、ワイヤーを、作って縛ったのだ」

なかなか器用だな、お前。

緑騎士もなかなか力があるらしく、アテレアの顔が段々赤くなってきた。

「だか、ら早く、トドメを……」

「ああ、わかった」

俺は離れへの通路入り口へ向く。

「え？ ちょっとギード……」

『ニトロジェットアタック
爆熱噴射型突撃術式解術』

噴射炎を上げ、俺はアテレアを残して離れへの通路へ体を飛びこませた。

「後よろしくウウウッ ……!!」

「ちょっと待てえええッ

!」

悪いが、急ぐんでな。

黒騎士強襲死闘編伍 中間管理職は大変です（前書き）

お待たせしました

黒騎士強襲死闘編伍 中間管理職は大変です

「ギイイイドツ！！　こおの、薄情者おおおつ　！！！」

アテレアの怒声を背中に受け、それを反動とするように術式で加速、直線で造られた通路を滑空する。

トドメ刺すのも手間取りそうだし、時間もないからな。ま、アイツもヤバくなれば逃げるだろ。それよりも……

レンガで四方を造られた通路は、先行した騎士に魔術照明が破壊されたため非常に暗い。

……まズツたな。突撃術式で突っ込むんじゃなかった。

一瞬、後悔が頭をよぎる。術式の噴射炎の光により、俺の位置が丸わかりだ。

ウイイイイイッ

「ッ！？」

暗闇の向こう側から、突如として音が響く。かん高いような、くもったような規則的な回転音。

魔導機関の駆動音！？

慌てて暗視光学魔術を発動、前方を確認する。

「やっぱりいやがったなッ！」

暗闇を透過した先に見える人影、先程の緑騎士とほぼ同じ体格とデザインの全身甲冑。そして最大の相違点、

派手な色してんなあ

きらめく血のようなクリムゾンレッド、紅玉色が甲冑を染め上げている。

次に最も驚かされたのは、騎士は走らず前傾中腰の姿勢のまま猛スピードでこちらに突撃を仕掛けているのだ。

足元には両くるぶし辺りに片側一対づつ付いた車輪が見える。それが唸りをあげ、通路の床を火花を上げながら高速回転、騎士を加速させている。

なんだありゃ？

自動回転する足首の車輪、それがあの騎士の機動力の源か。

やがて騎士は両手を横に広げる。それに握られているのは八十センチ程の刃渡り、細いシルエットを持つ一対の両手剣。その切っ先が、両の壁に着いた刹那。

断末魔を思わせる耳をふさぎなくなる異音と共に派手な火花が通路に舞う。

高周振動術式による破壊の振動が刀身を震わせているのだ。どうやら相手は近接格闘型、真っ向から俺を迎え撃つつもらしい。

いいね、気に入ったッ！

戦闘の高揚が甘く、激しく背中を走る。いかん、本来の目的を見失いそうだ。

『ニトロブーストアタック
爆熱噴射型突撃術式解術』

突撃術式を更に追加解術、加速を強める。正面から受け止めるなら、正面から跳ね飛ばすのみだ。剣を振りかぶり、すれ違い様の

一撃を引き絞るように狙う。

「ツオオオオツ！」

しかし剣を振る前に、紅騎士が右へ軌道を変更、体を寄せる。

「ハツ！」

その長身から連想しにくい高い声が響き、跳躍。更に跳ねた両足が壁に着地。

ツ！ 何だと！

車輪によつて生み出される高速で壁を疾走、捻れた軌道により右壁、天井、左壁を螺旋状に疾駆。その動きはさながら紅き亡霊を思わせる。

驚愕する俺目掛け、すれ違い様に双剣が走った。

ツヤバい！

とつさに右へ身をよじる。左側頭上目掛け走る二本の剣線が、噴射魔術円と同時に張られる魔術防^{シールド}御盾を火花を上げて一瞬の停滞の後、貫通。俺の兜をかすり通り過ぎる。

やるじゃねえかツ！

追撃に備え、突撃術式を解除、両足のピッグを作動させ、ターン。後ろの紅騎士へ向き直る。姿勢を落とし、推力を殺しながら剣を構えた。

先刻の剣戟の熱がまだ冷めぬ空間、その闇の向こう側に同じくこちらに向き直った紅騎士が見える。

「へえ、今のしのげるんだ。……やるじゃん、下っ端ばいのに。つたく、グリユーの奴は何やってんだか」

体躯に似合わぬ、まるで子供のような声で喋る紅騎士。……いや、さすがに子供じゃないだろ。身長二メートルは有るし。グリユーってあの緑騎士の事か？

「……知ってるか？ 人を見た目で簡単に判断するとあとで痛い目に会っただぜ。具体的に言っと、『今』からな」

「ふうん、じゃあ手早くしてくんない？ 用事あるし時間ないからさ。あつ、時間かけて説教したいなら、あの世でやったら？ オススメよ」

「心配すんな。手早くやるよ。但し、お前はあの世で反省だ」

「いーいセリフ吐くわね、魔族。……吠え面かかしてやる」

「楽しくやるうぜ、人族。……どうせ短い付き合いなんだからよ」

さあーてつ、どうすっかな。つい啖呵切っちゃったけど。

状況観察、特筆するべき点は脚部車輪によるトリッキーな動きと、双剣による剣撃。動きから察するに、見た目は同じでも緑騎士より体重は軽いみたいだな。

機動力を殺せれば……

『あ”あぎいごえるかあ？』

突如、頭の中に直接声が響く。魔術通信とは明らかに違う言語がダイレクトに脳に突き刺さる感覚。つつか痛い頭痛い何コレ痛い痛いイタイ。

「イタタタツ！」

思わず頭を抱えてもがく。何だこれ帝国の新兵器か！？

「イタイイタイ！ なんなのコレ魔族の新兵器！？」 見れば紅騎

士ももがいている。これは帝国のやつの仕事じゃないのか？

『え”、しゅつり”よくがづよい？ ……すまん、これでいいか？』

頭痛が急速に収まる。ていうかこの声…… 魔王様か！？

『現在音声通信が通じないので、私の思考念話を使い話している。個人識別が面倒なので、城の中の人間全員に念話を送った。

この話は襲撃側も聞いているので皆は注意するように。

先程は出力が強すぎたようだ。頭痛はそのためである。許せ』

魔王様こんなことも出来たんだ……

『現在襲撃している賊の狙いは我ではなく離れにいる証言者の可能性がある。離れの近くの人員は離れへ集合、賊の別動隊に備えよ。

メイド等非戦闘員は本館側に退避、離れには行かないように。

なお、賊の装備は通常の人族とは違う物らしいという報告が来ているので注意を払うべし』

冷静に指示を下す魔王様。流石だ。

『こちらの正門側が片づいたら私も離れに向かおう。どれ、久しぶりに運動というヤツを試してみようではないか』

えっ？ ……えっいやちよっと待って、今の魔王様の姿を襲撃側に見せるワケにはいかなんぞ！

『ん？、なんだゴルンよ。何？「魔王様自らおもむく必要は無い」？

いや、そうはいうがな、私も少しは動きたいというか運動不足というか……』

隊長頑張つて！ 超頑張つて！

黒騎士強襲死闘編六 隠し玉は初見だとビビる

これは急がないと別の意味でもマズいぞ……

ここで俺がまごついて魔王様登場なんてことになったら目も当てられん。隊長が抑えてくれている内に早くけりをつけねば。

「な、何？ 何なの？ 魔王が来るの？」

紅騎士に動揺が見える。無理も無い、あれほどの頭痛をついつかりで起こされたのだ。

人と魔王様の存在の違いというものをイヤというほど思い知らされただろう。

やはり我らが魔王様は何処に見せても遜色のない、立派な魔王なのだ。……ただ一つにして致命的な一点を除いてはな。

「……おい、どうすんだ？ とつと引いたほうがいいんじゃないか、お前ら？」

「心配される筋合いは無いわ。とつととお前ブチ殺して、ターゲットの所まで行って速攻ミッションコンプリートしてやるわよ」

やっぱり引くわきゃないか。

「引いた方が後悔しないと思うがね」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

「ぐだぐだ抜かすならあんたがどきな」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

暗闇の通路を、互いが発動させた高周振動の独特な振動音が吹き抜け、響く。

無言のまま脚部車輪を回転させ、紅騎士が双剣を構え火花を散らせながら疾走。真つ直ぐにこちらへ距離を詰める。

振り上げた左剣の一撃を剣で受け、防ぐ。

高周波同士がぶつかり、断末魔のような形容詞し難い異音が響く。それに耐えながら、受け止めた剣を弾き、今度は右剣を受け止める。「それえっ！」

車輪の速度を利用し、そのまま胴体で体当たりを仕掛ける紅騎士。ヤロウツ！

両足のピッグを作動、床を突き立て、体当たりを踏み止まった。鎧がこすれ合いギンギシと音を立て、剣がきしむ。どうやら速度はあっても体重はあまり無いみたいだ。

鏑迫りの体勢から拮抗する俺と紅騎士。紅騎士の車輪が空回りし、床を虚しくこする。

左剣で刺そうと構える紅騎士、気配を察した俺はとっさに鏑迫りを右に受け流す。

「うわっ！」

受け流しによる急激な体勢変化に車輪が対応仕切れず、前のめりになる紅騎士。それに合わせ、俺は胴に膝蹴りを叩き込み術式を發動。

『二トロボムドボトム
爆熱打撃脚術式解術』

膝頭に浮かぶ魔術円からけたたましい音を立て、爆風と熱が発生。胴に炸裂する。

「キヤッ！」

悲鳴を上げる紅騎士、車輪を逆回転させ後退し再び距離を取った。

紅騎士の胴部装甲には術による焦げ痕が見えるが表面的な損傷はあまり無い。今までの帝国の鎧と比べて強度が段違いに高い。

「つか、いちいちこいつ女っぽい声だから力抜けるんだけど。いやしかしこの体格と力は女じゃないだろうし。……オカマか？

紅騎士は性急に剣を構え直す。動きからやや焦りが見えるな。……いや焦っているのは俺も同じだが。

斜め気味に右側へ疾走、跳躍。さっきと同じように壁走りて走り抜ける。

「何度も虚仮威しを！」

軌道を予測し、剣を一直線に紅騎士へ構える。二度目なら動きも少しは読める。

「喰らつとけッ！」

『ニトロジェットアタック
爆熱噴射型突撃術式解術』

術式のジェット噴射で加速、紅騎士の胴体目掛け突撃を仕掛けた。壁を走る紅騎士目掛け、剣と共に飛び出し激突しようとする。

「見えてるわよ」

しかし激突の瞬間、紅騎士の左右の車輪がそれぞれ逆回転し壁を滑る。それた上体が俺の剣先を避けた。

「ちいいっ！」

通り過ぎ様に側面を走る斬撃、シールドを貫通し、迫る剣をとつさに左手の装甲で防御する。飛ぶ火花が大輪の花のように視界を埋めた。

ぬかったっ！

空中で術式を解除、膝から着地。推力を殺し切れず、受け身を取りながらゴロゴロと床を二、三度回転。通路に派手に鎧のなる音を

響かせながら停止した。

背中がイッテエ……腕からは血は出ていないな。

紅騎士の高周振動の効果時間が途中で切れたのだろう、装甲は削っても生身の所には到達しなかったようだ。

「寝てんじやないわよ、魔族！」

紅騎士の声が響く。車輪を走らせ、三度、こちらへ迫ってきた。

「……チツ」

少しフラつく体を立たせ、構える。魔族の体内は豊富な魔力により恒常的に身体強化魔術が働いている。体力、強度では普通の人族より遙かに上だ。この程度の衝撃なら骨も折れない。

「これでえっ！」

『ハイシエイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

紅騎士が双剣を空に振り上げる。

「終わりよっ！」

『セヴン・ヘヴン・ダウン
七重展開分霊術式解術』

紅騎士を覆うように現れる魔術円の複雑な紋様、そこから読み取れる魔術式の内容に俺は目を疑う。

分霊！？

通路を埋め尽くすように拡大する魔術円、やがてそこから現れる六体の人影。

紅い甲冑、双剣、アンバランスに長い手足。即ち六体、オリジナールを入れて七体の疾走する紅騎士。

「五お体いバあラしてええっ！」

そのピツタリと重なった声は最早一つにしか聞こえず、
「逝いっちなああッ！！」

十四の斬撃の衝撃は、一瞬一撃のみだと錯覚する程に、寸分違わず重なって打ち込まれた。

黒騎士強襲死闘編七 しつこいやつは引きずってしまえ(前書き)

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編七 しつこいやツは引きずってしまえ

マズい、避けきれん！

眼前一杯に迫る七体の紅騎士。接触した物を振動分解する十四振りの片手剣が、縦横無尽な剣の軌跡を描く。そして凶刃達が目指すのは疑いようも無く、まさしく俺。

「うっだらっしやあああッ！」

『ハイエイカーオフセット
高周振動相殺防御術式解術』

とっさの判断で両腕を組み、術式を解術。魔術円が青白い燐光を放ち、俺を包む。

甲冑装甲に振動が走り、十四の斬撃の高周波とぶつかり合う。振動が相殺され、ただの刃となった剣が装甲を叩いた。

「……しっつぶといわねえ」

斬撃後、即座に六体の紅騎士が光の粒子と化し、分解。一人へと戻る。

通常、俺のような機動力重視の前衛の使う防御障壁術式は、点ではなく面を重視した物だ。散弾など避けにくい攻撃を防ぐためであり、高威力の振動斬撃は防げない。

しかし、攻撃の原理を知れば効率的な防御は出来る。高周振動ならば同威力の振動で相殺すればよいのだ。高周振動相殺防御術式は鎧装甲に振動を走らせ、高周斬撃を無効化する術式である。

ただし剣の刀身ではなく鎧全体を走らせる必要のため、発動からの有効時間が極めて短い。一斉の斬撃ではなく連撃だったら無効化仕切れず、やられていただろう。

「……こういうのも含めて、兵士の優秀さなのさ。しかし『分霊術式』とは珍しい物使うな」

『分霊術式』とは魔術により自信の存在を多重展開させる術式だ。最大の特徴は『多重展開した自信存在』であるため、魔術で作った自律人形などの傀儡のような命令が必要ない。

あくまで分霊は多重展開した術者であり、分霊には独立した意志があるのだ。そのためスピーディーな対応が出来る。さらにパワーダウンも無いため、単純に術者が増えるのに等しい。

短時間な火力の倍増などに高位の後衛兵士が二から三体ほど出して使う場合が多い。こいつのように近距離戦、しかも七体出すヤツは珍しすぎる。

「死ぬ前に珍しい技見れて良かったでしょ？ ほらあ、あたしって優しいから」

双剣を手持ち無沙汰にクルリと回転、ふざけた調子で喋る紅騎士。

たしかに肝を潰したよ。だがな、

「じゃあ俺も優しさ返しに一つ教えてやる。……お前あの技をもう一度俺に使ったら 負けるぞ」

ピタリ、と紅騎士の動きが停止。回していた剣を止め、俺へ右剣の切っ先を向けた。

「魔族って面白いわあ、……この状況でギャグかますとかマジありえない」

軽い口調に殺気が満ちる。いけるな、こいつ絶対またあの技つかうつもりだ。

「ギャグかブラフか、試してみるかい？」

紅騎士の双剣が動き、足の車輪が唸りを上げる。

「そのヤツすい挑発」

押し出される体、加速する剣、紅い亡霊の軌道が走る。

「あんたの命で買い上げてやる ツ！」

『七重展開分靈術式解術』
セヴン・ヘヴン・ダウン

魔術円の光の中から再び現れる七体の紅騎士。猛禽の如き疾走で俺に迫る。

さつきと同じ？ ……いや、ちがうな

目前で七体が別れる。俺の周りを取り囲むように等分な距離で円陣を組む。

「これは防げるかしら!？」

取り囲んでからの連撃で逃げ場を完全に断つつもりか……

「死んどけええエエツ!!」

『高周振動破壊術式解術』
ハイシェイカーブレイク

紅騎士の七重の声が響き、唸りを上げて双剣が迫る。

待ってたぜ、この時を!

『装甲爆散相殺防御術式解術』
ニトロリアクティヴアーマー

俺の胸部分装甲部で魔術円が展開収束。次の瞬間、頭部、胸部、背中、両肩の装甲が光を上げて爆発、破片と煙を周囲へと撒き散らす。

「ッな!」

紅騎士の叫び声をかき消すように破片が殺到、七体の体に激しく打ち当たる。

煙越しに、集中が溶けたために一人に戻る紅騎士を確認、飛び込みながら鉄甲で固めた拳を振り上げた。

『爆熱打撃掌術式解術』
ニトロボムト

兜の側頭部をぶん殴ると同時に術式を発動、けたたましい爆発音、衝撃、熱を頭部に受け紅騎士がのけぞる。

寝とけッ!

更に胴へ前蹴りをかまし、床へと押し倒す。レンガの床に金属音を立てて、紅騎士が崩れ落ちた。

倒れた拍子に床に落ちた双剣を注意深く蹴って遠ざける。

「こ、この青髪野郎……」

転がる紅騎士が苦しげに声を出した。まだ気絶はしていないようだ。……ん？ 青髪？ ああ、装甲を爆散して解いたため、最初は鎧に覆われていた俺の顔をみたのか。

「……お前は確かに術式の才能がある兵士だ。魔族だって分霊を七体出せるヤツは後衛役でもまず居ない」

分霊を出すには高度な魔術式を組む能力が必要だ。接近戦に使うなら、さらにそれを速く活用出来なければならない。その意味では紅騎士の能力は才能としか言いようがないだろう。

「でもな、お前は分霊のデメリットを理解していない」

最強に思える分霊も弱点は存在する。当然魔力の消費が大きく、術式の維持も難しい。そして最大の弱点。

「分霊は術者の存在を歪めて多重展開している。それ故に術を解き一人に戻ると、分霊のダメージも一人に統合される。分霊の内、一人が致命傷を負えば、元に戻った際にも致命傷を追うんだ。ちようど今のお前のようにな」

俺の突きつけた切っ先、その前の紅騎士の装甲に無数の破片が撃ち当たった後が着いている。

さつき俺の使った術式は「装甲爆散相殺防御術式」。本来は砲撃等の直撃に対し、自身の装甲を吹き飛ばして砲弾の威力を相殺する一回限りの防御術式だ。

しかし、鎧の破片を撒き散らすことで近距離戦での散弾のような効果も期待できる。

普通なら範囲が広い分威力が低いのだが、紅騎士の分霊が解けたことにより、七人分の損傷と衝撃が一人にのしかかっているのだから。

「斬撃の時だけ分霊を出し、即座にしまうようにすれば確かにダメージは少なく済む。だがな、攻撃の瞬間を読まれれば意味が無い。

つまるところ、お前は才能があっても経験が不足しているのさ」

「だまれ、魔族。あたしはまだ負けてな……」

もがきながら立ち上がるうと紅騎士が動く。無駄に元気なヤツだ。

「動くな」

『ハイシェイカーブレイク
高周振動破壊術式解術』

右足首を一闪、火花と共に車輪のついたブーツが切断され、宙を飛び、床を転がる。乾いた音が通路を反響した。

やはり血が出ない？ こいつら一体……

足首の断面から覗く機械部品、金属片、チューブ。しかし血は流れず傷口は見えない。

「お前ら…… 一体何者だ、なぜ血が出ない？ ホントに人間か？」

「失礼なこというな、あたしはちゃんとした人間だ！ 魔族に疑われる筋合いは無い！」

手足をジタバタと動かし、紅騎士が抗議の意志を示す。切断による痛みさえ無いのか？

「まあ、いいさ。お前は後で捕虜に取るからそこで寝て…… うおっ！」

突如起き上がった紅騎士が、膝をついた体勢から俺の腰にしがみつく。

「離せ、お前は！」

「行かせるか…… お前をマスターのところまで絶対に行かせるもんか！！」

叫びながら回した手はガツチリと組み合わさり外れない。マスター？ それが三人目か？

「そうかい、だったら」

紅騎士の頭を掴み一気に床に押し倒す。仰向けに倒れた紅騎士に俺が乗る体勢になった。

「どけ、この野郎！」

更にもがく紅騎士、俺の腰に回した手も離さない。

「そこまでやるなら付き合えよ。」

地獄までな」

「ニトロジェットアタック
爆熱噴射型突撃術式解術」

背中に広がる噴射用魔術円。その紋様の輝きに気づいた紅騎士が上半身を上げようとしますが、無理やり押さえつけて床に密着させる。

「この、お前まさか……」

「ああ、勘がいいなお前。当たりだ」

噴射した強力なジェット推進により体が離れへ向かい加速する。それに引きずられた紅騎士の後頭部と背中が音をたてレンガの床をこすれた。

「あががががががッッ!!」

やがて速度が最高速と達し、紅騎士の背部と後頭部から摩擦による火花が上がる。その頃にはすでに俺の耳には紅騎士の悲鳴と、床と鎧がこすれる摩擦音と、魔術の噴射音の区別は着かなくなっていた。

「あつ、あづい! 離して! 熱い!」

「んー? 何言ってるか全然聞こえないぞー?」

紅騎士を引きずりながら、離れへの扉を目指し通路を突き進む。

残りは「マスター」が一人か……

結構時間かかったけど、あのタコ生きてるかな?

黒騎士強襲死闘編七 しつこいやつは引きずってしまえ(後書き)

あ、ギャグ入れ忘れた……

黒騎士強襲死闘編八 こっちはこっちで大変だ（前書き）

今回はギードのいる離れ通路ではなく、奇襲を受けた正門側の話です。

黒騎士強襲死闘編八 こっちはこっちで大変だ

突撃槍士、ギード・ウオーカーが離れへの通路で紅騎士を撃破してからさかのぼること数分前。正門から騎士団による強襲を受けた城留守番組の朱竜部隊の面々達、彼らもまたそれぞれの戦いを、

「おい、生きてるか！」

「うっせ、死んでるように見えるか！」

「俺、この戦闘が終わったら結婚……、ぬわぁー！」

「おい、しっかりしろ！ 畜生！ モテるやつは死ね！」

戦ったり戦わなかったり。

突如として強襲を開始した騎士団、現在朱竜部隊は彼らを本館正門口で押し止めていた。

「お前らしぶといから、この程度じゃ死なねーだろ？ 俺も居るわけだし」

正門中庭にて陣取る敵兵、約四十騎。本館入り口付近では1・5メートルほどの高さの不規則な模様を描く、石の壁によるバリケードが敵の侵入を防ぎ、朱竜部隊員の盾となっていた。

部隊員による石壁ロックウォールキャスト防御構成魔術により周辺の構造物を集め作られた防御壁である。更にその上から重ねられた六角ヘキサウォール防御壁術式の青い光がきらめいていた。

敵兵側からの夜闇に光が瞬き、熱風や衝撃波が壁を叩く。途切れる事の無い中距離攻撃魔術が豪雨の如く叩きつけられていた。

虎頭の獣人、獣人族虎人種のデュガを床に寝かせ治療術式を施しながら、壁の外に防壁魔術を展開するという離れ技を演じつつも、屍人僧侶グラス・ファイバーの口調は普段と変わらない。

「大体よー、俺今日の夜からデートだったんだよ、デート。酒場のエミュニちゃん口説き落とすのに一週間通い詰めたんだぜ？」

「これじゃ絶対行けねえよー」

デュガに愚痴りながらも、魔術の精密さと動作には一切影響は無い。

「……デートって、あんた魔王様の警護の夜勤じゃないのか？」

やや苦しげに声を出すデュガ。騎士団の強襲により真っ先に負傷したのだ。

「いやー、エミュニちゃんがどうしてもこの日じゃないとダメっていうからさー。ちょっと抜け出そうかなって」

「死ね！ アンタゾンビだけでもっかい死ね！」

「んなこと言うなよ。お前だって食堂で他のヤツと彼女の話してたじゃねーか」

「……あれは脳内彼女をいかに上手く語るかを競ってたんだ。現実じゃ、リアルじゃないんだよ」

「……いや、うん、なんかこう、スマン」

「しかしまだ攻撃が止まんとは」

厚い胸板と長めの両腕、二メートルを超える背丈と鎧の隙間から見える黒い体毛、そしてその両目に宿るは粗野な外観と反する知性の光。

獣人族、巨猿種、いわゆるゴリラに似た容姿であるオルボがその巨体を床に座らせたまま呟く。

「人族の癖にずいぶんと粘るな」

彼の鎧には一部焦げ痕が見えた。奇襲を受けたデュガを抱えた際に受けたのだ。

「人族にしちやずいぶん魔術攻撃が長いよな。ひよつとしてあれが上位騎士なのか？」

骨格ではなく角質の硬化した特徴的な鼻角、巨猿種オルボを凌ぐ巨体と太ましい手足、鎧の装甲の下には同等以上に強靱な灰色の外皮が見える。

入り口の奥側で休息を取っていた獣人族、犀人種のドツブスが声を出した。一際巨漢であるドツブスの後ろ側では彼を盾とするように十五人程の様々な種族の朱竜部隊が控えている。

「んー、上位騎士ねえ？ あれはちよつとちがうんじゃない？」

デュガの治療を済ませ、他の兵士の治療にかかりながらグラスが口を挟む。

「俺が前に見たことがある上位騎士はなんつーか、まず使う術式から違うんだよ。レベル高いの。」

少なくとも外の奴らみたく一般の兵士が使いそうな術式をバカスカ連射はしない。

それに数が少ないんだから、あんな一辺に数は出さないだろ」

通常の人族の兵士は魔力量が低いため、魔術の連射が出来ない。今のように身動きが出来ないほどの中距離魔術による弾幕を十分に上続けるなどまず有り得ない。

「そついえばやつこさん、普通の兵士とはずいぶん違う格好だな。なんだあの装備は？」

オルボが壁から少し頭を出し、こちらを取り囲む敵騎士を改めて観察する。大柄な体をちぢこませ、ひよっこり頭を出す様は何故か微笑ましく見えた。

敵兵の外装は頭から爪先までを覆う曲線主体の全身甲冑、胴体に対し明らかに長く大きい手足が末端肥大気味なシルエットを作っている。さらに両くるぶしについた車輪が回転し、移動補助を行っている。

いた。

そして両太もも外側と後ろ腰部についた小型の機械らしきタル型の何か。武装は剣や長柄の戦斧だ。

「あの三つの機械みたいなやつなんだ？　今まで見たことないぞ。それに手足がなんかデカい。

それから何だあの足の車輪？　俺もアレ欲しいな……って、うおっ！」

のんきに観察を報告するオルボの目の前に魔術による熱波が直撃するが、グラスの魔術防御壁に防がれる。

「まー、なんにせよアイツら早めにどうにかしないと魔王様こっちに来ちゃうんじゃない？　なんかすげー張り切ってるみたいだし」

「ああ、なんか現場主義みたいだしな魔王様。……上司としちゃ理想的かもしれないけどあの状態で出てこられてもなあ」

ぼやきつつも、獲物の破砕棍を支えにして立ち上がるドップス。「どれ、そろそろ本格的に打って出るか」

つられてオルボも態勢を整え始める。「ほんじゃま、行くかい？」

促され、奥側の隊員達も動き始めた。

「ちよい待ちなドップス、オルボ」

グラスの制止により二人の始めとした部隊員の動きが止まる。

「あー、今何時だっけ？」

懐から懐中時計を取り出し一瞥した。

「午後九時ちよい前か、実はよお」ボリボリと頭をかく。「ムラマサ今日は非番なんだが、夜当番変わってくれって頼んどいたんだよ。だからムラマサ近い内に来るかしんねーのよ」

「ムラマサさんってあのスケルトンの？　……で何時に来るんだよ」デュガの問いにグラスはのんびりと答える。

「午後十一時くらい」

「……いやアンタ全然間に合わないだろ！」

「んー、そりゃ普通に來たら間に合わないが、なんつうかムラマサは普段はとぼけてるけどこういう時は鋭いつーか」

「鋭いつてそれがどうなんだよ？」

「あいつは戦場の匂いに敏感なんだ。オマケにそれが大好きでなあ……
おっ？」

入り口付近を取り囲む敵騎士団に変化が見えた。中央辺りの騎士が後ろを振り向き後方へ引っ込み始める。

「噂をすればなんとやら、か。まったく……」

外を見ながら半ば呆れたように、少し嬉しそうに、グラスは呟く。
「こつちが動きゃ、あっちも合わせると、まったくよく出来た女だよ。アイツは」

「？ 女って誰の事だ？」

「そりゃー、今からやってくる未亡人の事さ」

突如として敵兵市の陣形が割れた。どこかの国の神話で伝わる断たれた海面の如く、兵士達が左右に別れる。いや、別れさせられた。

現象を引き起こした存在が中央の道を堂々と、しかし俊敏に駆け出していく。

春の夜の暗闇に見えるその様は、まず桜吹雪があしらわれた蒼穹色の着流し、いわゆるヒノモトノクニの浴衣と呼ばれる薄着の着物が現れる。

足には同じくヒノモトノクニの物である木製のサンダル、いわゆる二枚歯の下駄が石畳の地面を軽快に叩き、音を響かせた。

後ろでにまとめられた白髪が、走る度に揺れ、不規則な銀線を描く。月夜の光が白骨とドクロを優しく、妖しく照らし出した。

カラン、カランと軽快に鳴る音は下駄の物だけではない。その者自身、つまりサムライスケルトン、ムラマサの骨がぶつかり合い奏

でられる調べも含まれているのだ。

やがて左右に別れた兵士達の内の一人が剣を構え、ムラマサの突進を止めるために切りかかる。

「斬られる覚悟のある者のみ前を塞げッ！ それが無いのならッ！」

叫びつつ、ムラマサは左手で太刀の鞘を持ち、刀を納刀。右手を柄に添える。

『^{シンデン}高周振動破壊術式解術』

高周振動により異音を上げる太刀を右手で抑えた。敵兵士が気合いと共に大上段から剣を振り下ろす。その起動を研ぎ澄まされた長年の勘で即座に予測、すでに条件反射のレベルにまで達した回避動作で右に避けた。

敵兵士の剣が通り過ぎるより早く、抜き打ちの抜刀、真一文字の剣撃が無防備な胴部へ放たれる。

「拙者の前に、立つなッ！」

高周振動の斬撃が音速の抜刀術により吹き抜け、装甲、肉、臓物、骨を断ち切る。

刹那の狭間に散る火花、敵兵士が胴に熱を感じた時には既に、彼の上半身は分かたれて空を舞っている途中だった。

やがてそれが、鮮やかな切断劇の対価を支払うように鈍い音を立て赤を撒き散らし石畳の地面に落ちる。

駆け抜けるムラマサをもう有るはずの無い背中で見送った下半身は、やがてゆっくりと倒れると何かを思い出したようにドクリと血を溢れさせた。

「　　ッ！！」

一瞬の内に巻き起こった無慈悲かつ、ある種の「美」さえ感じさせる切断に、兵士達は言葉を飲み、動きを止める。ムラマサの剣気に飲まれたのだ。

「怯むなッ！　順次仕掛ける！」

指揮官らしき男の声が響く。飲まれた士気を取り戻すべく激を放つ。

「面白い、刈られるために己が首を晒すか。阿呆共が！」

悪態をつきながら、疾走の体勢を崩さずに太刀を構えた。

大ぶりの戦斧の一撃をくぐり抜け、太股を両断。

剣撃の刺突を弾き、袈裟切りを見舞う。

幾重もの兵士とその斬撃を凌ぎ、防ぎ、切り倒し突き進む。

しかしいかに達人であるムラマサでも物量には押し切られる。直

撃はしないが、徐々に着物に斬撃の痕がついていく。

「ムラマサ！　こつちだ！」

壁の上部からドップスが上体を出し破碎棍を構える。

『ステームインパクト蒸散爆衝撃波術式解術』

破碎棍の先で空気中の水分を急速圧縮し、加熱。一部の圧力を解き放つことで指向性をもつ水蒸気爆発を発生させる術式だ。

放たれた熱衝撃波がムラマサへ殺到する騎士に直撃、吹き飛ばしていく。

「……スマン！」

水蒸気の雲を抜けて、ムラマサはドップスが顔を出す魔術構成壁へ駆け抜けた。

壁の前にたどり着き、飛ぶように跳躍。壁を踏み超え向こう側、

むさ苦しい魔族がひしめく方へ落ちるように降り立つ。

「さて、」

破れ、乱れた浴衣をバサリと翻し、ムラマサは淡々と、しかし飄々と状況を確認する。

「なにやら戦場の匂いがすると浮き足立って来てみればこの有り様か……」

「一体国境警備は何をやっているのだ？」

「……ちよつとこの人ほんとに戦場の匂いでやって来ちゃったよあきれ気味にデユガが呟く。

「な？ 言つた通りだろ？」

「でよムラマサ、ギードのヤツ知らね？」

あいつ日勤で帰ったからかれこれ三時間ぐらい立ってるし、自分ちに戻ってんじゃないか？」

グラスの質問にムラマサが答える。

「いや、知らんな。城の近くでも見なかった。自分の家でねてるんじゃないか？」

「今回はギードはツいてるな。俺たちなんぞこの後飲みに行く約束だったのにこの有り様だ。……いやもちろん野郎しかない飲み会なんだが。」

この件が終わったらギードのやつを締め上げて酒か食い物でも奢らせたいぞ。ギードは最近メイドのアイアちゃんと仲良いつて噂だし」

ドツブスのぼやきのような提案に基本的にモテない朱竜部隊員達が口々に賛成の声を上げはじめた。

「さんせーい」「アイアちゃんに手出してたらコロす」「モテるヤツは死ぬ」「何でもいい、腹減った」「タダメシより美味しい飯は無い！」

雑多に声が溢れにわかには活気づく。熱気が出てきた彼らをまとめ

るため、オルボは大きな両手の平を叩き合わせ打ち鳴らした。

「はい、はい、じゃあムラマサも揃ったし、そろそろけり着けるために打って出るか」

その両手を防御壁に付け、静かに眼を閉じイメージを練る。組み上げた術式を魔力に乗せ解放、

ハイストーンキャスト
『高度石材構成操作術式解術』

壁に走る、光の紋様を刻む魔術円。意志の力が、物質の在り方を改変していく。

壁が崩壊し腕を伝いオルボを包み込む。そのまま歩を進め、入り口の外へ出た。

全身を流動化した石が伝い、オルボを中心として巨大な四肢を形成、二メートル程の身長が延長され三メートルを超える。

やがて石の巨人は完全にその姿を成す。武骨な外観ながら、滑らかなその深緑色の表面全体には新緑の葉と咲き乱れるコスモスの花びらの見事なレリーフが刻まれていた。

「こりやまた張り切った細工だな。……でもどうせ戦闘終わったら崩しちゃうんじゃないの？」

グラスの指摘に既に巨人の外装に覆われて顔が見えないオルボが答える。

「俺の実家は代々石工細工職人でな。こういう細かいところほど腕をふるいたくなるのさ。ちなみに今年の初夏の流行りになると思う新緑の葉を入れてみた、結構いいだろ？」

粗暴な容姿だが、巨猿種や巨人族は手先が器用であり、細工物の職人が多い。

オルボも実家が職人の家なのでその辺の美意識にはうるさい方だ。「じゃ行つてくらあ」

巨岩の大猿が両手で勢いよく地面を叩く。中心部のオルボより発生する魔術式による圧縮空気が四肢を駆動させているのだ。

空洞の手足から時折ブシュッと空気が漏れる音が聞こえる。地面

を叩いた反動と脚力を合わせ、巨体が跳ね上げ、大きく宙を舞う。
湾曲起動を描く砲弾の如く、敵の真つ只中へと落ちて言った。

「じゃあ俺も仕掛けるか」

のんびりとした動作でドップスが外へ出る。巨大な肩には両端に
金属の錨が打ち込まれた長大な破砕棍が担がれていた。

『スチームドフラースト 蒸散爆発移動補助術式解術』

足の裏から発生した水蒸気爆発により、急激に加速。破砕棍を構
え砲弾の如く敵へ突っ込んで行った。

「グラス、拙者にアレをやってくれ」

浴衣の乱れも直さず、ムラマサは告げた。

「いきなりフルスロットルかよ。飛ばすねー」

「こういう一気に状態を変える時は出し惜しみはいかん。とつとつ
やってくれ」

「いや、それはわかるんだが……」

グラスが気まずそうに浴衣を指差す。

「それで変身するのはマズくね？」

ムラマサの浴衣は剣戟のせいであちこちに破れ痕がつき、本体の
骨が覗いている。このまま変身すれば色々見えてしまいそうだ。

「サラシと腰布は巻いてある。よしんば見えたとしても、三分ほど
なら問題無い」

「……いやー、そこはためらおうぜムラマサ」

なにやら揉めているグラスとムラマサを見かね、デュガが声をか
ける。

「お前ら何もめてんだよ？ 大体ムラマサさん、その服何？ 見た
ことない服だね」

「これは拙者の故郷の浴衣という服でな、懐かしんで自作したのだ。
つい急いで普段着で来たところになってしまった……」

裾を指でつまみ広げると無数に空いた穴で向こうが見えた。

「いい生地なのにこれは勿体無いね」

「まあ、どこぞの高僧曰わく『形有る物はいずれ滅する』だ。気にしても仕方ない。それからグラス、お前が口説いていたエミュニ嬢から言づてを預かったぞ」

「え、なにになに？　どんな愛の言葉を言いつかってきたんだ？」

「うむ、『もつと太いお客から食事に誘われちゃったから、今夜はキャンセル。グラッチ、メンゴ』だそうだ」

恐らくエミュニの口調も再現したためだろう、やたらキャピキャピした口調でムラマサが伝言を伝えた。

「……デュガ、俺たちはもうここで死ぬんだ。あきらめよう」

「ふざけんな、俺たちまで巻き込むんじゃない！」

「グラス、それはどうでもいいから早くアレをやってくれ」

待ちきれないとばかりにムラマサが急かす。既に彼女は戦場の空気に焦がれているのだ。

「さつきからアレアレってなに？　なにをやるんだ？」

「……うん、まあ見てりゃわかるから」

デュガの問いに答えるグラスのテンションは低いままだ。

グラスは杖を構え、精神を集中。霧散した生命情報を再構築する鮮烈かつ緻密なイメージを編む。

脳内のイメージを魔術の構成として魔力に乗せ、術式を構築。世界の理を打ち崩す「魔の術」を解き放つ。

『リザレクションエクストラ超高位蘇生術式解術』

杖から溢れる光の槍がムラマサを突き刺す。

入り口通路を吹き荒れ、乱舞する光芒、風、そして生命の気配。

呆然とその様を見守るデュガを始めとする部隊員たち。やがて光が晴れ、現れるはムラマサだった者。あるいはムラマサになった者。

自らの発する魔力の力場により、空をたゆたう長き黒髪。

人形の如く整い、細やかな白雪の肌と研ぎ澄まされた刀身のを思わせる眼差し。

胸元の間からサラシに包まれた形の良いバストが覗き、浴衣の裂け目からは均整の取れた手足、なだらかかつ女性的なラインを描く太ももなど生足が見える。

かつて東国で戦鬼と恐れられた千斬りの美姫が、再びこの世に顕現する。

「えええええッ！」「何アレ！？」「誰だこの美人！？」「ドツキリ？　ねえこれドツキリ！？」「ありえねえええッ！」

口々にリアクションを取る朱竜部隊。敵兵が来ても落ち着いていた彼らが完全に度肝を抜かれていた。

「なあ、ムラマサ、やっぱりその格好マズクね？」

ガラスの視線の先には浴衣の隙間から覗くムサマサ（生）の肢体。「どうせ三分だ。いちいち気にしては、ふあっ……へ……」

「へくちっ！」　凛々しい表情から意外なほど可愛らしいくしゃみをして鼻を押さえる。バツが悪そうに顔をしかめ、下がっていた浴衣の襟を胸元まで引き寄せた。やがて気恥ずかしげに呟く。

「……春でもこの格好は少し寒いか」

朱竜部隊の反撃はまだ始まったばかりだ。

黒騎士強襲死闘編九 道具は正しく使いましょう

「あだだだだッ！ アツい！ アツい！」

舞い散る火花の明かりが俺の顔と周囲を照らす。鉄焦げる臭いが鼻奥を突き刺した。

「離して！ 離してって！ 摩擦熱で背中がアツいいいいッ！」

術式加速により、流れてゆく通路の壁。紅騎士の後頭部と背中の装甲とこすれ合い、すり減りながら痕をつけられていく床。そして、鳴り響く摩擦音と重ねられた絶叫。

「うるっせえな、もうじき終点だよ。歯あ食いしばれ」

加速突撃術式により、紅騎士を引きずり倒しつつ通路を疾走。走り抜けた先に離れ館への頑丈に付錠された扉が見えた。

「めんどくせえ！」

勢いのまま、紅騎士を盾にする。

「キヤアアアッ！」

かん高い叫びと共に派手な破砕音を立て、扉を打ち破る。散乱する破片、金属部品、そして扉を作るため捧げられた職人の労力。

加速突撃術式を解除、紅騎士から飛び降りる。紅騎士は扉を突き破ったまま床をこすれ、壁にぶつかる。仰向けの体勢で動きが止まった。

死んだかな？

爪先で軽くこすく。壁に反響する小さな金属音。反応は無し。死んだか、気絶したか。

確認すんのもわずらわしい。っーかなんか得体しれないから触りたくない。

とりあえず紅騎士はほおつておいて、ベイルを確認せねば。

離れの中はやはり照明が切れ、真つ暗だ。暗い廊下を探る。「ベ
イイルツ！ 看守くんツ！ 死んでるか！？ 生きてるか！？
死んでたら『死にました』と菓子折りもって報告しに来い！ 最低
限のマナーだろ！」

「いやそれ死んでたらできませんよ、ギードさん！」

「だったらまずお前が先例を見せるクソガキ！」

廊下に並んだ幾つかの扉、その内の尋問室が開き、狼顔と禿頭が
顔を出す。どうやら無事なようだ。俺も胸をなで下ろした。

明かりの消えた尋問室に入り、互いの状況を聞いてみる。

「……なんだ、まだ生きてたか。看守くん、魔王様の話は聞いてい
るな？ 恐らく賊の目的はベイルだ。大方、口封じの暗殺狙いだろ」
緊張がやや緩和されたせいか、バタバタと看守くんの尻尾が振れ
る。

「いやー、僕も参りましたよ。看守役は僕しか居なかったもんです
から、明かり消してベイルと隠れてたんです」

「こいつ兵士なのに戦場にでた事が無いって言ってたから俺も不安
だったぞ。一般兵士で、朱竜部隊じゃないそうだし」

「僕が兵士になったのは戦争終わる直前だったんだから仕方ないだ
ろ！」

睨み合うタコと狼。また険悪になる二人をなだめつつ、今一番気
にかかる事を聞いてみる。

「実はこっちの離れ側へ向かった賊の別動隊が三人いるんだ。その
うち一人は通路、一人は入り口で倒した。

残り一人、見てないか？」

看守くんがキョトンとした顔をする。

「いえ、襲撃があつてから来た人はギードさんだけです。敵はこ
っちには来てないです」

「なんだと?.....」

三人いつぺんに通路を通ったんじゃないのか? 離れの外は魔術トラップだらけ、引つかかれば火力で黒焼き。解除しながらだと多大な時間がかかる。どこから来る気だ?

「とにかく、孤立するのはマズい。本館側へ行くぞ」

動こうとする俺を看守くんが止める。

「待って下さい。まだ一人いるなら、ベイルをこのまま連れていくのは交戦した場合、危険があります」

「そりゃそうだが、ここにとどまるのは.....」

「実は僕のロッカーには昼休みに同僚との運動用にボールが入っています」

「そういや看守ども、時々俺の監視サボって外で球蹴りしてるよな」

.....ベイル、それマジか?

「黙れタコ!.....とにかくそれを使うんですよ」

「いや、敵が来てるのに球蹴りしてても.....」

慌てかぶりを振る看守くん。

「違いますって! それを赤く塗るんですよ!」

「.....え?」

「.....は?」

俺とベイルが同時に呆けた声を出す。

「そこに目鼻を書いて、僕の予備の服をつけて吊らせば、ベイルの罠ができますよ!」

看守くん、君って奴は.....

「イケる! イケるぞ看守くん! 君は天才だ!」

「イケるわけねえだろバカ共! 真面目にやれよ!」

いやこれ結構イケると思うけどなあ。

「じゃあ看守くん、俺も一つ案がある。ベイルをこのままにしても危険がある。変装させよう」

「それはわかりますがギードさん、ここには変装道具は.....」

「それは心配無い」

この部屋には有る。必要最小限で最大の効果をもたらす変装道具の在処は既にわかっている。

俺は掃除用具のロッカーを開け、手を伸ばす。キーアイテムとなるそれを見つけ、しっかりと掴んだ。

「これを使うんだ！」

アンダースローの投げ方で「それ」を放り投げた。緩やかな放物線を描き、狙い通りベイルの頭上に「それ」が乗る。

「こ、これは！」

看守くんが驚きの声を上げた。

ベイルの頭上にはるは灰色の繊維質、即ち、

モップの代え（新品）

「スゴい！ 最小限の変装で最大の特徴を消してる！ ギードさん、あなたはひよつとして天才軍師とかの生まれ代わりですか！」

「ふふ、恐ろしい…… 俺は己の才能が何より恐ろしいよ……」

直立するベイルが冷めた視線で俺と看守くんのやりとりを見つめる。

「……なあ、お前ら余裕あるように見えるけど、実は結構テンパってるだろ？」

うるせえよタコ（ロン毛）。

黒騎士強襲死闘編九 道具は正しく使いましょう(後書き)

今回わかったこと。

- ・ 魔族の社会人ルールはちょっと厳しめ
- ・ 魔族の会話はノリ優先

黒騎士強襲死闘編十 旧友との再会が感動的とは限らない(前書き)

お待たせしました。

黒騎士強襲死闘編十 旧友との再会が感動的とは限らない

「まあ、とにかく」

こつそりと窓を窺う。暗視光学魔術によって明確化された映像から庭には人影は無い。

「早く移動しよう。まだ最後の一人は見えないようだしな」

俺の促しに二人も動き出す。

「じゃあ僕が先行しますから、次に毛ダコ、最後にギードさんがバツクアタック対策でついてきて下さい」

「ああ、わかった。看守くん、後ろから奇襲されたら俺のことはほつといて毛ダコ担いで逃げるんだぞ？ 足が早いのが君の種族のと見えなんだからな」

俺の忠告に看守くんの横顔がぐつと引き締まる。

「わかってますよ。でもギードさんも無茶はしないで下さい」

「……おい、お前ら、ナチュラルに人を毛ダコ呼ばわりするなよ！ ベイルの頭部には先ほどからモジャモジャとした繊維質、つまりモツプが居座っていた。俺は突っ込みながらも頭部へモツプを剥がそうと伸びるベイルの手を慌て掴む。

「バカ！ 取るなよ！ 変装バレルるだろ毛ダコ！」

釣られて看守くんもベイルを止める。

「そうだぞ毛ダコ！ 正体バレたらヤバいんだぞ！」

「毛ダコ毛ダコうるせええんだよお前ら！ こんなんで騙されるわけないだろ！ アレか？ 魔族は識別能力がニワトリ以下なのか？」

「んなわけないだろ！ ちゃんと見分けてるよ！」

俺は内心ギクリとする。ベイルの言っていることは三分一ほど当たっているからだ。

人族と見かけの近い魔人種や妖人種ならともかく、生物種がかなり違う獣人種は人族系の顔がいまいち判別が効かない。（実は人族系からみた獣人種もだいたいそうなのだが）

犬や猫の顔が判別できないように、大まかに年齢や性別はわかっても個人の判定が難しいのだ。

「だからくだくだやってないで、早くいけと……」

ズンッ

突如響く衝撃に言葉が途切れる。反射的に身構えた。

窓側、天井を破砕し、壁を真上から両断して走る何か。

轟音とともに壁や天井の破片が舞い散る。

な……んだ!?

壁の半ばまで表れた切断、というより粉碎に近い破壊痕。そして、

……柱?

やや斜めから見えていたため一瞬柱だと勘違いしたが、そうではない。刀身だ。広い幅と長さをもつ二メートルはある両刃の大剣が壁を突き破っていた。

「看守くんッ!」

俺の呼びかけより早く、看守くんがベイルをドアの外へ押し出す。

「おい! お前ら!」

「うるさい! とつとと逃げてろ!」

壁の亀裂から覗くヤツの姿に、俺も看守くんも本能で直感したのだ。こいつは強者だ。

剣が持ち上がり、亀裂から出て行く。今度は真横からもはや打撃に近い剣戦が走る。十字に巨大な亀裂が入り、次の瞬間には壁自体が崩壊した。

ポツカリと空いた壁の大穴、夜の空から刺す月明かりがそれを照らす。

二メートルを超える背丈。自らを照らす光さえ吸い尽くすような漆黒の全身甲冑。太ましい四肢、背中と太もも部についた機械。

前の緑や紅騎士とは明らかに違う強靭な体格だ。更に得物の大剣の重さからかなりの身体強化術式を使用していると思われる。

紅や緑とは明らかに違う、熟練の戦闘者としての威圧感がチリチリと肌を焦がす。

バカな！ コイツ外に腐るほど設置された魔術トラップをどう抜けてきたんだ！？ 爆発が無いということは作動してないはずだぞ！

「人族つてえのは、どいつもこいつも真面目に正面玄関から入る気が無いのか？」

「……ベイル・ギャレットはここに居るのか？」

皮肉を無視して、黒騎士が呟く。低く冷徹な印象を抱かせる中年の男の声。

やはり、狙いはベイルか！

俺は剣を取り出し正眼に構える。コイツはここで止めなければ。

「ギードさん、俺が先に仕掛けます！」

言葉より速く、疾風のように看守くんが駆けた。両の手に握られるは二降りの鈍のような蛮刀。

飛ぶように跳躍、同時に看守くんの体から魔術式が広がった。

「見切れるか！」

『多重投影幻身術式解術』

周囲に現れる、三体の看守くん。分霊のような実体ではなく、光学魔術による立体映像だ。しかし狼人種の脚力による高速移動と起動により映像と本体を見切ることは至難を極める。

それぞれが分散しながら壁や床を縦横に跳ね、疾走。二体が左右、一体が正面から切りかかる。しかし黒騎士には一切の動揺が見えない。その背中に後光のように魔術円が展開する。

『ハイ・イレイサー
魔術式構築無効化術式解術』

掲げられた左腕から水面に石を投ずるように波紋が発生、空間を震わせるように広がっていく。

波紋が通り過ぎた刹那、三体の看守くんが揺らぎ、消失。

「何ッ!？」

黒騎士の背部頭上から聞こえる看守くんの驚愕。立体映像三体を

囿に背後から飛びかかっていたのだ。

「避ける！ 看守くん！」

俺の声が虚しく響く。飛びかかった空中からでは避けるもへったくれも無い。

大剣が床を削りながら振られる。煙を上げ滑る剣先、途中引つかりそうな壁を豪快に断ち切りながら後ろへ振り向く。

障害物は関係無しか！

空中の看守くんへ逆袈裟に切り上げられる大剣が迫る。

「ふんッ！」

看守くんはとつさに蛮刀を十字に組み防御を取った。

しかし激突する大剣はやすやすと蛮刀二本をへし折る。

「うわああああっ！」

叫び声を上げ、跳ね上げられる看守くん。黒騎士の頭上を飛び越え、天井でバウンド。俺のすぐ近くの壁に激突した。

「看守ウウツ！！！」

黒騎士に警戒しつつ近づく。蛮刀はへし折れ、胸部鎧には亀裂。

両腕も折れているようだ。息も絶え絶えだが、幸い大剣の刃は貫通していない。……アバラの二、三本はイッてそうだけど。

「……………う、うあ」

横たわる看守くんが苦しげに声を出す。

「無理に喋るな！ じっとしてろ！」

「ギ、ギードさん……………」

「なんだ、どうしたんだ？」

「ま、前々から、思ってたんですけど…………… 僕の事、『看守くん』

としか呼んでくれないん、ですけどひょっとして、僕の名前、お、覚えてないんじゃない……………」

……………やべーバレた。

「な、なにを言ってるんだ？ そうか、ショックで錯乱してるのか。ここで安静にしているんだ！」

慌て立ち直り黒騎士へ向き直る。

「……絶対この人覚えてないよ」

看守くんの呟きを聞こえないふりをしながら、剣を構えた。

状況観察、魔術無効化術式装備、身体強化以外の体外に発動するタイプの術式は全て発動を阻害されるか、または無効化される。無効化術式の欠点は使用中は使用者の術式も無効化され使えなくなることだ。おそらく発動距離を体外に絞り、身体強化のみに特化した殴り合い上等の超近接型、真正銘のストロングタイプ。

外の魔術トラップも感知魔術を無効化してぐり抜けてきたのか。

「……答える、ベイル・ギャレットはここに居るのか？」

再び静かに黒騎士が問いかける。その声には感情らしき物は感じられない。

暗く、呑まれるような殺気。剣というよりは鉄の鈍器に近い大剣を壁や天井を粉碎しながら振り回すという非常識ぶりに果たしていかなる手段で対抗するべきか。

まあ、この状況じゃやれることは一つか。

「さあな、知らねえよあんなタコ面！」

捨てゼリフとともに踏み込みをかけた。黒騎士との距離を詰める。下段に構えられた黒騎士の大剣が迎撃のために跳ね上がった。噛みつこうとする巨人の顎のごとく振りかぶられる大剣。

「ふんッ！」

気合いと共に踏み込み、大上段、頭上からの打ち下ろしを放つ。

「ぬおおッ！」

身を右によじりながら粉碎の刃を回避。俺の真横、約三センチ先を死風が抜ける。背筋を走る寒気をこらえ狙うは黒騎士の左手首。

高周振動が使えなくても、近接から鎧の隙間をつけば！

しかし次の瞬間体勢がかしむ。打ちつけられた大剣により床が崩壊、破片に足を取られたのだ。

うおっ、やっべえッ！

「せいッ！」

引き抜かれた大剣が今度は横なぎ、左から右へ足を狙って振られた。とつさの判断で上へ跳躍。吹き抜ける超斬撃を避け……しまった！

俺が空中に飛び上がった時に、すでに黒騎士は左腕を振りかぶっていた。間髪入れず放たれる鉄甲の拳。

空中では回避出来ず、防御も間に合わず、吸い込まれるように俺の胸に。

「がッ！」

めり込む拳。乾いた叫びを上げ、後ろへ吹き飛ぶ。そこから先はゆっくりと見えた。しなる床へバウンドし、派手な音を立て壁にぶつかる。

「お、おふ、おぼ、」

胸に走る激痛に悶えながら、口中に広がるエグい酸味、胃液を床に吐き捨てた。頭部を強打するのは回避できたため意識はまだある。……いやもうこのまま寝てたいけど。

……アバラが二、三イッたか？

痛みと衝撃で体が動かない。こりゃ本格的にヤバいぞ。

寝転がったまま黒騎士の方を見る。ゆっくりとした動作で一步、また一步確実に瓦礫を踏みしめ近づいてくる。

この死に神が！

ピタリ、と歩みを止めた。場所は看守くんのすぐ近く。

おい、まさか待てお前ッ！

大剣を振りかぶる。真下には看守くん。彼の表情にはすでに諦めが見えていた。

ふっ、ふざけんなよ！

力を振り絞る。ふらつく意識を押さえつけ、這いつくばりながら声を出す。

「ま、待てよ、お前、やら、せるかよ」

横隔膜がうまく動かずか細い声しか出ない。体もマトモには動かない。それでも、それだけはやらせるかよ。

気づいたのか、黒騎士の装甲に包まれた頭部がこちらを向いた。

「……ベイル・ギャレットはどこだ？」

またあの寒々しい声。コイツは本当はこれしか言えないのか？

「答える、三」

突如始まるカウント。まさかお前！

「二」

床をかきむしる。体を立たせるため四肢に力を込める。それでも立ち上がれない。立ち上がれない！

「一」

止める！ 止める！ 止めてくれ！

「よお、俺に用があるのかい？」

声が響き、ドアが勢いよく開かれる。痩身、鷲鼻、そしてモップ。それは本来ここにはいてはいけない男。そう、そいつは、

「な、何しにきてんだよお前は！」

ベイル・ギャレットがドアを開け佇んでいる。てっおい、逃げて無かったのか！？

「そのあんちゃん二人組な、日頃給料が少なえとか愚痴吐いてるただの下っ端なんだ。だからあんまいじめてやるなよ。 シ
ユバルト・ガリイ？」

ベイルの呟いた名前、シユバルト・ガリイに黒騎士がピクリと反応を示した。……なんでベイルがコイツを知ってるんだよ！？

懐かしげに、どこか寂しげにベイルは微笑む。すぐそこに立ちふさがる死に臆することなく歩を進めた。

「お前みたいにバカデカイ剣振り回すタイプなんかそう何人もいる

かよ。それに太刀筋だつて覚えてるんだ、魔導鎧着込んでたつてわかるさ。こつやつてツラ会わすのは除隊式以来か？」

魔導鎧？ 除隊式？ ベイルはあの黒騎士とどういう関係なんだ？ つつか除隊式つてことはベイルは元軍属ということに……

「まあ、積もる話もあるがゆっくりもできんかシュバルト？」

「……………」

親しげなベイルの問いに沈黙を通す黒騎士。

「相変わらず、無口だなお前は」

「……………」

やがて、黒騎士はかしいだ音を立て首をひねり、困惑気味に訪ねた。

「……………失礼ですが、どこのどなたですか？」

「……………あああつ！！ もうっ！ ドチクシヨウツ！」

泣きわめきながらベイルが頭のモップを掴み床に投げ捨てた。バタバタと床を転がるモップ。バカせっかくバレてないのに取るなよ！

露わになったベイルの頭皮を見て、黒騎士がその正体に気づく。

「お前は…………… ベイル・ギャレット！」

「だから最初からそうだつて言つてんだるボケ！」

まあ、これはしょうがねえよベイル。

黒騎士強襲死闘編十一　うちの上司は現場主義（前書き）

お待たせしました

「……とにかく、俺の事はまだ覚えてたみたいだな、シュバルト」

転がるモップから散らばるホコリ、崩れた壁から刺す月明かりがそれを照らす。

「……忘れるものが、お前のような男にはそうは会えん。そして、」

鈍い音を立て、大剣が床に突き刺さる。その様は正しく柱としか言いようが無い。

「この作戦の目的は、紛れもなくベイル、お前なのだからな」

「やっぱそれか！」

これで確信する。あの黒鎧、シュバルトの目的はベイルの暗殺による口封じだ。このままじゃマズい！

歯を食いしばり足に力を込める。ベイルと喋っているうちにダメージを回復しなければ。

「ま、そんなもんかと思っただぜ。それでも見ず知らずのやつに殺されるよりはマシか」

どこか悟ったようにベイルが微笑む。その顔にはすでに死を決した覚悟が見えた。

クソ、んな簡単に諦めてんじゃねえぞタコハゲ！

「 ベイル、私はお前を殺しに来たのではない。この作戦の目的は救出だ」

一瞬、言葉を失う。コイツらはベイルを殺すつもりではなく助けるつもりだったのか？

「ベイル、私と共に来い。国へ帰るぞ」

黒手甲に包まれた、太い左腕を差し出す。この手を掴めといわんばかりに。

「……どういう風の吹き回しかいまいちわかんねえな。俺を消す気がないっていうのか？」

「大人しく来れば、生命と安全は私が保証する。魔族の城にいるよりはよほどお前にとって（……）安全なはずだ」

ベイルにとって？ 　　うちは捕虜の扱いはちゃんとしてるぞ！

しばしの沈黙、その後にはベイルが口を開く。

「……いや、俺は行かない。軍は前からキライだったが、おかげで反吐が出るほどキライになったからな。それによ、魔族魔族と帝国はいうが、」

掘りの深い顔立ち、その奥の目に決意の光が宿る。

「慣れてみりゃあ、存外に悪いもんじゃない国だ。……俺はこの取り調べ室ぐらいしかロクに見てねえけどな」

はつきりとした拒絶。帰らないという意思。ベイルは寸鉄一つ帯びない身で、巨漢の黒騎士と向き合い、意志をしめしている。

ベイルのヤツ、まさか、

俺にはおぼろげに理解出来た。なぜベイルが帰国を拒むか。

団員達のためか！

団員二人は国外に送られると決定はしたが、実際に送られるのは二週間後だ。自分一人が脱出すれば、それが撤回される可能性がある。

この男は最後まで逃げない気なのだ。

「……ベイル、それがお前の決断か」

黒騎士がゆっくりと大剣を引き抜く。己の頭上へと、天を貫くように掲げる。

「脱出に応じない場合は、暗殺対象に切り替えると命じられている。それでもお前は……」

その声は未だに感情の色が見えない。

斬る気かよ！

ベイルの微笑みに、寂しさが強まって見えた。また一步、足を踏み出す。紛れもなく、この男は、

「結局それかよ。ま、そんなもんだよな俺らの国は。やれ

よ、別にお前を恨むつもりはないさ」

生きる事を捨てている。

「……ベイル、私を恨め。私に怒れ。私を唾棄しろ。それ以外、私が背負える物は無い。それ以外は無いんだ」

初めて、黒騎士に感情が見えた。苦渋と共に大切な物を消そうとする感情だ。

止める、止める止めるッ！

もがきながら力を入れるが上手く立ち上がれない。ダメージがまだ回復していない。ベイルを、あの男を死なせたくない、任務だからとか、証言のためだからじゃなく、ただ純粹にあの男を、自らを犠牲に戦おうとする人間を死なせたくないんだッ！

死と生を分かť断線がきらめく。その刃はただ鉄塊としか見えず。

「止めるッ、止めるおおおおっ!!」

ゴオオオンッ!!

ッ! 今度はなんだ!

突如、巨大な轟音と振動が建物を揺らす。黒騎士の刃が途中で停止した。

この振動は……ッ!

発信元は頭上、おそらくは建物の真上。そしてこの轟音には戦場で覚えがあった。

加速魔術による音速を、魔術による緊急停止で止めた時に分散した衝撃「ソニックウェーブ」だ!

この城で今いる中でそれが出来る人材は、魔王様を除いて一人しかない。

「ベイイルッ! そこから下がれ、下敷きになるぞ!」

「な、なんだ!?!」

俺の呼びかけに、本能的にベイルが飛び退く。

次の瞬間、派手な音を立てて天井の一部が崩落、舞い散る破片の中、巨大な塊が床に突き刺さった。

「……何物か」

剣を構えたまま、感情の無い声で黒騎士が墜ちてきた塊に呼びかける。

やがて塊がゆっくりと伸びる 否、立ち上がる。片膝を着いた体勢で塊は着地していたからだ。

その太ましい四肢。大きいを通り過ぎ既に丸い腹周り。頑強な首。全身をくまなく覆う甲冑には、金による線が埋め込まれている。

鬼「オーガ」を模した兜面、その脇には二本の牙が突きだしていた。場の空気を飲み込むほど、鬨気としか表現出来ない熱をまとっている。

その巨岩の如き武人に覚えがあった。顔が見えずとも、体型を見ればいやでもわかる。

「隊長ッ！」

「っ！ ギードか、ベイルはまだ生きているのか？」

俺を一瞥する隊長。状況を知るため即座に声をかけてきた。

「は、はい！ 隊長の後ろにいます！」

「そうか」

黒騎士を前に、堂々と構える隊長。

「魔王様が『自分が出る』と言い張っておつてな。仕方なく事態を早期収束のため、魔王様の説得を他の部下に任せ、私が出張ってきたというわけだ」

あ、この人魔王様説得するのめんどくさくなってこっち逃げてきたな。

「デスクワークばかりは体がなまるな。やはりたまには動いたほうが……ん？」

自分の両手のひらを見つめ、隊長が一瞬押し黙る。

「あ、急いでて武器忘れた」

隊長オオオオオツ！？

黒騎士強襲編十二 力押しを舐めてはいけない(前書き)

なんかスゴいお待たせして申し訳ないです。

黒騎士強襲編十二 力押しを舐めてはいけない

空気を震わせる振動とともに、黒騎士シュバルトが空けた壁の向こう、留置場の外で立て続けに爆炎が上がる。

恐らく、音速を超える、電磁加速式突撃術式で留置場の真上に飛んできた隊長に反応したのだろう。隊長の速度が速すぎるため、爆発が間に合わなかったらしい。

燃え盛る幾つもの炎柱、発せられる業火の光が闇と、黒騎士と、隊長の凶相を照らす。

「ちよ、隊長オツ!?!」

思わず声が出た。剣を杖に、背をきしませながらなんとか立ち上がる。大剣を正眼に構える黒騎士ことシュバルト、一方全身甲冑を装備しているとはいえ、徒手空拳の隊長。体格は二メートル以上の身長と魔族でも重量級の体重を持つゴロン隊長が上回っているが、得物の有る無しの差は確実に大きい。

「……どうやら、部下がかなり世話になったようだな。客人よ」

無手のまま、構えもせずに隊長が黒騎士に語りかける。その態度には一切の動揺は無い。まるでいくらでも修正の効くミスだとも言つように。

「金線の鎧をまとうグランオーク……まさかこんなところである『雷神』と出会うとはな。引退はしていなかったというわけか」

一方、大剣を正眼に構える黒騎士には余裕は見えない。元々感情が薄そうなヤツだったが、わずかに焦りが見える。

ていつか『雷神』て何？

「若い時は『雷神』だの『黄金鬼』だの色々気恥ずかしい通り名で言われたが、今じゃ老いぼれてただの城番だ。それよりもなあ、客人。」

魔族流のもてなし、たつぷりと味わって貰おうか」

はじめて隊長が構える。甲を前面に左右の手を前へ出す。顎を引き、丸いシルエツトの上半を後ろへ反らす。

あれは……

訓練兵時代、徒手格闘の技法としてならう拳闘はもつともポピュラーな技術だ。しかし俺が習った拳闘の構えは上半を前に、左右の拳は前面をガードするように構える物だ。あの構えは格闘技史の授業で見た最古の拳闘の構え。防具無しでやるのが基本だった時代の遺物。

古！ 構え古ッ！

俗に言う「^{ヘアナックル}裸拳」の構え（フォーム）。たしかに隊長の体格とあの岩のような拳なら振るうだけで十分な武器だ。しかしあの黒騎士もただ者ではない。

無言で隊長が踏み込む。体重で床が音を立てて割れ、煙が上がる。前側に構えた左腕にまとわれる紫電、絡みつく雷が魔術円を構成。

あれは電磁加速拳撃術式、音速を越える拳速は一度放たれば回避も防御も不可能だ。だが、

「ダメだ隊長！ そいつには……」

俺が言い終わるよりはやく黒騎士の背中に魔術円が展開、隊長の

術式とほぼ同時に発動。

『マストライヴナックル
電磁超加速拳撃術式解術』

『ハイ・イレイザー
魔術式構築無効化術式解術』

黒騎士の左腕から放たれる空間波動、即座に隊長の術式を破壊、無効化していく。急激に加速が落ちる左拳。

「ぬんッ！」

しかし隊長の動作に変化は無い。そのまま一気に轟拳を振り抜いた。

とつさに大剣を盾に拳を受け止める黒騎士。だが勢いを殺せず、その体が後ろへ吹き飛ばされる。

「ぬおおッ！」

脚を床に擦らせながら着地、再び構え直す。大剣には隊長の巨拳の痕が残っていた。いける！ 魔術無しでも圧倒してるぞ！

「無効化術式と身体強化による接近戦重視型か」

構えたまま隊長が呟く。暗闇に隊長の隻眼が光る。

「なかなか思いきつた戦い方だ。私は嫌いではないぞ、そういうやり方はな。 ギードよ」

「はっ、はい！」

いきなり名前を呼ばれ、思わずキョドった。

「一つレクチャーしてやろう。こういう無効化術式使いへの対処方は大きく分けて三つある。」

一つは大規模魔術で無効化を無視して吹き飛ばす。

二つめは援護役に頼んで無効化術式発動阻害術式を撃たせて更に無効化させる」

たしかに力で吹き飛ばすか、専用の魔術で無効化するかが有力な方法だ。だが今その方法を使える戦力は近くにいない。

「そして三つめ、魔術は諦めて、単純に肉体でケリをつける」

やっぱりそうですか。ていうか、それ隊長以外ムリッスよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378o/>

聖剣伝

2011年10月29日19時03分発行